

り手衆にもそう申しして親かたさんへも咄しいましたら親方の御言なはるゝにも何もそんな事は少しも心配する事はない外の子供とも違ひ三歳の時から育て上實の子のやうにも思つてゐるあれが事又けふが日迄も外の子供の倍ヅ、もかせいで呉た事何の十月や一年小遣ひを遣はせて遊ばせて置てもいゝから決してそんな事は氣に志づに早く病氣を直して身がるになるさんだんをするがいゝと能そういゝとやさしい親方の心もちほんに私にしても嬉しうあり升は夫だから彼の事なんぞはどうでもいゝと思つて一日も早くよう成様に志なましよう私だつて幼少内から御まはんには大そう御世話になりいした身ざますから親よりも大事だとふだん思つて居ますおまはんは萬一の事でもあつた日には私も死升よいらんなぜそんな弱い氣になつてくんなましたらふ子へとふどの端に打臥て涙にくるゝも同様な舞鶴も共に涙を目にうかべつゝ「ほんによく言ておくんな升た親方もそうやさしくいつておくんなはるなら何も私も氣にも志ませんが見そくなつたアの傳さんそれに引かへ御まはんの深節ほんに死でも 町「あれさ又そんな事を言なますへつゝ」テ、そう志ましたつけ子へたとへ素人に成た上もきつと御まはんのやさしい心いきは忘れへせんもありがどうぞます 町「何の禮に及いせう夫程に私の事を思つておくんなはるなら是からいやアナ事をいわず一日も早く直る様にしておくんましようおいらんつゝ」是から御まはんの異見に附て一日も早く直る様に神心でも志ませうよ 町「どうぞ御せうだからそふ

してくんなましようつゝ」そう志ますよそれはそうと子 町「何ぞますへつゝ」翌日も私が萬一傳さんの所へ行様になるかも知れへせんがそふしたらつまらないものばかりが志ますがおまはんにあげへすから私のかたみだと思つてくんなましよう夫からかみと中ざしは鶴治に遣てくんなましよう又そんな事を言なますそうなつた時は其時の事であろうとアテどうも氣になる事計り御言なますよどうぞそんな弱い心持を取直てくんなましようおいらん私だつても今言通りの心持ぞますから子是迄は申いすまいと思ひゝ志たが私はつゝ「エ 町「夜の八ツになると水を浴て御祖師様を信心志てどうぞ主の病氣の直る様に傳さんも其内來る様にと願ますは是までに私は思ひに思つて居升のを主は少しも察しておくんまませんで色々氣になる事ばかり言なますのは誠に〜恨みぞます子へどうぞあつてもおいらん其氣なら私も是形にと跡は涙にむせかへる舞鶴も涙を拂ふてつゝ「鶴町さん〜マア機嫌を直してくんなましよう私が悪う志ましたからよと共に涙にくれけるが暫くあつてつゝ「鶴町さん 町「ハイつゝ」どうぞ堪忍してくんなましよう〜急度心を取直して主の言通りに致しすからどうぞかんにんしておくんなましよう 町「アレサ何もそんなにあやまりなます事はありませんようもう〜私の言事さへ聞てくんなませば譬へこの上喰る物をたべないでもようぞますどうぞ早く直る様に氣を取直してくんなましよう志ん身も及ばぬ心根を打明したる物語りに二人は鼻を打かみて居る所へ此二階にてひようきんものと呼ぶ



松野障子を明けて 松「へいおいらん御不快いかいでござへやす子町つる」ヲホ、、、さアこ  
つちえ御這入なましちつとばい、やうござます 松「夫は先日目出どうなる時に御兩人又傳印の咄か  
なんぞで涙ぐんで居る子およし」とも泣なら客人を何した時にあもうさま泣いて御覽夫こそ  
御客は押かへされ子へ程来る御金もどんと呉るとさアハ、、、ヲホ、、、つる」そう志ませ  
らよ 松「そうおしそうおし私は悪い事ははいないよヲ私と志た事が大事な事を咄に來て馬鹿  
斗りいつていたよ外のこつちやない私の夕部の客人は初會で子其何の大きい事、兩手でやつ  
と抱込だが息ははづむ廻りはいたしつる」ヲホ、、、 松「ほんとうござますよほんにみりんも  
鯉節もつかはないで誠にうまいものだがア、大口に喰ては甘みもなんにも志れない子へ兩人「ヲ  
ホ、、、 松「夫から其御客がふいとおいらいんの事を言出し志たから色々咄を志て見たら傳  
さんの近所の者でありました子夫から傳さんの事も能々聞いたら實に此節は來られ子へわけ  
ござますよつる」ヲ眞實だますかへ嬉しい子へ 松「あのまア正直な事ほんとうござますかへどあき  
れる子へ傳さんは餘程何所かいと見へる子へつる」志りいせんよ 松「おつうおつしやるよそん  
なら私も傳さんの事は志りいせんよつる」堪忍志なまし知てぬ升よ 松「夫じやアどういふ鹽梅に  
傳さんのはようござますへつる」夫は堪忍してくんなましよう 松「言てお聞かせなましよ 町「私の  
客人の事もわけすけに咄しい志たは子のふ鶴町さん 町「ヲホ、、、、どうぞそんな咄より傳さ

んの事を言ておきかせなましよ 松「エ、おまはん迄傳さん、ときつのおか心酔だよおまはん  
こそ傳さんの何所がい、か知りもしねへで岡ぼれを志たんだようふけへきな男がよくつても金  
があつても私なんぞは夫にはほれへせん味の美のが一番ござます子へおいらいんつる」志りいせんよ  
松「傳さんの事も志りいせんようつる」あれさ志らさずに咄なましよう 松「夫志やア傳さんのい  
、所を咄なましつる」夫はきつと跡でよく咄しいすからまア傳さんの事を咄しなましよ 松「私  
は聞かけた事を夫形にして置と痲病になるとい、升からいやござますよ夫でなくつても夕ア大き  
いのを二本とまで賞翫志たもんござますからまだ小用に行くどひり、志み升は其痛いのも我慢  
したもみんな傳さんの事を能く聞ておいらいんに喜ばせたいばつかりござますせなんと實のある松  
野さませう子つる」ほんに有がたうござますとてもの御心節序にどうぞおがみたいすから咄聞せ  
なまし 松「夫程にい、なますなら咄しいせう先傳さんが昔、から小俊といふ藝者に首ツ丈  
ケでねつけつ廻しつ口説ても言事を聞かないやつさ其内ふいと此家へ來た所が主が其小俊に罵  
二ツというやうでいと喰い込だのさ夫はそれで又傳さんの御出入屋敷の旦那が其傳さんの口  
説た小俊にひどくほれ込で子ある日けんもんの座敷へ小俊を呼んで傳さんに小俊を取持てくれ  
と頼んだから傳さんも仕方なしに脇の座敷へ小俊をよんで咄しを志た所がどうしてもどく志ん  
しないツサつる」さうござませう傳さんへ對してもうんと言れへせんねへそれからどふ志ましたと



へ「松」夫から傳さんも何分今日がけふといふ譯にもいけませんから先御心長になさいませう  
 かいたしませうといつて置たとさつる「夫からへ「松」夫から傳さんが用があつて下へ行と小俊が  
 追かけて来て予傳さんをつかまへておまはんと言御方もあんまりだ常々やさしく言ておくんな  
 はる事さへうんといへませんものを何のつけにあんな屋敷衆なんぞの言事を聞升ものかどか何  
 どかいふ事で予こそ〜咄してゐる所を其屋敷衆が見て予ふといやつだあれが頼んだ事の出来  
 予へのも元々二人がち〜くり合てゐるからのこつたといふ腹立で夫から大喧嘩になつて出入を  
 止るといふさわざに成たツサそうすると傳さんの親父さんがどうも爰で出入を止られてはつが  
 ふがわりいからと言て先傳さんを勘當して御屋しきへ言譯をやつと志たんだから勘當とはい  
 ものゝ表向のかんどうではないんだハチさうすると其小俊が私の事で勘當に成ては濟ない是か  
 ら私がどこ迄も見繼ぎと言て近所へかくまつて置とさ其内に傳さんの御とつさんがある晩だれに  
 か殺されて御金を五百兩とられたといふ其さわざで勘當も何もめつちやくちやに成て傳さんも  
 内へ歸つたが其事で毎日〜今に取こんで居さつしやるから夫で來つしやらないんだからかん  
 にんしてやりなましようつる「チャもう誠に難有う夫ですつぱりわかりいした「松」夫から私の客  
 人がきのふ湯で傳さんに逢たから兼ておいらんどの譯も噺で聞て居たから此節の御取込では定  
 めて鶴屋へも御お精だらふとせうだんを云たら傳さんが予つる「何と云升たとへ「松」あれさ今咄

しいすハチつる「せきなますナ「松」あきれ升よおまはんこそせかずに御聞なはいよ兩人「チャホ、  
 へ、松」傳さんの言にハチ是非〜鶴屋へも行かなくつては義理が悪いが何分この取込が少し  
 方付なくつては一寸もいかれ予へから若し鶴屋へ行たら其内きつと行と能く事傳をして呉れと  
 頼みいしたとさ實があらつしやる予へつる「嬉しい予へ松野さん誠に有がたう翌日は出勤しませ  
 うや「松」チャもうあきれ歸る予へ其話から私のひようきんだといふ事も傳さんが咄たもんだか  
 ら夕部名ざしで葛葉から來たんだまさア予つる「ほんどうござますかへ「松」何虚言をつきいすもの  
 カ予うそならあの客人が來たら知らせへすから來て直に聞て見なましよ折りから障子の外にマ  
 若者「松野さん〜「松」アイ今いくよつる「客人ござますかへ「松」よく來る店衆の茂さんであります  
 ハア予さ様ならつる「おたのしみござます「松」おくるしみござますよおやかましよう上ぞうりの音バ々  
 〳〳〳〳〳〳

川里の花春秋二季種五編卷之中終



里の花春秋二季種五編卷之下

東都 竹菴梅彦戯著

第二十七段

商人「そばウハイ、引そばア志つばくねぎ南ばん宜う風鈴の音チリン／＼／＼犬の聲ワン、／＼、戸の明く音がラ／＼／＼」花「それぞヤア氣を付て御歸りなはいよ」佐「よし／＼」花「チヤ知れませんかへ」佐「知たとも／＼能く志れたお花」花「ハイ」佐「きつと又た來るぜよく是迄」花「エ、深切に志て呉れたチア」花「今改めて何のこつてムイ升チ」佐「何も吉／＼チ、酔た／＼」花「そ、ならば留て御出なはいよう」佐「イヤ又來やう邪魔なやつと思はるゝも」花「チヤおかア志な事を、御言なはい升チへ誰が邪魔なやつと」佐「何の事だ爰へ猫が出て來おつたから邪魔なやつと言ふたのよ夫を又氣にかけるとは」花「何も氣にも志ませんが」佐「すねに底持ちヤアナ」花「エ／＼いり戸の音バツタリ」花「左様ならと奥へお花は引込で」花「エ、馬鹿野郎めぐち／＼可笑な事を言アがるか今夜半印か内に居たのをけどつた志ら酒宴内けどつた様子もなかつたがエ、たどへけどらうと儘の皮とは言ふものゝ其邊に立聞でも志てゐちヤア面倒だ今にそつと見て來て置うチ

下之卷編五種季二秋春

「寒い／＼どれ火でも澤山につごふ火をふく音フウ、／＼、そつと戸棚を明る音スウ、／＼、引半「エ、せつね／＼」小便はつまる痰は出さうになるおまけにかけものか薄ひからく志やみが出かけそうでいやもう」花「アレサ何をぐす／＼いふんだへ志づかにおしよ」半「まだ得手がそこらに居るのか」花「何居やア志めへかどふも少しかんくつた様子だから今にそこらを見て來てゆつくり呑ふよそれ迄だまつて居なよそうぞうしい」半「承知／＼あわゝだが誠に寒くつて／＼ひどい目に相の山なら島さんこんさん中のりさんだつた」花「弱イ男だのふ鮒や金魚は寒のうちも水の中に居るアナ」半「ハイ／＼御めへは物知りだ今孔子というんだらうアハ、／＼、花「あれさ又大きな聲をするよどれ見て來やうとそつと表の戸を明け出て行跡に半七そこらを方付ながら」半「チ、やつと人心が附だ様だがまだ戦く／＼志ヤアがる時にお花は何所へ行たんだらう何のつけにそこらにまごつて居るものかと獨つぶやき居る所へ」花「チ、寒い／＼ふるへ上る様で齒の根も合ねへやうだ」半「弱へ事をいふのふ鮒や金魚は寒の内水の中にいらアナ」花「チヤ敵きをどられたのふアレおときよア、寒ひ」半「ひどい事をするのふサアかんが附たぜ」花「アイ半「夫でか」花「い、ヤアチあつとあり升／＼チ、甘いサア」半「是ぞヤア恐れる」花「弱い事をいふねへうはばみは人さへ呑はね」半「又か」花「チホ、／＼、半「居ないかゑては」花「ようく見て來たがゐないは」半「雪隠にでも居は志ねへか」花「そこらにぬかりがあるものかチ」半「イヨ孔明孔



明 花「そんな事を言て居ずとはやく御呑な 半「せつかちだナアそれ香かへ 花「ハイ〜チ、甘  
 ひ是さ半さん其の床をようくふるつて引くり返して引いておくれなイヤな匂ひがするからよ  
 半「い〜ヤアナ 花「よかアないよ 半「ハイ〜 畏まり升た 花「精出して働きぬへ來年は重年を言  
 つけて給金は壹分増てやらふよ 半「べらぼうめへ 花「ア、べらぼうにほれたやつは猶べらぼう  
 だア 半「似たもの夫婦といふからべらぼう同士もよからふ子 花「イヨ、いヨ、孔明大明神様  
 だ 半「又敵打か 花「可笑しひ子へ敵打〜と言ふ事が是で二度出た子へ 半「三度の神は正直だ  
 といふぜ 花「夫だつて敵を打事もなけりヤア敵を討れる覺へも子へはなそりヤアそうともう一  
 ツついでおくれな 半「又呑のよもう酒はないとこだぜ 花「もつとおつぎな 半「もう止子へナ  
 花「それもそうかね親父の異見に附て寐まちやぶことうじとしようか 半「そりヤア志やれか間違  
 ひかアハ、い、い、どれおれも寐んぬ志やうほんに寒い晩だナアどつこいなエ、寐る程樂はなき  
 物をだ 花「チャあめへは中〜歌よみだのふサア一ふくおあがりな 半「チ、難有し〜ぐずぐ  
 ずまていずと早く寐子へ 花「今寐るよさ野暮に床いそぎをするのふどれ手水に行て來よふと様  
 類へ立出て 花「何だか今夜は大そう犬がなくのふ 半「さかりが附たんだア 花「あめへに似ての  
 ふ 半「わらかすのふ 花「チ、寒い風だハイ御面なはいまし 半「チ、冷たひ五躰だのふどれあつ  
 ためてやらふ 花「どかく御めへに限るのふ 半「とはいふもの、且つくといちや〜するのを戸

棚で開てゐるには恐れ入山だナア 花「おいて御くれうそで堅めた捨言葉を言ふのも皆なお前故  
 だアチ 半「そうでもあらふが實につらいぜそれはそうと今夜何を歸りがけにぐず〜言たんだ  
 花「ろくに覺へても居子へがねどふも少しかん付た様子だアチ 半「ぼろの出ぬへ内にづいどく  
 寺どやらかそうか 花「まだい〜ヤアチ夫に正印の方も少し手くだがあるからマア斯していて愈  
 よ是切の幕で又巢を替やうハサ 半「夫もそうよのふエ、こう志ねへな 花「アレサめづらしくも  
 子へ 半「あめへはめづらしくもなかるふがあらアそうはいかねへ 花「何のいくら喰たつて生が  
 いやだと思つて居る仕事だからうるさくつてきたならしいくつていけないハチ 半「とは言もの  
 いたまには志んみり喰付事もあるだらふ 花「あめへにかへ 半「且つくにさ 花「止ておくれきざ  
 だよう 半「チ、ひどひ事をするのふなんぼ御前にまかせた五躰だつてそういけぞんぜいにし  
 もらふめへせ 花「堪忍おしよ 半「かんにんするからこう志ねへ 花「エ、あれさ是を此方へあや  
 りよ半さんあれさ夫じヤアいけないよう 半「マアい〜ヤアナ 花「あれさよかアないよういつも  
 の様にしておくれといふにさ人ぢらしたのふと跡は二人がはなしも止切て夜も深〜どふけ渡  
 る頃しもはづれる勝手の戸バツタリ此物音に兩人はびつくり志て親を上ればこはいかに先に歸  
 りし佐藤太が聲をあら〜げ 花「うぬ等是まで能くも甘〜だまし居つたナサア此上は兩人とも  
 兩人〜、佐「なぶり殺したかんぬん志ろと水も溜らぬだんびら物を半七眼がけてぬきつくれば



お花も何かためらふべき有合ふ火入をはつたと投ればさそくの眼つぶし佐藤太がよろめく所を  
 半七は一生懸命飛付て刀持手を走つかと押へ取られむ取んとせり合しが終に刀を奪ひとる佐藤  
 太是はと脇ざしぬいて立むかひ火ばなをちらしてたゝかひしが終に半七みけんの所をはつしと  
 切られはやかなはじとつき込込は佐藤太の腹へぐつさど突込だりさすがの佐藤太かゝる深手に  
 何かはもつてたまるべきまゝ居にどうと倒れける半七お花は顔を見合せ手ぬぐひ取てみけんの  
 疵を走つかと押へ 半「お花 花」エ、半「うつかり爰にはもう居られぬ 花」ホニ是からサ、一  
 所に立上れば佐藤太是を聞付てよろめきながらに 佐「うぬをやつては 半」エ、何をぐずぐず  
 ぬかすのだと力にまかせて突たをし表の方へと出る跡から頭巾まぶかに顔を隠せし壹人の男  
 久「やれまて半七 半」エ、久「イヤ遠慮あるものではなひ算て見れば三年あど田舎へ歸るその時  
 に其方を頼んだ久兵衛ぢや 半」どふしてあなたがこの所へ 久「不審は尤もマア内へ這入がよい  
 半」少しわけがムリ升て是から直に 久「逃るといふのか夫には及ばぬサア内へと無理にふたり  
 を内へおし入座に附て 久「さて先達ては長々の道中よう心つけて下されて忝のふムリ升其節鳥  
 渡つまんではなして置た其事わけを猶くはしく言ふて聞せんその爲にわざ／＼遠路の所を東西  
 南北と尋歩行尋當れば今宵の始末夫に付てもわしが折能く來たゆへに其方も人殺と人／＼にも  
 言れずといふばかりにては不審は尤も私は元大坂の町人有福といふにはあらねど可なりに暮し

て居た者だが物にかけ目はある習ひ五人六人の子をもうけても壹人として育たばこそ皆二歳と  
 迄は生て居ずその内又も一人の男子をもふけたれど是ばかりはどふかして生ながらへて三才と  
 なりしが誠に病身にて行々育とふとは思ひえず案事くらして居るうちにふと堀川の支配人傳右  
 衛門といふ人が壹人の男子あれど妻なくして困じはてゝ居るを見てエ、わしの子がなくてなげ  
 き傳右衛門殿は子のあるをなげく世の中はさておつなものと噂して居る所へかの傳右衛門どの  
 がござられたのが縁のはし世の中のはなしからして私が悴は病身にてとても人にはならふと思  
 はずどふぞそなたの御子息を養子に私に下されいかゝり子にいたしますと無理にもらふたは則  
 ちそなた 半「エ、久「それからして傳右衛門殿は次第に立身私は又する事なす事いすかのはし  
 と喰違ひ落ぶれ切て其日をおくる事さへ出來ぬを色／＼と世話して下さるは傳右衛門どの其内  
 に傳右衛門殿は江戸の御店相續と極た時に私を呼で言はるゝには扱わしも元々難澁した時は何  
 かど世話に成ましたが今は私も及ばすながら其方を世話にする是世の中の貧福の廻り舞臺じや  
 と思ふて決して苦勞にさつしやるな又悴めは其方の丹精にて脊丈けを延し給はりし事何と私の  
 申様もない夫に付ても此度の江戸行當分御目にもかゝり升まい随分まめでと涙をふき／＼言る  
 ゝにはどうぞ其方の悴をわしが養子にくれいとの達ての頼み其時私がいふには夫では義理が立  
 ぬ其方の實子を御歸しもふさんと言たらは傳右衛門殿が言葉を改め一旦養子として脊丈けを延



した恩を忘れ今わしが身の上が能く成たから取戻すとそんな卑劣な傳右衛門ではムらぬ古しは有福なそなた天運つたなく今は貧なりといへど又も福を得たもふは必然の事御不足でもムらうが是非養子にと理にせめられて養子にやつたは此久兵衛の實子の久次今は傳兵衛何とわかつたであらふかの 半「エ、そんなら私の養父と申はあなた様エ、御なつかしうムり升た 久「チ、能いふて呉た其後私はする事なす事いすかのはしと喰違ひて次第に貧苦に身をせめられエ、こうしては濟ぬわけエ、傳右衛門どのへ義理がた、ぬと齒がみをなせど後より飢かつのなん儀無據義理をかきてそなたを江戸エ丁稚奉公 半「チ、そふ伺つて私の身分の事も分りました 久「其後薄く様子を聞ば實躰に能く勤て居るとの蔭ながら喜んで居た甲斐もなく去るげい者とやらに深くなじみ大まいの引負とやら私もびつくり仰天したが夫から先は何所へどふ行たやら様子をわからずあんじ暮して居た内にふと江戸へ來ての戻りがけ手代様のものを連れねば商賣の志にくるわけ頼んでいつた其人は見覺のある顔の黒子養子傳七と心のうちに思ふたが少し思ふ子細もあれば明しもせずさりながら一度面會して何かの相談して見様と此度江戸へ來たのが幸ひ東西南北とさがし歩行尋當れは今宵の始末 半「面目次第もムり升ぬ 芭元の起りは私からとつさん堪忍なすつて下さいまし 久「何と今更いふてもかへらぬくり事何の心にさへませう皆前世よりの約束ごと縁あつて夫婦となつた上からは中ようしてくれるが孝行 半「唯今の御咄で

私の身の上はさらりとわかり升たがわからぬは此佐藤太を殺してもよいどの事は 久「チ、其ふしんは尤もの事そは丁度三日前の夜の四ッ過所用を足しに出ての戻り知ての通り人足まれな三河たんぼうすきみわるく來かゝる所へおぼろ月夜にひらめく刃氣も魂も失たれど見つければ一大事と稻むらの影に隠れて様子は不殘見て居たが誰が殺された事ぞやらエ、なさない事してのけたみな怨心から起た事か戀の意趣切にてもあるべきかどこわさをこらへ暫く様子を見合て居ては見たがこんな所に長居をなし人にばし見とがめられては事六ヶ敷とふるへる足を踏べくやうく戻る其翌日虫の志らせか頻りに傳右衛門どのに逢たく思はれ無據用事も多くあつたれど夫を捨置堀川屋へ尋て見ればなんぞはからん傳右衛門どのには一日前の夜の四ッ過三河たんぼうにて切殺され梶原様より受取たる金も丁度五百兩奪ひとられて仕もうたどの事と聞て見れば吾が見たたんぼの人殺に符合してびつくりなし其時いさゝかの譯を傳兵衛に咄さうかと口まで出たがうかつな事をいゝ出してはど心に納て人に語るは今が始めて 半「シテ佐藤太が傳右衛門様を殺したといふ事をどふしてあなたが 久「チ、尤もな事夫は其場に私が隠れて居るかとも志らずこゝに居る此手負が一刀あびせかけて聲をあらゝげこれ老ぼれこの金は此佐藤太様がちつとの間かりておく初つからすなをにかせばいたひ思ひもしづに濟んだがぞたばたしたので其ぞまだアまぬけな老ぼれどれ此世のいとまをどらせせてやらふと又一ト太刀エ、其聲が今に



耳にのこつて居るエ、此佐藤太の己と其名を名乗たのが天の罰ヲ、恐ろしい事ではある。生、そんなら是なる佐藤太は實父傳右衛門の敵に相違はムリ升ぬか夫とも志らずに切てのけたは天の助け。久ヲ、かたきを討たに相違はない手負もいまだ死切らねば少しも早く代官様へ訴へて御差圖うけるがかんじん玄や。生、そんなら私は是からすぐに庄屋様へ。久ヲ、時がうつて手負が死んで手がかゝつて又面倒少しも早く急いで行け。生、そんなら親父様跡を何分願ひ升久少しも早く。花、ハイてうちんを時の鐘ゴチン、ハ、ハ、ハ、引

第二十八段

折から裏口をそつと明て「すこし御面下さりました。花、ハイどなたかは存ませんが今晚は宅にいろく取込だ事がありましたして半七も留守でムリ升から御用がござい升なら明日にも御出なすつて下さりまし。母、又明日上ツても宜うムリ升が何も御えんりよなものではムリ升せんお花さん御見忘れなさいましたか私は小俊の母でございませ。花、オ、もう私とした事がつい御見忘れ申升たお前さんなら宜うございませと申わけであり升か色と氣のもめませ取込がありますからま事に御氣の毒ではあります但其内御出なすつて下さいませ。母、其御取込のわけも唯今此方へ参りかゝつて逐一に伺ひました今晚私が此方へ上つた譯はあの小俊御前さんにも御願申どう

ぞ傳兵衛さまの御世話にならぬ様にといつておもらひ申すし又私からもよく言つけて置ました。たが此度傳兵衛様が御勘當となつた起りも元はあの小俊が出たらめにもせぬ事をい、だし升たからでございませすゆへ捨て置ては義理がた、ねと及ばすながら此節ではあれが御世話を申どの事を承り升た是までも傳右衛門様傳兵衛様にはあれもいふにいわれぬ御恩にもなつてをり升たものゆへ御世話を申は尤もの事夫をやめるとは申ませんがそれでは私のこゝろに濟ぬわけがムリ升ゆへどふかあなたへ上つて御工風を願度とわざ／＼此方へ参り升ていさゝめようすを影ながら伺ひましてすつはり譯もわかりまして誠にあんしんいたし升たそれに附ても御咄し申は今日が始めてなれど傳右衛門様と申は元は私のつれ合でムリ升たが。花、オヤそいうわけでございませしたか。母、まア御聞下さいませし夫婦になりまして三人の子までもうけあきもあかれもせぬ中でムリ升たがする事なす事くいちがひ貧苦にせまり根もなき事からい、つものり夫婦わかれをいたします時御互に此うへたどへ運に叶ひ萬兩分限にならふとも二度とこと葉は合せまいと誓こん立て乳のみ子二人は私が引受壹人は傳右衛門様が御連なすつて大坂へ御出なすつてから今の通りの御身の上となつてよりふと小俊めが御ひいきになりつゝいて傳兵衛様も御ひあきとの事唯御ひあきならよけれどよいやらしい事でもあつた日には傳右衛門様とは親子の中傳兵衛様とは兄弟と一圖に思ふて彼是と申しましたが唯今の御咄しでは半七さんこそ私しの實子



花「チ、そうでござい升とさ 母 是まで御心やすくして居りながらそういう事とは少しも志らず  
 花「ほんに夢かと思はれますこう事がわかつて見れば私にもおつかさん 母「ほんにそうでムい  
 ますかへ 花「此上は行届かぬ事はどうぞ志かつて下さりましと二人が咄す其所へ彼の久兵衛は  
 立出て 久「チ、お前さんが傳右衛門様の元の御内儀始めて御目にかゝりました私も大坂に居つ  
 た時はいから御世話になり升たゆへはるく御尋申せば今度のわけ夫も是も皆前の世から極  
 た事此上は跡この所をよう心付るが専一でムりますから及ばずながら私が骨を折てゐるいよう  
 には志ますまいから任せては下さらぬか併御前さんが御承知でも又傳兵衛様にも御聞申て其  
 上で取計ひをいたしませう 母「何から何まで難有らムり升何分宜御願申升と聞て久兵衛何事も  
 又追々に相談も致しませうと是よりして今宵の始末くわしく村長へ訴へたる所夫と吟味の上い  
 さゝか相違もなく殊に佐藤太が舊惡逐一わかりて事濟たれば小俊は傳兵衛が女房となり玉の様  
 なる一子をもうけ傳吉と呼びてふよ花よと育てけるお花半七はあつけはれての夫婦となり堀川  
 屋の出店を出して日に増し繁昌なす鬼十は是までの悪心たちまち善心にひるがへり髪を下して  
 庵をむすびなき人々のぼだいをとむらひ百歳の壽をえて目出度かりけるとかや

春秋二季草第五編にして結極すといへども猶傳右衛門が召仕五兵衛鷺の久次又半七のいゝ  
 なづけあてふが身の上鶴屋の舞鶴與次郎等が事は紙田限りありて餘睡なく又願官の退屈を

恐れて筆を止る猶數人の事は春秋二季種の拾遺松の落葉にときわくべし



里の花 川の月 春秋二季種五編卷之下 大尾

孝女二葉の錦初編叙

川柳點の妙なるかなとは古人三馬が妙なる序文亦人情の三の切は梅暮里  
 谷峩の筆意にして中にも當利は二筋道ぬからぬ穿の廓の癖能宵の程程よ  
 くも三編揃ひて満尾はしたれど厚味によつて喰たらず未此次が有さふな  
 と思ひ付たる書屋の欲心反古の中より撰出し梓に壽く續編はしかも新奇  
 の愁歎場眞偽は鑑定せざれども近世流行泣本には遙に増る人情世態實版  
 元の彫出もの只をしむらくは草稿の文字誠に龜漏にて半分は紙魚の巢と  
 なれり依之予に補綴を委ぬ拙亭元來名を活ず數く徳を思ふをもて前に  
 は五十餘年來星霜經ていと久しき虎之卷の次篇を綴りいさゝか書林に寛  
 爾させしは虎の威を借るせ作者狐にあらで困窮の折節筆探貧家の幕明泣  
 で發行か活ないで本屋が泣か兩道に泣せる案事の續編六冊思ひの外に悲  
 しくない大笑だと諸見看が笑ひたまはゞ是も亦目出度春の幸前よし笑ふ



門松福來る寶も丑の脊に餘り棟にみつる新版の中で別而此草紙を御ひる  
 き口の御評判は先貸本屋さま御一同御得意様におとりなし版元作者を御  
 取立並に家製の藥品類他の作者の端書にも偏に御惠あれかしと今年は例  
 の僻口をつゝしんでもつて序するとしかり  
 于時文政十有二季己丑の青陽吉旦油街の市中翠橋の邊にひさく丁子車梅  
 我齒磨精製のいとま筆を教訓亭の南窓に探て

爲永春水老人誌

孝女二葉錦卷之一

東都 梅暮里谷峩述

第一回は 順慶橋の嫁入

春はた上野飛鳥の花のみか。こゝに榮えを三吉野の。ながめにまさる仲の町。千本の櫻爛  
 ど。さくや盛りの山吹も。黄金色そふ夕かげに。あゆみはたえぬ大門口。歸るもあれば來るも  
 あり。茶樓が送りの提灯は。暗の川邊の螢のごとく。鳶へが迎ひの提灯は。月の出汐に異なら  
 ずものいふと言ぬ花ある賑ひは。蓬萊宮裡の仙女が室秦の三十六宮に。集まる美女が三千の。  
 粧ひかざる有装も。かくやはあらじ嵐ふく。三室の山のみち葉は。流れて立田の錦となり。  
 吉野にあらぬよし原の。花のさかりは諸人の。立よりて見る籬の外。匂ひ馥郁香は紛々。伽羅  
 の油や仙女香。丁子車の齒磨で。みがきあげたる白齒の矢的。ねらひ外れぬ見立が肝心。いり  
 くるく郭の繁華。小サき萌黄の 袂を。羽織のうへに脊負たる漢子の。年は五十をこしぢな  
 る。雪をちらく頭に。おきしは。順慶橋の小間物屋雪踏チャラく兵庫屋の。暖簾をくより内證  
 へ通れば亭主「イヤ半兵衛さんあいでなせへサア」こつちへ半兵衛「今日はだいぶおさむうござ



りますす子。イヤモウ年がよる。三寒くつても身に染ます。モウ〜協ひませんわ。亭ナニおまへなんぞアまだ〜半「イエそふでございません。近年めつきり弱りました。亭それでもアノ半六さん息子が。實跡で精を出しなさるそふだから御安心だ。半「へエさやうさ。マア〜ありヤア今まで悪イ耳もきかせませず。安心して居ますのさ。時に旦那い、甲の志のぎが出ましたが。どふでございます。亭「さやうさマアお見せなせ。半「是は出がようござへますから。甲は請合でござります。亭「ム、なる程子。ム、こりやアい。どふも此位なのは。近年稀だね。半「どふもいゝのがございませんが。マアこいらは申ぶんのねへしる物でございますのさ。その代り是で三十五兩より。二朱もまからぬといふ物でござります。亭「イヤ〜随分それじヤア。あまり高直といふではありますめ。マア何にしろ二三日置いて往ておくんなせ。見せる所もありませんから。半「ずいぶんようござります。トいふうちつまみ物と銚子をもち来るは。引こみ雛妓の八重梅なり。半「ナニまうおかまひなさんな。亭「まだ早いから何もねへそふだが。マア〜一ツあがつてお出なせ。コウ八重梅お酌をしてあげやれ。半「そんなら戴きましやう。チツトありますどふも若イものはおしやくが強い子。亭「ソレなんぞ取てあげるよ。ム、〜そんな物がよからうト是より主客。さしつ推へつ飲ほどに。晝見世の鈴の音。チャラ〜〜亭「時に八重梅や。モウ何ぞ出来たらう。アノ料理番の所へ往てな。何ぞあつさりとした物を出せと言

てきやトいへば八重梅は立ゆく。半「イヤモウ〜此うへおさかながあつても飲ません。酒飲といふ物はいぢの穢きたなひもので。マア〜といはれると。色〜用のある體で居ながら。ツイ長くなりませ。亭「ナニサマアようござへやせう。いはい隠居いんきよあきなひのやうな物だから。半「そふいへばそんなもの。某わたしがずるけると。またい、事にして若イものもずるけますし。イヤどふも一生息は出ませんのさ。亭「マア〜そんな物子。ときに半兵衛さん。今此處に居た八重梅といひますのは。ソレおまへも御存ごぞんじの一重が妹さ。半「エ、どうりで先刻から。よく一重さんに似て居ると思ひました。フムさやうかへどうして此處へ来て居ます子。亭「さればサ一重があの通り頼たのひやすから。迎も命はない物だと思つて。田舎へやりましたら。イヤおやちが堅藏かたさうで。アノ妹をつれて来て。是は一重か代りにおいて往といふ。ナニそうした譯ではねへからと。色〜わつちも言やしたが。どう〜おいて往やした。其處でマアあ〜して引こみにしておきやすが。モウはや脊せいかつ恰好もよし。見世へ出したらよからうと言ますけれどもそうして見ると一重を深切しんせつにして遣た甲斐もなし。どふぞアノ子は某が世話をして片付てやらうと思ひますのさ。モン半兵衛さん。何處ぞお心當りがあつたら。どふぞ世話をして遣ておくんなせ。半「なるほどそりヤアい、思召だ。きけば一重さんも今では文里さんの方に居て。病氣もさつぱりよくなつたものと。ホニそふでございますか。亭「さやうさ大きに僥倖しあはせさね。半「ひとまきりは能ならふといふ人



はねへやうでございましてたつげが。モシなんでも人は壽命づくだね。壽命がなくツちやアいけません。アノ子なんぞも本復したばかりで。あれ程戀焦れた。文里さんの方へもいかれたといふ物だ。是が彼めりやすにある通り今は昔の語り草とやらでござへやせう。亭、イヤあつな物さね。實にあれも一心だよ。亭、さやうさ其處で今あつしやつた。八重梅さんとやらのと子マア姉さんも文里さんの世話になつて居りやア。何も不足はなく。そうして見ると地面地屋しきでもあつてさ。立派な所へでも片付なさるのかへ。亭、そりやア先のいゝ程なとはねへが。みな是も銘々の運づくで。是非どういふ所へやらねへじやアならぬといふ譯もねへが。一躰一重が代りに。勤をさせて呉ると言てよこした所を。それじやアどふも慈悲をした甲斐がねへから。わたしが一ばん俠者氣を出して片付てやらうといふ譯に就ちやア。あんまり見ツともなくねへ所へやりてへのさ。亭、ム、なるほど。ム、なるほど。わたしが先刻から見ると。至極神妙で。おとなしそりで。容貌はよし誠にいゝぶんのねへ嫁だが。なんと斯申スもおかしらしいが。外へ世話仕よふより。あめへさんも御存のとた。アノわたしが息子の半六か所へお呉んなさんねへか。勿論數年御承知の通りだから。立派に暮すのなんのといふ譯じやアねへが。マア、順慶橋ては。おしもおされもまねへて商ひもまますし。夫に半六めも此年二十二だが。ずんぞ大人しくて。今のぶんじやアあの身上を渡しても。まんざら持かねもしめへかと思ひます。どふ

少しも早く嫁でも貰て。安堵してへど方々へ恃でもおきますが。儲どふも長し短し。丁度いゝのもなくつて。婆々アなんぞも案じて居ますが。モシどふでござへませう。亭、是は奇妙ね。見ず知らずの所へやらうより。あまへが貰ておくんなさりやア。あれも大きに僥倖。亭、ナニ僥倖などもありません。マアひもじい思ひや。暑、寒、イめはさせめへと思ひますのさ。亭、それが何より肝心さ。どんな大めへな所へ往ても。亭主が悪イと苦勞もおほし。その上に喰や喰ずのやうになるのも眼前だ。アノ半六さんならそんな心づかひは。芥子ほどもねへといふものだ。いよゝおまへが嫁に貰て呉なさる氣なら。善は急げだ。早く極りをつけて鯉節一本でもいゝわなちよつとその験をしておきてへね。志かしました半六さんにも見せねへじやア可笑なもんだ。亭、イヤエ其處は大事でございませぬ。親の貰てやるものを。否だのなんのといふやうな者じやアございませぬ。此間も脇で世話をする者かあつて。是非見合をしるといひましたつげか。ナニ見合にやア及ばねへから。お袋に往て見て。いゝと思ふなら相譚してくんなせへど。いつて居る位でござりまするものを。亭、ム、そりやア今時の弱官にやア珍らしい。そふ聞ちやアいよゝあれを貰て遣ておくんなせへな。亭、イヤこりやア早速の御承知で大きに安堵しました。夫よりさまゝの世間噺になり。日も西に傾けば半兵衛は。暇を告て家にかへり。妻のお里筋半六にも語るに。妻は聞より大きに歡び。そんなら結納をおくるがよいと。曆を出すやら寛爾



こととして。チ、此十日は大明日じゃ。そんなら十日に結納を。贈るがよいと續くと歡ぶ。半六は元より孝行なる生つき。親の見てよしと思ふもの。縦令いかなる女なりとも。否むべきにあらずと。是も俱その準備するに。半兵衛も深く歡び。その次の日吉原に至り。家内の者も承知ゆへ貰ひたく。夫に就ては来る十日は吉日なり。結納のとりかはせをいたすべしといふに。亭主も大きに歡び。八重梅をよびて引あはせ。さて一重が方へも此事をいひやるに。一重も亭主が實義また。妹お梅がなりいでを歡び。早速に文里にも。此事を語りて小僧一人つれて。吉原へ來り。亭主にも厚く禮をのべ。妹にも歡びをいひ。また色々に教訓などして。それより花の香にあひて土産などやり。今まで妹八重梅が。世話になりし禮などいひて歸りけるに。文里も俱歡び。亭主と相談して。友度など調へる程に。はや其日にもなれば。順慶橋より。結納美しくして贈りけり。かくて日數も立ほどに。衣類調度も揃ひ。はや近々に嫁入させんと。兩家さゝめきあひけるに。生者必滅は穢土のならひ。老少不定は常のとと。佛のまめし給ふなる。彼半兵衛はこの程より。風の心地にうち臥して。食も碌々給ぬほどに。妻子は傍につきそひて。日夜看病きたりしに。稍に弱る在さまに。あるにもあられぬ思ひして半六「モシおとつさん薬をお上りなさい。ナニこの位などにそふ氣を落してはいけません半兵衛」ム、だれだ半六かモウ〜薬はよして呉ろ。手めへ達か氣を揉から否な薬も我慢して。マア飲では見るもの。

とても今度は佐かるめへよ半六「ナニおまへさん此位な病氣で。よくならぬといふがござりませやうか。私どもなら彼荒療治で。湯へでも這入て水でも浴て。熱を把て仕まひます。お年をなすつてござるからそんなとは出来ませんが。病はなんでも喰ひ勝とやら。いつもお好な温飩でも。どりにやりませう。コレ初や手めへちよつとむかふへ往てな温飩をあつくして貰つて取て來い。初「ハイ〜半兵衛」イヤ〜はつやモウおれは喰へぬからい〜にしるへ半六「ハテサテマア〜一せんあがつてござらうじましな。そふ〜幾日もおまんまもあがらぬへじや。薬のまはりも遅ふござります半兵衛「コレ半六やお袋は何處へいつた半六「ハイおつかさんはけふ堀の内へおいでなさいました半兵衛」ム、御張御符を戴きにか半六「さやうさ全躰私」が參る積りでございしました。今日はソレ此間の御注文で。御やしきから役人衆がござるつもり。番頭の久七もゆふべから風をひいて寐て居ますし。外の者では濟ませず。夫でおつかさんをお侍申て。今朝早く小僧と。そしてお梶をつれて半兵衛「ム、まア〜夫もい〜。コレ半六もつと此方へよりやれ半六「ハイなんでござります半兵衛」何も外のとでもねへがの。おれが病氣づいてからもはや廿日あまり夜晝手めへが看病をしてくれる心の裡。まだ年端もいかねへで。わが子ながら禮のいひやうもねへ。ア、〜さぞ太義であらふ。迎も是は死病だよ半六「亦そんな事をおつしやります。私も商賣の片手間には。本のかた端も讀ましたお蔭にヤア。親の大事も主の大切も。少しは辨



まへて居ますもの。あなたが假令御大病で。乃至二十日や三十日。寐ずに看病いたしたとて。何を太義とおもひませう。そんなとに心づかひなされずと。お否でも少しづつ。お粥なりと上りまし。却て何にもあがらぬのが。苦勞になつてなりませんと。いひつゝ見れば面瘦て。佐かるべくも思はれぬ。父が病ひを兎に角に。案じわびてははら／＼と。落る涙を親の目に。見せむと齒をば噛しめても。猶堰かねて脇をむき。そと。ふきとりて半六「サア／＼温飧が参りました。一口なりと上りまし半兵衛」せつかくおのしがそう言もの。そんなら一口給やうかトおきあがりても日頃より。好る温飧の一筋も。咽を通らぬ重病を。側で見ると子の心根は。いかにや苦しがるらんと。餘所の袖さへ濡つべし半兵衛「ア、モウどうも喰れぬわへ。ム、初加湯を少し持て来てくりや。初「ハイ／＼」どうもお困りなすつた物だトちゆく所へ歸り来る。妻のお里はあくせくと。端折のまゝに枕もと。里「ヤレ／＼漸く今かへつた。けふはどうだつたの。半六「今やうた物だの。モシへ今かへりましたよ。おまへにそう言て往うとは思つたが。おとめなさるだらうと思つて。だまつて往て参りました半兵衛」ム、夫もマア手めへ達の心ゆかせにもならうから。何も斯して足手もきかねへ身で。彼是といふじやアねへが。此期になつて。神佛のお力でも。どふもいくめへ夫よりヤア跡このとを。言ておきてへともあり。今半六にいふと思つたが。

ならふとなら手めへが歸つてと。待て居たまア／＼此方へよらつしやい。大きな聲をするの。大義だ。里「ア、なんだか知らないが。モウ／＼そんなに心細いことを。いつておくんなさんなへ半兵衛「言ずに濟ならおれだつても言てへ事もねへけれども。迎もこんどはよくならぬおれが病氣。翌にもおれが死だならマア格祿相應な。葬式をもまざアなるめへし。まかし當時の世がらじやア。上ツ方でも儉約だ。何でも物ごと質素にして。兎角費のねへやうにして。どふぞおれも若いときから。骨を折て身上も此位にまで仕あげたから。親が死んだらソレ斯なつたど。人に指をさゝれぬやうに。諸事萬事に氣をつけて。いふまでもねへが。半六だつてまだ若い者にとだから。なんぼいつてもさう／＼は。往わたらねへ所もあらう。其處をば手めへも年寄役に。世話をして遣たがよし。まかしマア半六は。世間の弱官どちがつて。今まで何一ツおれが眼に。おかしらしいと見へたともねへから。安心はして居るもの。何でも人は氣がゆるむといかねへぞよ。といつて辛吝して人のかすり斗りどるやうでは。矢張是も濟ねへから。慈悲情は元より。年忌佛事も人並にしておいて。なんでも手めへの身をつめるが肝心。夫に就ても近々に。よぶ積りにしたお梅がと。どふぞおれが息のうち。嫁よ眞といはれて見たい。そうして死ねば本望だが。おれが斯いふ大病中に。嫁を呼だせ世間で聞たら。何か亦半六めが大人しくねへやうにもいふし。夫ばかりが氣が／＼りだが。たどへおれが死んだとて。結納までやつた



もの。最はや變改もあるめへから。少しも早くお梅をよんで内を去つかり極るがいよ。是せ  
 へいへば今死でも。何にも案じるとはねへ。馬アイく承知いたしました。若萬一の事が有て  
 も。決して世間の人々に。後指を。さされるやうなとはしませんから。お案じなさんな。何よ  
 りかより半六が。斯實躰に生れたのが。おまへも吾儕も大仕合。マアくどふぞお祖師さまの。  
 御蔭で早くよくなるやうになさいまし。サア御洗米をいたいき。モシエくど口の端。あて  
 へも更に挨拶なし。忽地變る面色に。さてはど計り母子が顛倒。今まで慥に口も利。どうして  
 變が替たやら。コレ長松や早く往て。御醫者を呼でど立騒ぐ。程なく醫者も駈つけて。脈をと  
 れども絆きれて。たとへば華陀が良劑にて。耆婆が一ヒ加ふるども。息かへすべき便もなし。  
 母子俱音になく泪。雨とふらなんわたり川。水増れども歸らざる。死出の旅路の父が影。見る  
 も懶く思ふにも。先だつ物は泪なりかくてあるべきにもあらねば。夫より所へ知らせやれど。  
 元よりさせる親類なし。近しき人より集會。歎く二人を慰めて。葬式を營みつゝ七日この  
 追善も叮嚀にこそ吊ひけれ。現にや月日に關守なく。光陰梭のごとくなれば。歎きのうちにそ  
 の年も。なかば闌ゆく久かたの。月をぞめづる秋のはじめ。はや中陰も果しかば。是よりして  
 半六は。名を半兵衛と改めかえ。元より花美を好ざる。萬質素の性なれば。見世の繁昌以前に  
 替らず。いと賑ひまさるにつき。母のお里も安堵して。良人が世にある時よりして。結納を

さへ贈りたる。嫁のお梅を早くむかへ。初孫の貌さへ見たく。はや日數も立たればと。或日吉  
 原におもむきて。兵庫屋の亭主に語るに。半兵衛が死はいふてもかへらず。跡の事こそ肝要な  
 れ。さらば黃道吉日を。擇みて送り申さんと。さて其日柄をトしつゝ。お梅を送り越ければ。  
 比翼の契蝶花形。むすふ縁も志か菅に。未たのもしき女夫づれ。母は殊さら笑片向。これぞ  
 歎きの其中に。秀眉をひらく今宵の祝言。四海の波も靜かにて。治まる家の繁昌を。みなく  
 祝して愛たく開らく。梅のほつえにうぐひすの。音になく心地の花婿花嫁。深閨の契も淺から  
 で。中よく月日を送りけり。かゝりにければ半兵衛も。文里が方へ往かよひ。いと慰懃にもて  
 なすにぞ。文里はさらなり妻のおときも。一重が妹の婿なれば。僥倖ちかき親類も。なきこと  
 なるにゆくりなく。よき婿かねを得たると。ゆくすゑ鐵等が爲めにもなるべく。實にうへなき  
 事よとて。いよく親しく交はりける。諸もお梅は月ころ經て。はやたならぬ身となれば。  
 母の歡び大かたならず。指を屈めてまつ葉の。茂り榮かへん始めぞと。はやいつ月のいはた  
 帯。明る文月の下旬。産の氣つきて安くと。珠のごとくなる女の子。産落せしかば半兵衛母子  
 は。いふも更なり文里が方にも。擧て歡ぶその中に。況て一重は己が身に。子といふ者のあら  
 ざれば。吾子のごとくいつくしみ。名をばお菊と號つゝ。早くも三年を過にけり

孝女二葉の錦卷之一終



孝女二葉の錦卷之二

東都 梅暮里谷峩述

第二回は 天の爲せる災

天道言ずして品物亨と。唐山のまじめな漢子がいふたも。實にその意の深いと。堀抜井戸の底のこどく。しかはあれども分らぬは。篤實律儀一遍に。悪いとなら爪の垢または兎の毛で突たほどもせぬやうに心がける。人にも運の悪き有。人の物をばわが物と。義理と情のわけまらず。貪慾にして善事は。虱の糞ほどせぬものにも。一生立派にくらすのは。嗚呼天道も聞へぬ事ここで如才のない佛者が是を前世の宿業と。いふたも一理ありそ海。ふかい智恵ではござらぬか。順慶橋なる半兵衛は。女兒お菊が髪おきの。三歳の祝ひも花やかに。賑はふその日招かれて。文里が方より夫婦づれ。一重は二三日以前より。手傳ひて此處にあり文里イヤ今日は天氣もよく。御宮参りも濟やしたかの半兵衛只今みんな出掛ましたが。モウ追つけ歸りませう。よふおそろひでイヤ鐵さんよくお出だの。此頃はめつきりと。大きくおなりなすつたことたぞ。ム、夫と申せば此間は。お守をありがたう。今日丁度持せて出ました 文「イヤ御禮では痛みいるが、

一重にも申た通り。あれは鐵が生れたとき。さる御屋敷から戴ましたが。古錦襦でもアノ位な。切はなか／＼ありやせんよ。夫から大事にしておいて。モウ一旦は喰や喰ずで。極々難澁しませしたが。あればツかりは鐵が守りと。活残しておきやした。最早こいつも七ツを越すし。虫氣もなく丈夫に育てば。アノ菊ぼうもいはい從弟。鐵の坊主に似かつて。丈夫にどぶぞ育やうと。古物ながらお譲申た。是も誠に他人とは。思はぬアノ子の爲を思つていたした事。悪くもつておくんなさんな。半ナニ悪く思ひませう。どぶぞ鐵さんに似かつて。親孝行なものになれば。誠に僥倖この上なしでございます。サア／＼まづ此方へお出なせへ。サアおときさんも鐵さんもト程なくいづる吸物蓋。おひ／＼に來る近所合壁。亂酒におよぶその頃は。淨瑠璃を彈女兒あり。酌に藝者も二三人。琴ひく盲目法師など。いと賑やかに深更の。ころまで盡ぬ酒宴の興。五更ばかりに人々が。家路へかへるその迹にて隣裡なるその騒ぎ。ハテ何事と半兵衛が二階の窓よりさし覗けば。折ふし烈しき風と俱に。火穂は天に沖り。烟は潮の湧こどく。吹かけ來ればヤレ火事よ。火事よ／＼と家内の騒動。殊に今宵は土庫より。晴とて出せし諸道具も。まだ片づかぬおりなれば。ソレ何をせよかをせよと。篝きまはれど急火なりことにその風地をふきて。忽地家根へ燃つけば。鳶の者も駈付て。彼よ是よと働ども。宵より飲たる祝義の酒。まださめやらぬものなれば。足の踏所も定まらず。母のお里は孫女兒に。怪我あらせじと



泊り合せし。一重とともに熟睡したるを。矢庭に抱き。命ばかりを物種と。にげ出せば妻のお梅が。心がしりと迹おひ行半兵衛はじめ主管ども。下女も婢女も騒ぎまはれど。とり散したるうへなれば。家財三分もかたづかぬに。はや建具にも火の移れば。是までなりと逃いでつ。庫の戸前もうちしかど。烈しき風に吹まぐられて。二戸前なる土庫の。見るまに燦たち昇り。みな灰燼となりたりしは。いと無漸なる事どもなり。さても家内の人とは。文里が方の世話になり。夜あけて半兵衛焼迹へ。人をつれて来りつゝ。見るも仲々淺ましく。先灰どもを片づけて。圍ひをばなしけれど。家のみか土庫まで。一棟さへも残らぬは。いかなるところかと果るゝのみ。文里はいとゞ氣の毒さに。何から何まで深切に。心を配り日ならずして。漸く見世を補理は。商賣をはじめにけれど。諭にもれぬ箒もなき。乞食とやらん躰なれば。頓に再興せんとは。思ひもよらぬ所爲ながら。元より律義一遍なる。此半兵衛が事なれば。出入屋しきの氣うけもよく。始めのさまには似もつかねど。さのみ乏しきともなく。また一年を送る程に。母のお里が病氣づき。枕もあがらで病臥ぬれば。元より孝心淺からぬ。半兵衛なれば夜の目も寐ず。お梅も俱にさまゝと。介抱すれども驗もなし。其處のお加持よ此處の護摩。また病人の好めるものは。雪の中なる箒も。また堅凍の鯉魚はものかは。價をおしまず調へて。勸めて見ても果敢とらず。半年ばかり病體で。終に墓なくなりしかば。夫婦がなげき諭ふるに物なく。天にお

こがれ地に伏して。泣かなしめど其甲斐なし。たどへば五更に燈火をうしなひ。荒磯を巡る蟹小舟楫をたえたる心地して。語るにことばもなかるべし。半兵衛も歎息して。五年このかた兩個の親に死わかるゝのみならず。誠に急なる火災にあひ。僅の物だに残りなく。灰となりしは吾々が。いかなる果報の拙なきやら。是も前世の悪業かど。口説はお梅もとも泪。ホニ吾儕が此處へ来て。よい事とては子を一人。儲たるまゝその外は。悪しきに悪き事ばかり。重なりあふも禍の。神の祟か知らねども。おもへばいとゞ情なし。焼たる後は母さまも自由がちな此くらし。御苦勞ばかりなさるゝから少しもはやく元のやう。此身上がなをれかし。そうしたならば樂こと。お心休めたい物ど。朝夕おがむ神さまや。佛さまも聞へませぬ。お年といへど六十には。まだ程のある御身にて。斯いふ事があらふとは。夢か現かゆめならば覺よくと身を闕へ心の實あらはれて。見る目いぶせき歎きなり。かゝる所へ知らせにより。文里一重も来りつゝ。思ひはおなじとながら。さまゝと賺し慰さめてさて野邊送りも果しけり。いとゞだに焼たる後は活生の。本錢にさへ事たらぬに。半年ばかりの病人に。入目のおほくかゝりぬれば。工面十めんして見ても。膂力でゆかぬは金ばかり。文里もいとゞ氣の毒がり。また半兵衛が心をさつして。貸せといはねど此方より。深切盡して貢ぐにぞ。其律義なる心とて。恩を感じ義を慕ひ。夜の目も寐ず活生の。道に心を盡せども。弱りかゝりし身代の。なをるは難きものな



るべし。現にや僥倖はならび來らず。禍ひとり往ずといふ。古語にたがはぬ半兵衛が。幸なき身こそ不便なれ。またその年も火災にあひ。這回は元より諸道具だに。以前のごとくはあらねども。大かたは焼失ひて。十方にくるゝばかりなるを。文里はいよ、情をくわへて。はじめの貸さへ半も濟ぬに。また這回も大枚の。金子をかして家を造らせ。頓て活生をさせけれど。五年かうちに二人の親。辭世たる入目もおほく。殊に兩度の火災にて。親の代より持傳えし。地面一箇所ありけるをも。今は他人の寶となり。商ひ物も高金の。本錢はなかくいかにすとも。仕入べき手術もなければ。稍に衰微して。女兒お菊が五歳の年には。漸く見世へも一人の丁稚を。抱へおくのみにて。婢し女も有やなし。お梅は貧しきその中にも。甲斐こしく立働さ。只一心に身上を。興さんものと半兵衛俱々。さらに油断はあらざれど。何かにつけて損のみおほくと案じわび。手をもて是を引たつる。ごどくは思へど詮方なく。自分が月の小づかひとて。お時が方より少しづつ。貰ふうちを半はわけて。お菊が日々の雑用の。足にもせよとおくれども。大厦の將に倒るゝとき。一木をよく支ゆべき。今はなかく、術盡て。よわり果たる半兵衛夫婦が。心の裡ぞやるせなき。頃は九月末つかた。山の木の葉もひらくと。障子にあたる風に。肌も寒き真夜中に。遠寺の鐘の音さへも。胸をうつかとおもはれて。寐覺がちな床のう

ち半兵衛「ナントお梅そなたはマアどう思ふ。知つての通りおれだと言ても。朝は鳥と一所におきて。見世のとから得意場から。精一ばいに骨をおり。なんでもかでも此身上元の通りにならざとも。どうか少しも取直して。一かたならぬ文里さんの。借を少しも返したさ。夜は八ツ九ツまで夜なべして。氣根かざりに精出して。得意も元のやうにはいかず。夫といふも此方の本錢が。不足してゐるゆゑに。注文を請合ても。サア速に品が揃はず。其處で得意も段々に。減ばかりで殖る瀬はなく。問屋の掛も月々に。どふもかうも逐ひきれず。マア此ぶんじやア二年とも。こらへられるとではない。それにマア一重さんも。月の小づかひはいつかの説に。たしか二兩と聞たつけがお菊がなんぞの足にしるどて。一兩づつはよこしなさる。ア、さぞこまんなさるだらう。なんぼ女の事だと言ても。アノ暮の中に居て。二兩でも足ねへ所を。半分こつちへわけて見ちやア誠にせつないたらうと。色くことわりいふても聞ず。何もわたしは不自由な。事はないから菊ぼうにと。いひなさるのもそなたの縁また菊ぼうも姪のことなり。それ程までに深切にして貰ふ小僧めも。ろくを着物も着せられず。皆身上にゆりあげても。實に焼石に水とやら。二兩三兩不意として。儲た所が目にも見へず。舊借一分返す事も。ならぬといふもどうした物だ。其處でおれが思ふにはいつそのとお袋の。在所は上總で相應に。くらしもして居る百姓だが。伯父御はいつぞや辭世て。その息子の市藏は。従弟だけれど。ト間



ちがつた事があつて親父が大きに腹をたて。今は不通となつては居るが。もと血をわけた従弟のとなり。尋ねて往たら悪くもしめへが。此處に便々斯して居て迹へも先へもいけなくなつちやア市藏が所へもいけねへ。今のうちなら焼残つた。諸道具や見世の代物みんな活たら五十や六十。金の出来るはどうさもなし。そうして鄙へ引こんで。質でもとるか田地を買か。とても鉄鎌引かついで。作はどふも出来めへけれど。村の子供に手習や。十露盤でもをしえてやり。三人してくらしたら。マア第一に物はいらす。五年と七年辛抱して。折がよくはまた荏土へ。出ると言てもどうさのねへと。そうして見たら大恩うけた。文里さんの借金なり。其外所々の借金も。みんなは迎も出来めへが。少しづつは返されやうが。此分で居ちやア少しづつも。返すはあろか立きれねへ。どうした物であらうなアト説す内にもさま／＼の。愚癡と心であきらめても。思ひぞ出る昔の事。泪さきだつ良人の貌を。まづと見る眼のとも泪「梅」ホンニおまへなり君儂なり。ずいぶんと心をつけて。難義な人のあるときは。身に引うけて世話もあたり。貪慾などはせず。佛さまや神さまも。鹿末になく信心して。餘所の人にも律義な人よ。篤實ものと譽らるゝ。おまへはどうした前の世に。何の報ひか知らねども。うち續ての不僥倖。モウこの上には仕やうもなし。いつそおまへのおつしやる通り。田舎へ往てくらしたら。氣やすい事もありませう文里さんは情ぶかい。ア、いふ通つた人だから。まだ此上にもだん／＼の。譯

をいふて侍たら。些やそつとの説あひ。出来まいものでもないけれど。早竟いは姉さんが。あゝして居ればこそ私が。此處へまゐるときからして。今までに最大と。費をかけたうへなれば。モウそう／＼は言にくし。そふかと言って其外に。相譚をする所もなし。所詮是では往ますまいが。爺さんの時からして。順慶橋の小間物問屋と。人にも知られた此身代を。仕舞て鄙へ引こむとは。マ。よく／＼な不僥倖と。いふ人もありませうが。女房が悪けりや身上も。悪くなるとは世間の。人がなにかにつけていふ口説。實にわたしは鄙のうまれで。身上持たとはなし。萬事に費が立たゆへ。斯いふ事にもなつたのか。それを思へば此子がなくは。アノ兵庫屋の旦那にはなして。縦令この身を活てなりと。見世は見世でおきたい物。いつぞやからしてそら志やうかど。たび／＼思つて見るけれど。生れついでこの堅いおまへ。定めてお阿りなさるであらうと。言は今宵いとおめてだが。まゝになるならそうでもして。本錢の足にもおきたいもの生「モウ／＼そんなあはれッばい。事を言てくれるなよ。夫よりおれが思ふには。親の代には相應に。家隸眷屬もあつたもの。不僥倖とはいひながら。斯いふくらしになるといふも。男に生れた甲斐のない。不働なものだと思はふ。女房の前も面目ないと。あけくれ胸に絶はせぬぞよ。ア、辱ないこれお梅。よく愛想を盡さず。深切にして呉るなア。たとへ淵川へ身を投て。死ねばといつて一日でも。そなたをそんな身分にして。阿容々々として居られるものか。いくら



言てもどうでつきぬ。そなたもそれがよかろうと。思やるならばいつその事。いなかへ往て志まはふか。梅誠に今は仕やうもなく。人は七倒八起とやら。亦い、事もありませうから。いよ／＼おまへの了簡が。極たとなら少しも早く。半ム、それだが此のことは。一重さんへも内證で。梅アイ／＼夫は姉さんへも。どうして説しがりませう。はなして見ればとめるは必定。そうして見ると無心する。その言ぐさに聞へるから。半、そんなら翌からそろ／＼と。見世の物や諸道具をも。みな夫に賣拂わふ。思へば因果な事だなア。あすここにござる兩親も。モシ靈とやらがあるならば。さぞ残念におぼしめさう。思へば不孝の身の果じや。とおつる泪もせきあはず。暗き燈におきくが貌。つく／＼と見てまた眼を拭ひ。半、これ見やれ此小僧め。なんにも知らずに寐て居るが。鄙へ往たら近所の見ども。みな荒くれたものばかり。さぞ伯母さんや／＼と。泣あるだらう。ア、一重さんもあれほど可愛がつたもの。往方も知れぬと聞たなら。どんなに歎きなさるだらう。相譚づくでは出来ない譚なり。是非に及ばぬ此場の時宜。あしつけ世にも出ましたなら。其いひ譯はいたませう。どふぞ堪忍して下されト泪ふき／＼文里が方を。拜む心のいぢらしさ。思はずわつと泣ふすお梅。聲の高さを稚子の。寐耳にいりてや目を覺し。常に變りし容子を見て。子供ながらもこま心。つくは了得に女の見。訝かりながら起あがれば。泣貌見せじと燈火に。そむけてもなを覗きこみきく「あつかアさんなぜ泣だ。氣イ

氣イでも悪イのかへ。いつぞやあどいさんのあつしやるには。そんなに泣とアノ情いお菰が来てつれてゆく。はやくだまれとおいひだが。若あつかアをアノお菰が。連て往ては悪から。お泣でないトろく／＼に舌もまはらぬ曉しごと。聞に心もくれは鳥。せき來る胸の苦しさを。堪えて寛爾。半、ヲ、よふいやつたホンニなふ。お菰ぼうは利口だぞよ。なんでもないとおのやうに。泣て居るおつかアは。大かたお菰になりたいたいと思つて泣のであらうなア。さアそのお菰には誰がした。みな此爺が働の。ないゆへお菰も同やうな。佗しい身になるのじやわい。サアサア泣なコンお梅。ア、そのやうに歎ひたどて。今さら取てかへらぬ事。小僧めが不測がるわへ。子を譽るのではなけれども。五歳や六歳でぐわんぜんくたどへ泣うが笑つて居やうが。貪着なしに乳飲ふとか。菓子呉るとかいふ筈を。あれが先頃言て聞いた。事をまつかり覺て居てそなたを賺す心根は。實に賢い奴なれど。是じやによつて育が肝心。あんまりわやくを言あるから。威しにいふたを誠と思ふ。ア、／＼おれが大きな誤り。なんでも是から少しでも。虚言をいふて聞さぬやう。そなたも心をつけたがよい。夫につけても鄙の住居。何から何までやりばなし。圍爐裡の中へ唾吐をしたり。桶へまたがる立小便をはどうぞさせたくないものなれど。米に交はれば赤くなる見やう見真似に詞つき。立ふるまひまで鄙振て。あしつけ後悔する事は。知つて居ながら仕かたがないト先のさきまで案じるも。子ゆへの聞に親の愚癡。お梅はおきくを抱



きわげ 梅「なぜマアおまへは今頃おきたよ。サア〜早くねんねしな。志かし尿でも志たいのか。モウ〜わしは泣はせぬよ。今ぼん〜がト言かけて良人の貌を「ホイぼん〜が痛ひのではなかつたよ。モウ〜なかねぼうも寐な。さア〜旦那もおよりまし。大かた今に七ツであらう 半「色〜愚癡をならべ立て。思はず大きに夜をふかした。どうで心を極たからにヤア。些どもはやく片付やう。それにつけてはノウお梅。翌おきたらぼうをつれて。それとはなしに一重さん。文里さんへも遭て來や。志かし今宵の説をば。色にも出してはならぬぞよ 梅「アイいつその事姉さんに。あへばいろ〜思ひのたね。逢ねがましでございませうか 半「イヤ〜そういふものではない。ぼうめもちばさん〜と。あれ程までに慕ふものきく「アノちばさんの所へおいでなら。ぼうをも連れて 梅「チ、サぼうを連れて往いで。ナニおいて往ものかよ。翌おきたら湯へいき。奇麗になつておばさんの。所へつれてゆくほどに。サアおどなく寐ねしなトいはれて心うれしさに。すやく〜眠るおさな子の。貌つく〜とうち詠め。ほつと息する兩個が胸の。やるかたなさはいかならん。傳へて後に聞だにも。心詞におよばれぬ。世に薄命なる人ありとも。かゝる類ひはまた稀なり

孝女二葉の錦卷之二終

東都 梅暮里谷峩述

孝女二葉錦卷之二

第二回は 鳴戸の佞人

白玉か何ぞと人のとひしとき。露どこたへて消えんとは。昔在吾の中將が。女を自て走れるとき。詠給ひしとは世の人の。普く知れる所なり。その風流にはひきかへて。可爲様なしの夫婦づれ。女兒を負ふ細手道。此處ぞ下總葛飾の。真間にはあらぬ世の中を。瀕りてゆくも行徳の。濱邊に見ゆる釣の舟氣をばのぶとに漕はしる。心を千々に千葉の町三ツ葉四ツ葉の家造を。捨てぞいづる泉の驛。かよふ轎がたび駕も。嘶く馬の鈴の音も遠ざかりゆく瀧新田。むかしはさこそ今の世も。家居まばらに原ついき。芝ふみわけて八街の。往方を其處と志らま弓。はる、日さへも佞しきに。そぼふり來る雨のあし半兵衛「イヤこりヤアこまつたもんだ。どつちを見ても原ばかり。強く降ては大ごとだサア〜ちつと早足に 梅「アイ〜随分精出して。あるくけれども遠いねへ。是から先はなんといふね 半「ム、是からはドレ〜ト懷さがしてとり出すは道のゆくてを記せし帳面 半「これからは松の郷。ア、それまでは二里とある。モウはや彼是八



ツだから所詮其處まではいかれぬへ。マア／＼早く入里へ出たらば今日は泊らふよ。コレ菊ぼ  
うどうしたへ。お梅見てくだせへ寐はしぬへかの 梅「ア、脊中へおつついて寐てままひました  
ヨ 半「こんなヒウ／＼風がふくの。寒からうなア包みのうちに小袖があらア。出して上か  
ら羽おらせやな 梅「そんなをして居るうちに。だん／＼雨が強くなると迹へも先へもいけぬ  
へから。些も早く往ほうが 半「ム、なる程それもそうだ。きついてもあるめへさホンニ手めへ  
は足が痛かアねへかへ 梅「ふだんあるきつけねへから。痛くねへでもありませんが。まだ／＼  
そんなに草臥はしませんよ 半「それはそうと。一重さんもこんな事ア知るめへなア。昨日往  
たとき何といひなされた 梅「さやうさ膽をつぶしませうヨ。きのふいふにやあめへも大かた。  
色／＼苦勞するだらうが。マア／＼どうぞ辛抱して。少しづつもなをるやうに。夫について  
文里さんに。折があつたらよく説してすこしの事は相譚もしてやらうといひましたつ半「そ  
れ程までと思つて呉れる姉を置いておれがやうな。者でも亭主と思ふから。斯して苦勞をして  
くれる。志は忘れぬへぞよ 梅「なんのおまへ他人がましく。何ぞといふと氣の毒だの。禮は詞  
に盡ぬへの。迎もかうなる上からは。互に骨を折あはねへじやア。世に出るとも出来ぬへか  
ら。どんなでも厭ひはまません。モウ／＼そんな説しはよして。強くならぬへうち少しもは  
やく 半「はなしながら歩行がい。ナニ／＼雨も今急に。つよくなる事もあるめへからト急ぐ

どすれど足弱の。路果敢どらぬを見てとる馬士「コウおめへらア松の郷まで乗ねへか。安くし  
てやんべいはな 半「どうだ手めへ馬は否だらうな 梅「アイわたしは馬に乗たとはねへから。氣  
味が悪イよ馬士「コウおかみさん何にも怖いとはねへだ。ア、毎月馬にもるべいが 梅「チヤこ  
の人は戯談ばかり馬士「戯談じやアねへほんまのこんだ。そんなら旦那乗ッせへな 半「イヤイ  
ヤまづよしやせうよ。子供は居るしあぶねへから馬士「ナニあぶねへとがあらうか。サア／＼早  
く乗ッしやい 半「イヤよしに志やせう馬士「ハアよすといふがあるものか。易くのしてやらうと  
いふのに半「いくら易くつても馬はきれへだからよ。サア／＼とても相譚は出来ぬへから馬士「ハ  
ア此人は分らぬへ男だぞよ。おらア此瀧新田で。微六と言ちやア誰まらぬ者もござらぬ男だ。  
おれが斯いひ出して。たの一寸でも引のじやアねへ。乗ずは乗んでせすとなしだがコウ親方  
一合飲してくんねへか 半「ずいぶん飲してやりてへが。見なざる通り足弱づれ。路用もろくろ  
くねへ旅人だ。そんな事を言ずとも。馬を除て通して下せへ馬士「サア／＼通らば通らつしやい。  
こりやわしが所持の馬でござらア。ひかうと牽まいとあらが了けん。貴さまの構ひになるもの  
か。腹の下でも潜ていきねへ 半「コウ微六さんとやら。夫じやアあんまりおとなしくねへ。馬  
はおめへの馬だらうか。この往還をどめられちやア。道を歩行ものが困らアな馬士「ナニ往還を  
どめるものか。サア／＼勝手に通らつしやいな 半「それでもおめへこの狭道に。馬をそうして



あかれちやア馬士「エ、やかましい通りたかア。一合飲していきやアがればらぼうめ己等がやうな。乞食道者に。指でもさゝれる兄さんじやアござらねへぞト飽まで嘲弄せられては。堪忍つよき半兵衛も。おさめ兼たる胸の内。側にはお梅がはら〜と。モシものいひにもなつたなら。外に佐ける人もなし。どうした物と半兵衛が。袂をひいて。梅「モシ旦那マアかまはずにおゝきなさい。一合飲して呉るといふから。廿四文も出しておやりヨ。半「おれもそうは思ふけれど。女児供を連たと思つて。こつちの足元を見繕て。彼はいふのが面が憎イは。梅「アレサそれを堪へて通るが。却てこつちの爲じやアないかへ馬士「なんだ二人でこそ〜と。エ、べらぼうめおれもなア。内へけへりやア立派な嫁々も持て居るぞ。面あてらしくおれがめ〜で。いちやついて呉るなよ。半「イヤおめへのいふのはみんな尤。どうぞ是で一合飲で堪忍して通してくんねへ馬士「イヤこりやアなんだ酒の銭か二十や五十のはした銭で。彼の是のといひはしねへぞ。此野郎めへきいたふうなト握り拳をふり揚て。臂力にまかせ丁と打。半兵衛さそくに身を捻り「イヤこいつめ何をするトいひさま胸をどらゆれば。馬士はます〜居たけ高。頻りに其處等をはりまはず。お梅は見るに氣も消えて。マア〜待てと絶るもきかず。馬士はいよ〜吼り狂つて。丁々發矢どめつた打。こなたは稚き子を負たり。怪我あらせじと厭ふほどに。弱りめのある所へつけこみ。鬚どらへて引倒せば。お菊は騒ぎに目を覺し。あれと〜さまやアレ〜と。

聲を限りになき叫ぶ。お梅は猶もすがりつき。馬士を矢庭におし除ても。すこしも動かぬ仁王だち。くるひまはるに半兵衛夫婦も。いかいはせんと右視左視れど。元より人の往來もなき。此原中に詮方なく。逃んとすれど足弱の。今はなか〜術盡て痛みにたえぬ頭をか〜へ。半親にさへ手をあげられぬ。天窓をぶたれて誤まるどは。あんまり智恵のねへわけだが。何をいふにも見どもをつれ。自由にならねへわしが體を。見こみにねだる酒銭の無心。かう見こまれたがわしも因果だつかひ残りが此財布に。二朱一朱と銭が少し。これをやるからコレ馬士どの了簡して通してくんねへ馬士「ハ、アい、面の野郎だア。早く出しやア絆がすむに。何だのかたのどまやべくるから。據なくぶつたのだ。是せへありやア何にもいねへ。どりや長半場へ出かけうかト小唄まじりに馬の口。驛路の鈴もちやら〜と。森の方へと歩行ゆく。かゝる所へ一個の漢子。身の丈およそ六尺ばかり。色黒くして頬骨たかく。眼はまどかなる大漢子。こなたの藪の茂みより。見はれ出しが馬士の首。ぐつと捕へて。男「これ微六ヤイ。わりやア人を見ちげへたな。今貰つたその金は。こつちへよこせふてへ奴ト天窓をなしにやりつけられ。微六は一言半句もなく。財布のまゝにさし出せば。漢子はどつて熟見。やにはに此方へかけ来る。半兵衛夫婦は是を見て。さては今來る漢子こそ。此悪見等が頭領にや。こなたをさして駈來るはまた吾々に辛きめを。見せんとの事なるか。今漸くに馬方の。難儀を免がれしと思へば。ま



た一人の大漢子とはいかにしてこの難を。のがれんものぞ將に是常言にいふ前門の。虎を防いで後門に。狼おほかみいるゝたぐひなりと。心もそらに氣も顛倒てんとう。わけは知らぬと荒くれし。漢子にうたれし父のさま。見て哀しきや聲はりあげ。泣稚子を懐きかゝへ。にげゆかんとする所へ。はやくも漢子はかけ付て。腰を屈めつより來るにぞ。半兵衛夫婦はこれを見て。さては吾等に害心を。懐くものにはなかりしかと。思へど心晴こころはれやらず。瞳ひとみを定めてよく見。恠りとして半兵衛が「ヤアおまへは鳴戸村の。市藏さんではござらぬか市藏」そういふおまへは順慶橋の。半六さんとはさつきから。見たゆへに馬士の微六にとられた財布をとり戻し。おめへにけへしてあげるのだ。斯いふは可笑が。ノウ親父さんの堅くるしさ。わたしが仕うちか氣にいらぬへとて。八年このかた不通になつても。先頃おまへの御手簡で半兵衛さんの辭世たも伯母御の死んだもみな承知。それからどうぞお尋申て。此方の容子も説さうと。思つたけれどイヤモウ何か。貧乏びんぼう隙なし釜の下の。用にはつかり追つかはれて。陸々容子も聞ません。こゝに居なさる此の女中は。おかみさんでござへますか。生「イヤハヤ何から申そうやら。色〱説はなしがあります。が。いつぞや内〱申た通り。二度の火事で誠にまる焼。どうも仕やうがない故に。内をさまつて此處等くだり。しらぬ旅路へ出ましたも。何處へ斯どのあてもなし。不通になつても從弟は從弟。おまへのうちへ尋て往て。どうか世話してもらひたさ。女房子までを引つれて。此處

等を雨漏あまととんだ奴に。出會て錢をゆすられるのも。怪我でもあつては此方の外聞ぐわいぶん。それより無事に濟すまそうと思ふか一ぱい是は大きに。ありがたうござりました。コレお梅やこの御方が。兼てはなした市藏さん。よく〱今日の御禮もいはふし。また後〱をも御頼おたのみまうせ。梅「そんならあなたか鳴戸とやらの。市藏さまでござりますか。不測な御縁ごえんでは申スもの。ツイしたとから親類しんるいの。おなかがへとなりまして。荏土じんつへもおいでなさらぬと。アノ半兵衛が常住じやうぢやうはなし。また今度はいろ〱な。縛もつれたとがございまして。御覽のとふり親子三人。おたづね申して参りました。あなたの御宿は御近所か。生「イヤこりやはじめて御目にかゝり御叮嚀ごていねいな御口説ごくわい。サア是からわたしがうちは。まだ三里ほどもありますが。案内をして往やすから。モウ氣づけへはござりやせん。サア半兵衛さんお出なせへ。定めて斯してござるからにやア。據よんぞとない譚たんもあらうし。色〱はなしもあるだらうが。マア〱そりやア緩〱と。聞てもことこのすんだわけ。ツイに仕なれぬ股引草鞋。モンおかみさんおまへもマア。さぞお草臥くたびなすつたらう。どうも此處等は不自由で。馬はあるが駕かはねへ。迹あとからそろ〱お出なせへ。梅「ホンニさつきの馬士の悪さ。どうもやうかと思ひましたよ。あなたに斯しておめにかゝれば。誠に地獄ぢごくで佛ほとけとやら。チエモン且たんな氣が丈夫になりました子。生「そうさ手めへのいふ通り。ひよつと怪我けがでもあつて見やな。二朱や一分にやけへられぬへト二人は心に歡よろこびて。九折つちぢりなる山道を。あ



るひは登りあるひは下り。松の郷まで至りしときは。日も西山に傾きて。いと曇れる空なれば。はやほのくらくなりにしに。右手の方を見あぐれば。遙に樹もく森々と枝をかはして雲に聳へ。また見おろせば削なせる。碧潭將に數十丈。蔦桂はひひろごりて。溪川のおと濤々と。左手は田面うち開き。さらに眼をどいむるものなし。かなたこなたに群居鶯は。沖の白帆に異ならず。賤が赤土の藁屋より。けふり立さへ興あれど。かゝる佗しき身となりては。佳境を見ても慰むる。種とはいかでなりぬべき。さてもその夜初更のころ。よふやくにして上總の國。鳴戸の村へ至りしかば。彼市藏は案内して。門の戸あくれば女房お柄「チヤ今夜はでへぶ早かつたの。市ム、これお柄や。荏土からお客が來なすつたア。曲突でも焚つけろへ。板ナニ荏土からたア。市順慶橋の半兵衛さんよ。板ヤレソリヤア遠イ所へ。よく尋ねてござらしたつた。罐子に温湯がございますト何か知らぬど夫婦して。他事なくもてなし足沃がせ。溢茶勸めて過方を。具に語るもうさはらし。半兵衛夫婦は心おち居て。雲時はこゝにといまるものから。此市藏が父が代には。優にくらしてあるよしは。母の説に聞しかど。今はなか〜其日をさへ。送り兼たる在さまに。半兵衛はその容子。何かにつけていぶせくおもひ。いかいばせんと妻にも語れど。土地の容子も知らぬ身の。詮方なくてありけるが。半兵衛はこの程より。最大苦勞をせしうへに。心の隘きものなれば。かなたこなたの心配に。いつしか病ひをひきいだし。ぶ

らり〜と起りやらす寐もやらす。たゞ鬱々と塞ぐのみ。それさへあるに眼を煩ひて。人の貌さへ見わかぬにぞ。お梅はかなしさをやせなく。近き里なる醫師をまねき。色〜介抱したれども。稍〜に霞きて。輒く全快あらざるべしと。聞て猶さら物思ひ。胸の糸ぞ不便なる。さて彼市藏親の代には。ゆたかに暮せし者の。俄にかゝる躰となりしは。いかなる譯と尋ぬるに。賭博をこのみ酒をのみ。たゞ遊興を事として。家業を嫌ひあそびあるけば。妻のお柄もその素性。いと藏淫たるものにして。良人があそび歩行を微幸。あたり近所のわかものを。集會て夜中酒盛し。夜のあくるをも日のくるゝをも。わかたぬばかりに世を送れば。三年が程に身上をつかひなくして持つたえし。田地も残り少なくなり。今は世わたる便もなければ。小人窮して巧をなすと。古語にはもれぬ市藏夫婦は。從弟どちなる半兵衛が。荏土の住居のものうさに。尋ねて爰へは來れども。渠は篤實律義の生れ。むだ金つかふ者にはあらず。身上ままひて來るからには。道具諸式の活代も。所持したるに疑ひあらじ。と思ふにつけて夫婦はよろこび。他事なきさまに款待にぞ。半兵衛夫婦は市藏等が。かゝる無道の心を懷ひて。信やかぶりをなすとは知らず。零落したる身を憐れんで。深切にしてくれるかど。思へばいと氣のどくさも。身に去み〜と思ふから。ある時お梅と相譚して。兎ても此地へ足をどいめ。志ばらく時のいたるを待んど。思ひこみたるとなれば。今こそ計らぬ眼病に。難儀するとも是は詮なし。かく



寔々しき市藏が。住居に同居せんとは。氣のどくさも一倍なり。此處等近所に借家あらば。付  
 みて移りすまんもの。あるときこれをお柄に語れば。おどちは聞て點頭つ。さもあらば隣  
 の婆に。明家をたづねさすべしと。緯もなげにうけあひつ。まかしくなりと市藏に。ひそ  
 み語れば市藏が。その計較はちがへども。今さらこれをどむるによしなく。心に一つの奇計を  
 めぐらし。お梅を一間のうちに招き。市「モシお梅さん此ごろは。半兵衛さんの眼病で。苦勞の  
 うはぬりしなざるなア。夫にツイてもわたしが内が。こんな貧乏所帯だから。居るも氣のどく  
 らしいといつてか。借家があらば借てへと。お柄にはなしなすつたそうだが。イヤハヤ借家は  
 ふるほどあるが。今さら所帯を新にもたずと。マア／＼眼のよくなるまでも。此處に居たがい  
 じやアねへへ。今までもとも月の小づかひ。鹽増薪の代までも。それ／＼いれて居なざる  
 もの。厄介だなんぞとは。些も思ひやしやせんによ。却て餘所へ往なすつちやア。色／＼不自  
 由でございやせうぜ。梅「ハイモウだん／＼御深切に。おまへさんなりお柄さん。世話してくだ  
 さるを不足とあもつて。斯申スではござりませんが。實は葎土を立ますとき。二ツ残つた道具  
 さでも。みな活まして七十兩の。金にいたして參つたのも。どうぞ田地かさもなくては。なんぞ  
 の株でも買まして。暮したならば親子三人。氣やすく世をも渡られやうかど。思ひついでの相  
 續づく。此方へ參つてモウ彼是。四月ばかりになりますうち。御覽の通りの眼病で。心細いと

ばかり。またがあなたの御世話になり。便々として居りますうちに思ひの外に減のは黄金。つ  
 かひなくして仕まつたら。乞食になる外仕やうもなし。逆も一生此うちに。お世話になられる  
 身でもないから。借家などかりまして。残りの金で少しなりとも。田地を買ておきますつもり。  
 それじやによつて些もはやく。いたしたうござります。市「ホ、ウなるほどそりやアい、心かけ。  
 實にお前のいふ通り。金錢といふものは。兎かくつかひ込勝手なもの。なるほど早く田地でも。  
 買ておくもよからうなれど。借家は此處の村はづれに。丁度いゝ所がある。わたしが方から言  
 こみやア。たど一翌でも翌々でも。直相譚は出来やすが。田地のほうはそうもいかず。先さし  
 當て沽ふといふ。心あたりもねへ譚だが。ハテそれにしても大枚の。金を持ておめへがたマア  
 肝心の主は眼病。あとは女と見どもばかりどんな事でも有た時にヤア。首を縊てもおツつかね  
 へ。なんでも夫おめへがたが。持て居ちやア不安心だ。梅「さやうさ僅な金なれど。脇へ引こし  
 ます日には。心づかひでございます。どういたしたらよふござりませう。市「そうさなア外の物  
 ならわたし等が。預つてもよけれども。親子の中でも金は他人。おめへがたが命の綱と。恃み  
 きつた大事の金を。あづかるとは眞平だが。どうか丈夫な仕方はねへかト小首傾けや、暫らく  
 「ア、／＼いゝとがありやすわへ。村の庄官の雁八どの。近郷までも名の通つた。最大金持  
 そのうへに。情があつて難義な者をば。よく世話をする人じやによつて。おめへ方の身の上を。



具ツギに説はなして相應あはな。田地うりての沽人うりてが出来るまで。ひと月なり二ヶ月なり。金を預あづかておいたがよからう。此人ここのなれば大丈夫たいじやうぶだ。勿論もちろん金かねのとだから。そりや倍ばいとした預あづかりの。一札いちせつとつておくがよし。どうで田地うりての沽うりひきも。庄官しやう官が判はんをするものだから。是こゝが一いちばん上じやう分別ぶんべつ。ナアお梅さんどうであらう。梅うめ、ハイ庄官しやう官さまのとならば。何なにのまぢがひもありませんまいから。どうぞそんな戸こにでも。市いちム、くそれが承知しやうちなら。是こゝからすぐにはなして見やう。まかし説はなしたその迹あとで。どうせう斯まじせうと間違まちがては。わたしも迷惑めいわく。半兵衛はんべいゑいさんへも篤あつくりと。はなした上にするがい。梅うめ、モウあんばいが悪わるイから。説はなしするの氣きむづかしく。何なにやかやも折おを見て。やうく説はなしますやうなれど。是こゝは大事たいじの譯わけがらゆへ。篤あつくりはなして見ませうよト別わかれて奥おくの一間いっけんなる。良人おつとが傍そばにいたりつゝ。具ツギに是こゝを物ものがたれば。なる程しやう庄官しやう官の雁かり八はちは。豪家ごうかといふを先頃いっせきより。聞きたともあるゆへに。市藏いちざう夫婦ふうふが心身しんみの世話せわ。いつそ預あづかけておくほうか。氣安きやすからんといふにつぎ。お梅うめはそれを市藏いちざうに。かたると等ひとしく一市藏いちざうは。そんなら今いまから庄官しやう官許かり。たのんで見やうと立たいでぬ。こゝに鳴戸なりどのかたほどり。富口とみぐちといふ所に。賽さいの目の戀六こひとて。年は三十四五なるが。近所きんじよに名なたかきあふれ者もの。昨夕けつも首尾くびびの悪わるきにや。木綿布子きのわたぬいの肩破かたやぶて。綿わたもあらはに袖口そでぐちは。二所ふたところ三所さんところやけ焦こげて。島しまか小紋こもんか忘れぬまで。金色こんじきならぬ黒くろびかり。襟えりのほどりにそよぐど。纏まとふは千手せんじゆくわん觀世音くわんおん。見るめもいふせき打うち扮はなにて。來きかゝる處ところへ市藏いちざうが。往ゆきあひて木蔭こかげ

に招まき。何かなにひそくかたらへば。戀六こひ莞爾わんじやくとこ小踊こおどりす。市藏いちざうもまた小踊こおどして。立たわかれしが戀六こひは。夫おつとよりわが家いへへ立たかへり。茶釜ちやかまと鍋なべを帶おびにかえ。向むかふの婆おばが袖そでなし羽織はおり。隣となりの嫁よめがたしなみの。おびを借かけては羽はありにかえ。たゞ時の間まに大盡たいじんの容すがたとかはる形なり恰好かっこう。心の鬼おにはあし隠かくし。表おもてに見みする柔和じやうわの面おもてつき。猫ねこなで婆おばが作聲つくりこゑ。エヘンくのせきばらひ。彼市藏かいちざうが脊戸せせどのかたより。入いり來きる。れ何事なにごとぞ。渠等かみらが奸計かんけい知るべからず

孝女二葉錦卷之三終



孝女兩葉錦二編

老子の曰。言ものは不知智者は黙す。とらべなるかな。不佞春水知らされば。常に多言のそしりを蒙。また筆とれば左に右に。悪口の癖ありて。予が麓漏の噂をば。友人よりして聞ながら。我慢は止めまけし魂へらず口さへ此頃は。寒さと金とに差支。不斷毎日大晦日。昨日今日まで待わびし。お正月をも嫌ひになり。美服着たがる小兒の爲に。思ひ出すは親の恩。ねだり言せし黄表紙の。手箱に餘りし兒戯が。忽然報ひし戯作道。他見はどふか風流の。なぐさみ半分作料を。もらふはどふやら浦山しと。思ふ才子や近友の。お蔭で活業爲永が。樂屋は只の素人にも。遙におどる文盲短才。偶中の幸ひも。早十餘年一昔。そろく北山しぐれ月。趣向も種も絶く。に。庵淋しき草の扉へ。案内人は平川館。元來拙子をと

りたてのひるき連とて相かはらす。どふだ今稔の新板は。種も大畧盡たるふと。慮つて一番妙作を。目附出したが此儘では。文句の續きが覺束ない。ちよつくり校合し給へと。書林の投ぜし一小冊。名におふ梅暮里谷峩子の。花の枝ぶり直しては。おこがましけれど世活の。一助となれば詮方なく。筆を教訓亭の南窓に探て

爲永春水老人誌

孝女二葉錦二編

東橋 耕春里 谷海峩



# 孝女二葉錦卷之四

東都 梅暮里谷峩著

## 第四回は 戀六が計較

鷓鴣よく言ども飛鳥を離れず。人として禮なくば禽獸にだも志かざるべしと。こゝに養の目の戀六は。そこらきよろ／＼睨まはし。衝と上坐に居なをりて 戀ヲ、御内義闇がしかる。モウ茶も何もかまひなさんな。イヤどきに市藏どの。とつきいはれた荏土の衆はどこにござるの。聞ばきくどていとしらしい。そう大まいな暮しをされて。荏土で育た御身分で。こんな鄙へござつては。ア、さぞ何か不自由で。穢なくてならッしやるまい。マア蠅のおほいばかりも。お荏土とはちがふてな 車何から何までだん／＼と。庄官さまのお情ぶかさ。今もよく／＼言てきかせ。程なく此處へござらうからと。説きましたらそれは／＼。病人はじめ歎んで。お待申て居ましたつけ。ヤアこりやお柄客人に。雁八さまがござつた。はやふ奥へ知らせやれといふ聲き／＼つけお梅はかけいで 梅、モシ市藏さんこのお方が。庄官さまでござりますか 車、ア、い／＼さつき委しう断した。お慈悲ぶかい雁八さま。おまへがたの身のうへを。氣のどくがつ

てとる物も。とりあへず穢くるしい。所へおいでなされたのじや。いふべき事はわたしから。篤くり申ておいたによつて。半兵衛さんにも引おはせて。借家のともおたのみ申シ。またそれ例のお預物もな。こりや大切な事じやによつて。御直談がようござる 梅、イエモウ兎かく人さまの。お世話でなければ往立ませぬ。親子三人が此身のうへ。モシあなたは此村の。庄官さまでござりますげな。大かた委細は市藏より。お聞なされてござりませうが。おはなし申も癪のたね。不僥倖な事ばかり。續ましていまの身の上。まだも苦勞がたりないで。此節良人半兵衛が。ぶら／＼病ひに眼病と。かて／＼交ての難義のなか。こゝもどとても以前どちがひ。かやうな貧しい暮になりうか／＼せわになつていて。米の才覺薪のくめんど。主夫婦が心配を。見るにつけ聞につけ。きの毒さも一倍で。氣病も重る良人が心ね。いつそのとに借家をかり。ゆる／＼ほようしましたら。はやくよくなるともあらうと思ひついでの相譚づく。どうぞあなたのお情で。容子もあらぬ私ども。よろしうおたのみ申ます 戀、これは／＼ア、おまへが。半兵衛どの、御内義か。承まはれば色／＼と。いかい御苦勞なされたそうな。イヤわたしとても貧窮もの。ろく／＼世話もなりませんまいが。マア／＼こゝの市藏など。鏡て見たらわしの方が。些とは豊にして居るだけ。難義な人があるときは。身に引うけて世話してやつた。とも大分ありますが。マア／＼それは鬼も角も。倅、借家もあるとなれば。別に所帯を持しやるほうが。



双方ともによふござらう。病氣の中で何やかや。むづかしからうがナア御内義。半兵衛どのにおめにかゝつて。眠りそこを極たいものだ。梅「モウ久々湯にも這入らず。見ぐるしい躰であります。只今これへ連まして。戀「イヤ〜何も其やうにとり繕ひはいらぬと。斯して此處へござつてみれば。わたしが支配をする此村。まうし悪いが親分子分と。マアいふたやうなもの。サア〜わしが参りま志よ。たちあがれば市藏も。俱に立つ〜お梅が袖ひき。市「ナニお梅さん此かたは。實むぞうさな御氣性で。むづかしいとはおきらひだ。ナニ〜あそこに寐て居るなりで。説しなすつたがよふござへす。梅「それでもあんまり見ぐるしい。市「イヤサわたしが斯いふから。心づかひはむだなどといひつゝ奥へ椽頬づたひ。あくる障子の音をき。見れども見へぬ眼病に。蒲團のうへを這りだし。市「こりやどなたでござります。アノおはなしの庄官さまかの。市「ナニ半兵衛さん寐て居なせへ。雁八さんがござつたから。御案内申やした。モウ〜委細をいふには及ばず。借家のところと。まひとつの。説しを志つかりお極なせへ。梅「モシ庄官の雁八さまが。おいでなすつてさつきから。御深切におつしやつて。借家も直に借てやる。□るとなら何なりと。世話してやらうとあついで御詞。よく御禮をおつしやつて。そうしている〜お説しを。市「イヤモウ彼是不測な事で。最大おせわになります。なを此うへの御心ぞへ。どふぞお侍申ます。戀「ナニ禮には及ばぬと。きけばどふか田地でも。買たいのお望そふじや

が。マア〜當時活人もなければ。氣をながくしてござつたら。相應なともござりやせう。市「モシ雁八さまそれについて。此半兵衛が家財諸道具。活代なした金が少々ござりますが。この通り目は見へず。迹は女と子供ばかり。心づかひと申するも。さら〜無理とはおもはれず。御迷惑ではござりませうが。よい田地の活人があるまで。おあづかりなされては。戀「イヤこりやそれは先ほども。おまへより委しく聞たが。餘の物なれば兎もかくもじやが。金子の事はちどいなもの。半「兼てあなたのお物がたい。御深切なるお心いれも。承まはつて居ますれば。どふぞお預申しておいて。此盲目めが朝夕に。安心いたして居たさゆゑ。梅「そうもなければ借家をかりて。氣やすく保養さすとも。できかねますから庄官さま。そうおつしやらずに雲時のうち戀「ハテサテ是は迷惑じやが。さほどに言るゝものならば。いづれともいたしま志よ。ナア是市藏どうしたもんだ。市「どうぞ渠等がねがひどふり。大金とは申もの。僅に六十五兩の金子。あなたのお目から見るときは。わたし等が鑑百文ども。つり合ますとなれば。是はせひ〜私も。俱々おねがひ申ます。戀「そんならどふも仕方がない。預つて志んせませうが。なんのことも極りは極りだ。鳥渡ひと筆あづかりの。一札書て進せましやう。硯箱を加して下さい。梅「ナニモウそれにも及びませんが。そうおつしやらばた〜一筆ト出す硯へつぐ水の。清きに羞る心の底。墨と等一腹黒き。計較なりとは神ならぬ。身に志るべくもあらざれば。半兵衛夫婦はよ



ろこびて。金をとり出し渡しにぞ。戀六あらため懐中し。なを寛爾とくど傍を見て。戀六、この見が女兒御か。ア、田舎の子供とちがふて。立ふるまひも志なやかに。マアおどなしい事だなア。容貌といひ人がらも。イヤまた是は別だんだト子を譽らるゝ親の身は。嬉しながらにうち微笑。梅、イエモウどふもわがまゝで。毎日くわやくばかり。誠に困りきりますヨ。戀六、ふいひなさんな女の見はモウ今の間だ十二三にもなつて見な。ひとりでにナア市藏どん。おとなしくなるもんだ。市、さやうさマアく、此兒があるから。苦勞の中でも旦暮の。たのしみも申すもの。わたしなどは今もつて。たつた一個も出来ません。モウはや兒はありますめ。戀六、ふでもねへのさお柄さんもまだく、若いとだから。チト精出してこしらへなせ。イヤどきに半兵衛さん。長談義で御退屈。そんならおいとま申す。生、これはく雁入さま。わざわざこんな見苦しい。所へお出でおそれいります。どふぞはや私も。はやく目がよくなりましたら。村の内の兒供しゆに。手跡や曾露盤の稽古でも。してやりたいと思ひますが。さてく、何か果敢とりませぬ。戀六、マアく、なんでも氣長にしなせ。そんなにやきく氣にする。猶く逆上て目には毒だ。ハイそんならと此方へ來れば。お梅は庄官につきそひて。門の口まで見おくりつ。主夫婦に禮をのべさせてその借家の事をたのみ。近きに移る準備しつ。竈よりして筥小鉢。釜よ茶釜よ摺鉢と。何につけても手一ツを。信しやかにお柄があしらひ。俱々世話をした

りけり。かくて戀六六枚の。金を詐變たちいで。元は此家の市藏と。分ちとるべき巧なりしが。公人錢を見るときは。蠅子の血を見るときとくかや。まことに得がたき此金を。懐中しながらその半を。市藏にあたへんこと。今さら惜しき事なりと。思ふものから逸わしいだし。家にもかへらずそのまゝに。何方ともなくうせにけり。かくとも知らず市藏は。半兵衛夫婦を計りおほせ。既に黄金は戀六が。うけとりたれば仔細なく。少しもはやく彼處にゆきて。分ちとらんと戀六が。かへるやいなやそこく。支度と一のへ馳出て。その隠れ家なる富口へ。いたりて見れど門を鎖せり。心に少し疑ひて。隣にて聞かれど。ゆくゑはさらに知らずといふ。こゝにおいて胸とらるき。這奴大金をとり得たれば。忽地心變りして。吾にはあたへずおのれのみ。得つかんとて形を隠し逃たるものか志かはあれ。渠とは竹馬の友にして。互に心も知り合たる。ものなればこそ密計をも。語りてかくこそ計らひしに。彼戀六が歸るとき。俱々家をいでんと。お梅がおもはくはかりて。少し時刻を伸すうち。かく慾心に絆されて。吾と朋友の義をうしなひ。逃たるものか左もなくば。博坊へ往やしけん。それより亦も喘。畊道傳ひに走り歸り。常にゆきかふ悪見の。家にゆきて尋ねても。さらに見へずといふにより。いよく、這奴めわれを出しぬき。逐電したるに疑ひなく。につつき奴と齒を喰切て。足ずりしつゝ、貌の色。あるひは赤く或は青く。白眼まはれどてがよりと。なるべき事もなきまゝに。つらく



沈吟したりしが。元より慾に目がくれて。肉身わけた半兵衛が。命の蔓と貯へたる。黄金を奪ひどつたれば。その罪たちまちめぐり来て。約に違ひ義を捨て。逃さらるゝは天道の。惡をいましめ給ふらん。よし。是も詮方なし。後にあらはれたらんととき。とても命はとらるべし。阿容こそして縛首。討れんよりは今すぐ。死するにまかじと思ひ定め。人迹絶たる原中にて。腹かつさばき死なんと思ひ。こなたの原へすこ〜と。來かゝりてまた思ふやう。吾今罪を悔なげきて。死たりともその金の。戻るべき謂れなし。吾死たりと聞ならば。戀六めはいよ〜氣安く。世を憚からず徘徊すべし。それより這奴が往方をたづね。めぐりあひなば此恨を。むくひて吾も死すべきに。おそきものかと自ら問自ら答へて引かへし。惡見仲間のとなれば。それならんかと思ふ所。いち〜尋ね歩行けり。さても半兵衛夫婦の者は。かゝるべしとは一點志らず。また市藏は豫てより。五七日も家に居らぬは。珍しからぬ事なれば。お柄は元より苦にもせず。半兵衛等も心づかず。されどお柄は市藏が彼戀六といひ合して。とりたる金をいかゞはしけん。暮しの足にもなる事かと。俱に夫婦を欺むきしが。そをもて遊びにいづること。薄情きとよと思へども。また尋ねべき宛もなければ。おうめが持みも黙止がたく。彼の是のど世話をして。彼借家に移らせつ。はや五三日経にけれど。市藏絶て歸り來されば。適おほくの金を得たれば。時日も志らず博坊に。居るには疑ひあらじと思ひ。或日お柄はたちいでし。

聞ば此ほど戀六を。尋ねて此處へ來りしが。居らずと聞て驚きつゝ。たち出てより此方へは。再び來りしとなし。聞てお柄はいぶかしみ。また富口に赴きて。戀六許をどひければ。隣れる人が申スには。はや七八日以前のど。にわかには縁の出來たりとて。嫁が帯など時借して。羽織衣裳も輝やかに。立いでたりしがその日より。絶て歸りし容子もなし。こなたにても尋ね居れど。さらに在家を知らずといふ。お柄はあどろきさてこそな。そうして見れば庄官の眞似して。來りし時の事それより内へかへらずと。聞てはます〜心がり。さりとて最はや此上に。尋ね往べき所もなし。されば戀六々々に。吾身をさへも詐變て。迎も瘦たるこの身上。捨るに惜氣もなきものなれば。他國へゆきしに極まつたり。嗟悔しや斯まで。情を知らぬ人とは思はず。俱に惡事を計較て。もし此事のあらはれなば。何とて言とく事あらんと。なを往末を思ふほど。そら怖しくなりければ。家にかへりて熟と。思案なせどもその甲斐なし。半兵衛夫婦がこの事を。夢にも知らば庄官の雁入ぬしへ尋ねゆき。一伍一什をいふは必定。そうして見れば戀六と。良人は往方知れざる身のうへ。吾のみ罪をかうむりて。命にもあよぶべく。先半兵衛等に此事を。曉られてはならじと思ひ。ひそ〜家財をうり拂ふに。見ぼしき物は頼活て。迹に残れる品なれば。價のたかき物はなし。わづかの金にうり代なし。迎もの事にと寵も。たゝみもともに直踏させ。價の高下を古鐵買と。彼よこれよと論ずる所へ。思ひもよらずお梅



が来れば。お柄が胸はどいろきて。その挨拶もあどやさき。容子をあやしむお梅が心中。曉られじとする此方の心配。見るめもおかし古鐵買は。譯を知らねば高聲に「この疊はモシおかみさん。潰にほかなりやせん。なんでも兩方ツツくるんで。二米と百なら買やせう。此籠も見かけばかりで。今當世にはむかぬへやトいはれてお柄はふりかへり「エ、やかましい何の事だ。客のあるのにどうかうのと。急にこまる譯があるから。どの位かどよびこんで。直段を聞いておくばかり。マア〜それは活はしねへよ 直、いくらなら活なさる。此間から色〜の。がらくを買た序だから 柄「チャこの人は何をいふ。おめへに何を活ました。すかねへ事をいふ人だど。目くばせすれどこなたは曉らず 直「ソレ茶釜もわたしが買しか。萬籠と焚論も五百に買たア。そうしておめへちか〜に何處へか往と言たじやねへか 柄「エ、この人はどうしたよ。こゝはわし等が居やしきだ。此處を捨て何處へゆくもんか 直「いかふといくまいと其事は。わし等が知つた事じやアねへが。おめへらがそう言たからよ 柄「チャ啞をつく人だノウ。何どこへいくもんか 直「それはそれでいゝがサア籠と疊はどうする。いよ〜それじやア活ねへのか 柄「マア〜今は活ないよ 梅「モシお柄さん此間は。色〜おせわになります。先すこしは片付ました 柄「さぞおいそがしうございませう 梅「ハイ何かごた〜いたしますのさ。そしてマアおまへさんは。何處へかおいでなさるのかへ 柄「イエなにわれは古鐵買の。まちがひでござ

ります 梅「それでも疊や籠まで。直踏をさしてごらうじて 柄「なに〜われはあんまりと。穢なくなつて見たうもないから。どうぞよいのを買かひやうと。思つて直段を聞きましたのさ。此間もアノ人が。どうするのだといひますから。なにわたしもちと外へ。引越さふと思ふからと。戯談いふたを本氣になつて。ア、申したのでございます 梅「そんなら大きに私も。マア〜安心いたしました。若またおまへさん方が。何處ぞへおいでなさるなら。便りすくない私どももどういたそうかとぞんじまして。それに此ほど庄官さまへ。おあづけ申た金だと言ても。畢竟申さば市藏さんと。おまへさんのお世話ゆゑ。借におもつておりますもの。もしも此處においでなさらずば。マア〜われはとり戻して。心づかひをいたしても。持て居たうござります 柄「イエ〜なアにどういたして。お心づかひなされずと。マア〜なんでも半兵衛さんの。病氣を直す工面が肝心 梅「そう言とならすこしでもあんじる事はございせんが。烏渡今日は此間中の。おれいかた〜アノ子ばかりを。側へつけておきましたれば。かうして居る間も氣がせきます。また此あいだに参りませう 柄「マア〜それでも些のあいだは 梅「イエ〜それでござりませぬ。私がありませんと。兎かく何か不自由ゆゑ。亥れきつてなりませぬから 柄「そうおつしやるをむりどめも。かへつて迷惑なさらうから。是は〜ごねんのいつた。半兵衛さんへもどうぞ宜しく菊さんをお遊びに 梅「ハイ〜ありがたうございますト今はかくまで零落て



も。むかしは下男下女までも。つかひてくらしせし身の上は。詞づかひも倍として。かへる容を見おくるお柄。ほつと物息あたりを見まはし。先お梅をば言くるめ。かへしてはやつたれど。一躰かしこき生れつき。今日の容子を半兵衛に。物語して油断なく。いよこちらの内證を。怪しいとまで見透したら。急にいるからアノ金をと。言て来るには極まつたり。そうして彼是しやうよりも。とても立退この身の上。疊四五枚電の一ツや二ツ残したとて。二朱か一貫往がけの駄賃錢にもたらぬと。此間より沽ためた。金は腰なる巾着に。二兩三分はくしつけ。あいたは是も火急の用心。そうじやトひとりでうなづき。曲突たきつけて溢茶を沸し。糧飯四五はいさらく。何處を宛とも志らなみの。賊にひとしき心根にも。身のなる果をかこち貌。あとを見らるゝ心地して。往方。何方と定めぬと。聞あよびたる繁華の地。荏土の方へと馳さりけり

孝女二葉錦卷之四終

孝女二葉錦卷之五

東都 梅暮里谷我著

第五回ハ 父母の病着

忘れても汲やしつらむ旅人の。高野の奥の玉川の。水ならなくに良人の心。くみかねたりし女房は。襟に眼をさしいれて。ぬぐふ紙さへ露まづく。よはり果たるその風情。岸の柳に春雨の。ふりぞかゝれる禍の。神の祟りか知らぬども。重ねくのうき身のうへ。雲時十方に吳羽鳥。羽がひもがるゝ心地こそ。やるかたなくも見へにけれ。首をつくく傾けて。見まくほしさも眼病の。盲目に等一身の因果。生ア、モウお梅なげきやんな。是といふも父うへの。丹誠なされたアノ身上。急火にあつて諸道具その外。残らず焼たとはいふものゝ。わづか五年か六年で。身上を持つぶし。迹形もなくした罰で。かういふめにも遭のだらう。つくく思へば此身ほど。因果なるものが此廣イ。世界にまたとあるものか。そういふ事と知たなら。己か手まへの腹へでも。括してあいた方が丈夫。とは思つたが市藏が。平生からして信實に。世話してくれるを誠とおもひ。詐變れたは己が不覺。どふる今さら仕方がない。梅「イエ」おまへは目かいも見へ



ず。病煩ふてござる身のうへ。容子は聞てもござらうが。その人の顔さへも。見る事ならぬ事なれば。實のどと思ひなさるも。さら／＼無理ではござりませんが。わたしは何かかけ合て。手足も達者な身を持たながら。庄官といつて来た人を。寔と思つたあやまりは。ホニニ死でも言譚の。仕やうもない程悔しさも。居ても立てもわすられませんか。さつき往て見たときに。胸りとした此むねが。まだわく／＼として居ます。是といふもわれ／＼が。身の因果かどあきらめても。あんまりなち柄さん。市藏さんはあまへのために。現在血筋の従弟じやないか。久しくかゝつて居る内も。見れば見るほど貧しさを。氣の毒だと思ふから。それは大てい氣をつけて。味噌鹽までもこちらでかひ。なんでも世話のないやうにと。其日／＼の小づかひまで。借ておいたも見ず知らずの。土地へ来たゆゑアノ人ばかりを。便りとおもつて来たものを。假令何ほど貧乏で。金が欲しいといふたとて。甘／＼許變て三人が。命の綱と思ふて居る。金をとつて逃るとは。マア人間の形をして。心はホニニ犬猫にも。おとつた事ではござんせぬか。斯いひましたらあまへの身うち。お腹をおたちなさるか知らぬが。ソレいつか貧乏の。肴屋がかあいがつた猫があつて。餘所のうちから小判をくわへて。その肴屋にやつたとやら。その説しは田舎まで。きつい評判でござりましたが。マア畜生でも思は知る。アノ人とは畜生にも劣た人でござります。今にもあれ見あつたら。わたしは命は捨ましても。恨をむくはにやなりませぬ。

そしておまゑへ言譯に。わたしは死んでまいます。女だてらに大せつな。金をあづける相譯し。それをばどられ阿容こと。どうして活て居られませうト身を平伏て悔なげく。思ひはおなじ事ながら。時の災難身の因果と。また明らかむるも漢子氣の。よはる心をとり直して。生手めへのいふも尤もだが。今さら何べん操かへしても。六日の菖蒲十日の菊。とんと間にもあはぬわけじや。こんな苦しい身のうへに。なつたればこそ六十や。そこの金のにもくらうする。言て見れば端金。出来る時節が来たならば。さほどと得がたい寶といふ。わけでもないからモウ／＼なきやんな。ソレお菊めが手めへの貌を。ぞつと覗いて見て居るは。それより早く火でもいれて。ぼうめを寐かしてやらつしやいといはれてふつと氣のつくお梅「エ、マアこの見がわたしの貌を。覗きこんだが見へますかへ。生イヤ不測なは今までも。日のあたるさへ知れぬ目。まだ志つかりとは見へないが。ふいと其處等があかるくなり。お菊の貌もあり／＼と梅「こりやマアどうした僥倖やら。日ごろ信ずる此村の。不動さまのおかけかや。エ、ありがたいト手をあはせ。おがむも妻の一心に。神や佛の冥助を得て。今のいま／＼で見へぬ目が。現に厚紙をへぐごどく。稍にはる／＼黒雲に。光りてりそふ真如の月。思はずはつと平伏て。南無や大慈のおん誓ひ。空しからず此眼病。たちまち平愈いたせし事。偏に菩薩の御加護ゆる。アラありがたや／＼トふし拜みつゝあたりを見。お菊を矢庭にかき抱きて。生ヤレお菊よとさ







貧の盗と喩のとふり。あり／＼よくない事もすると。先頃うはさもあつたれど。よもや是ほど大造な。と仕やうとも心づかず。勿論由縁のお人だから。他人の物とはちがふと思ふて。いたした事かは知らないが。金は身うちの物にもしろ。庄官の名前を語ては。どうして／＼濟ませぬ。マア市藏は知れてある。わし玄やと言て来た人の。形恰好はどんな漢子じゃ。きけば金子の預りを。とつて御所持と申すと。どれ／＼それをも見せなさい。申さて／＼どうも怪しからぬ。さやうな者ともぞんじませず。私が母の里。アノ市藏は従弟ゆる。よもや／＼と氣を怠し。殊にそのせつ私は。目を煩つて人貌もろく／＼見へぬほどでござれば。妻に萬端かけあはせ。市藏夫婦を宛にして。既に預り書付にも。及ばぬとまで言ましたを。夫でも是は極りじやと。いふてかゝれた一札はすなはち是にトさし出し。庄官のまへにておし披けば。こは不測やな今までは。あり／＼書し文章の。墨はばら／＼何方とも。ちりて跡なき白帛の一札。傍なるお梅はわれ知らず。小膝をすゝめてあきれはて。舊今半兵衛の申すとふり。その折には眼病にて一字一點見る事も。なりませぬば私が。及ばずながら談合して。見て居る前て書たる証文。判も残らず散ましたは。こりやマア夢か狐の所爲かトはつとばかりに仰天して。只管あきる／＼ばかりなり。庄官はつく／＼思案がほ。ハハ深くも巧んだなア。さる物識の説しには。鳥賊の墨にて字を書ときは。乾くにまたがひ散ちて。迹形もなくなるといふ。これは正しくその法を。

誰にか聞て豫てより。硯の中へも入れておき。亦印肉もそれにてこしらへ。半兵衛どのは眼病なり。婦人ばかりと侮どつて後日の證據にならぬやう。巧んだ物でござりませう。ア、さりながら便りない。おまへ方が身の上で六十五兩といふ金を。盗まれてはさぞ／＼難義。それにつけても手がりの。証文はかくの白紙。そう思ひもなざるまいが。何をいふにもわしが名で。預けさしたもなれば。アノ市藏といひ合して。斯いふ事を志はせぬかど。疑がはれても語りめが。出ぬうちには言わけたはず。よし／＼翌は知縣所へ。おとけ申て這奴等をとらへ。きびしく穿儀をして見たら。直にわかるでござらうが。先と夫にした所が。説しを聞ば今が今。日このくらしに困りなると。ハテサア何とも仕方なけれど。常分のうち米なり麥なり。わしが贈て進ぜるほどに。だん／＼病氣も本復したら。少しなりとも活業をど。申た所がお菫土の生れ。鍬鋤とつての荒業は。とても出来まい何ぞモシ。覺へられた藝でもござるか。坐藝と申すもあ恥しいが。若年よりして手跡を好み。近ごろ誇たお説なれど。マア／＼見どもに教ゆるぐらゐは。書覺へても居ますし。元商人の身でござれば。算盤もいたします。尤も天算などいふ。込入た事までは。習た事もござりませぬが。マア通例の割掛算用。ハなるほどいかさま筆算は。在方とても知らねばならず。僥倖この鳴戸には。手跡の師匠もない事なり。是かうわしが世話をして。弟子をつけて進ませせう。お菫土どちがふて謝れいといふも。ずん



ど聊ばかりなれど。出来初穂の大豆小角豆。野菜などは買ずとよし。僅三人ぐらゐのど。輒くくらしも出来ませうト心をつけて半兵衛夫婦が。老實なるを憐れむ鴈八。夫婦は金を詐變れ。なんと詮方内心は。竹を柱に菰を櫓野伏となるよりまた外に。思案工夫もなき折から。庄官が厚き情の言葉は。暗夜の燈火渡に船。地獄で佛にあひしより。また恃もしく思ひつゝ。涙を流して禮をのべ。なを後來をたのむにぞ。元より情心ある。鴈八なれば大きに憐み。米薪より朝夕の。野菜物までおくりつゝ。世話して月日を過すうち。はや半兵衛が眼病も。直りて元のごとくなれば。是より近所の見供を集め。手ならひ算盤を教えつゝ。お梅は稚きその折に。習ひ覺へし手ずさみの。三弦などを教ゆれば。是にて漸く親子が世すぎ。絆足べくはあらねども。その日くを送りけり。さて鴈八は市藏と今一人なる悪見の。次弟をいちく訴れば近國所へ知縣より。觸を出して尋ねけれど。さらに往方は知れざりけり。かくて月日を送る身の羊の歩行隙の駒。あしに任せて往ほどに今日とくらし翌とすぎ。貧しき中に春秋を。八年がほどぞ經にければ。お菊も今は十三にて。年闕人となるまゝに。その面影の艶やかなるは。京鎌倉にもその儔ひ。稀なるべくも思はるゝに。心操の優しき事は。藤の式部が童だち。中將姫が操にも。まして愛たき女の童。かゝる貧苦のその中なれば。朝は頓よりおきいで。米を炊き水を汲。また寺見等が述先に。心をつけて立はたらき。濡れし草紙の干乾かし。水入の水中食の。

茶を沸すまで母にはさせず。お梅は是を歡ぶものから。まだ年ゆかぬ身を持って骨折業は捨ておけ。並大躰の兒供なら。手玉とつたり紙人形。友だち大せいよび集め。果はいさかひ中たがひ。親の制すもきかずして。一生己が徳となる。稽古ごとをば餘所にして。遊びばかりを絆とする。年頃なるに朝から晩まで。母が手扶け父おやが。活生とする兒供の世話に。たゞ半時の暇もなく。こま心つく優しさは。世にもすぐれし孝行もの。斯薄命なその中にも。稀な女兒を持たるこそ。千萬兩の黄金にも。まして嬉しと猶さらし。寵愛すれど貧しきくらし。世に流行るゝ縮緬の。鬚紐一ツ轆くは。買とならぬ身のうへを啣てば是を聞つけてナニ私はそのやうな。物は欲くはござりません。夫よりはマアとくさまが。常々持病のあるお身で。此寒いの縮入一ツ。どうか風でもめしそふなど。隣の老婆さんに恃んでおいた。そでなし羽織の肩入が。ちと足ないといふ事だから。あれを買ってすこしもはやく。出来るやうにといふをき。梅「チャ〜」おまへ老婆さんに。恃まないでもよい事に。わたしが仕立てあげるはななく「それでもわたしがそういふと。己はいくから手まへ着ろ。朝はやし寒さにでも。當ると悪いとおいひだから。それを無理にといふたらば。誰が強イとお志かりだらう。それより隣へたのんでこしらへ。暖にしてあげやうと。生「ア、いらざる先頃のか。あれは手まへに着るといふて。向ふの人がくれたのだに。拵へ直しておれにさせ。凌がせて呉やうとは。志こそ嬉しいが。どうも十二や十三で。



そう／＼何かにかがつきすぎる。親の心じやそのやうな。年に似あはぬ心だて病煩ひでも出づ  
 せぬか。モシ短命ではなからうかど。却てこつちの氣がもめるわへ。梅さやうさホンニ此兒の  
 やうな。親をおもつてくれるものが。此方の欲目か知らないが。世に二人とはあるまいと。思  
 ふほどでございます。モウ／＼おまへい／＼かげんに。氣を揉でおきなさい。人にも越た孝行も  
 の。またその上に容貌さへ。人なみ勝れて生れながら。どうした過去の因縁やら。かうした貧  
 しい親をもち。苦勞ばかり志やるのト果は泪の雨やどり。賢きにつけ愚につけ。わが子を思  
 ふ親心。不便にもまたいぢらし。父半兵衛は先頃の。煩ひよりして以前にかはり。病もちの  
 身となりて。年の内には五六度づ。煩ふたびに此村の。醫師を待みてやう／＼に。怠り果て  
 も程もなく。また煩らふもやるせなく。その度々に稽古をも。休ませぬれば兒供等は。稍に滅  
 りて今は之や。十人ばかり日々集會。手迹の稽古をまたりしが。此年霜月はじめより。半兵衛  
 はまた病つきて。這回は例の病ひとちがひ。はじめの日より枕もあがらず。日にそひて重るに  
 より。おきくはあるにもあられぬ思ひ。醫師は元より加持祈禱も。村の内なる修験にたのみて。  
 手のとゞくだけさま／＼と。すれど元よりかすけきくらし。貧しきうへに猶貧しくて。朝に炊  
 くも夕に糧なく。渾家のお梅はこのほどより。久々心勞せし上。またさま／＼の苦をかさ  
 ねて。痞に胸をどぢられつ。今は我慢もならずして。良人が側にうち臥せば。病む人二個に年

ゆかぬ。お菊が一人の介抱は。語るにことばもなかるべし。さらぬだに貧しきを。二個が病氣に  
 いら目はおほく。たゞ一錢の餘成だに。なき身の上は今さら。辛じはて／＼いかにせん。今日  
 はよふやく贈つても。翌はどうして暮したらと。心細さもいやませど。もしその事を父母に。  
 相譚なさば苦勞にして。いよ／＼病ひの障とならん。親の爲には身をも活。子を埋たりし往昔  
 の。例さへあるものを。たどへ年端はゆかずとも。二個の親を育みの。出来ぬ事やはあるべき  
 ト自ら心を勵まして。活代なすべき物もなく。今は心に堪かねて。むかふの老婆を留守に恃  
 み。薬どりに往なりと。言こしらへて家を立いで。醫師の許に赴きて。容躰かたり疊帯。あく  
 と等一はしりいで。こなたの町の町はづれ。並木の下に徨みて。往來の人を待にけり

孝女二葉錦卷之五終



孝女二葉錦卷之六

東都 梅暮里谷峩著

第六回ハ 處女の袖乞

風たちて波と聞ゆる松がえの。音さへ凄き林原。往來の人もまばらにて。今日は殊さら空曇り。寒さいやますゆふぐれどき。穢なき心なき身にも。親の病ひと貧病と。かて、交てのくるしみに。ゆきかふ人に携りつゝ。情をうけてけふの日を。くらし兼つゝ送る身は。餘所のたもどもぬるゝまで。哀れどこに知られけるきく。モシ旦那さま私は。此村はづれにおりますもの。親兄弟に煩らはれ。薬を飲すともならぬ。難義な者でござります。どふぞ情に一錢の。お慈悲をねがひあげますト跡よりつけば情なき。道者はこれを見むきもせず。ア、やかましい乞食だナア。うるさく着とぶちのめすぞト目をむき出して呵られて。吾にもあらずうるむ目を。ぞつと堪えて立もどり。またもや袖にすがりつゝ。ゆけばこんどは情知る。人とし見へて巾着より。投いだしたる銅錢。ア、ありがたうござりますトあしいたきて立とまり。また來る人に歎きては。合力しても日は短かし。留守の事さへ案じられ。空うち見れば思ひの外。時刻かたふ

く夕日影。うちおどろきて立かへれば。あんじわびたる兩親が「ヤレおきくかへつたか。今日はどうして遅かつたか。なんでも遊んで居はしない。途中で怪我でもしはせぬかど。いつそ案じて居たわいなきく」ヲ、さぞおまちでございませう。お醫者さまが急病人の。見まひにいつた直にかへる。少し待つてとおつしやるから今か〜と待て居て。大きに遅くなりました。アノ老婆さんは歸りましたか。お晝まんまはあがりましたか。梅アイ老婆さんは客が來たどて。さつき内へ歸つたが「直に來やうといふたれど。用でもあるかまだ見へぬ。どうぞ粥でもこしらへて。あと〜さんにも勧めたり。わたしも少し給やうと思つてさつき起て見たが。ふら〜として我漫にも。圍爐裡の傍へもいかれぬから。マア〜今に歸つて來たら侍まうと思つて居たよきく」サア〜まんまをあげませう。それにアノお醫者さまのおかみさんが。おまへ獨でお菜なんそも出來まいから。是を持って往てあげたがよいと。菜のおひたしに座禪まめ。たくさんに下さりましたト袖乞したる錢をもて。道にて求め來たれども。見にそれといはれぬは。親の心を休めんため。時の方便孝行の。心がらより出たる啜を。それと知らねば歡ぶおや。ホンニウ色〜と心づけて下さるとは。おこゝろざしのありがたさ。翌往たらそのおれいを。よく言てくんないマアわたし等は寐てゐるから。よしや時刻がおくれても。給たいとも思はぬが。そなたはいろ〜働いて。薬とりまでして來たから。さぞひもじかる其菜だして。お茶漬でも



給てから。ゆるりと粥でも拵らへて。おどつさんへもあけてくりや。まんまもたはずはたらりて。モシもそなたが寒氣にでもあつて見やれそれはく。難義のなんのと口ではいはれぬ。それこそホンニ袖乞でも。するより外に仕やうはないといはれて胸にきつくりと。あたる詞に吾ならで。せき来るなみだおしくし。其處等仕まへば没相の鐘も哀れに聞ゆなる。また次の日も立いて。かなたこなたと呻吟ところへ。信戸の醜女癩病老婆。臼のお松と異名して。その名も高き野伏の女。どやくと来てお菊をどらへまこめ。ヤイ此がきア何處の奴だ。おらが仲間へ沙汰もしねへで。めへにちくく稼をしあがる。此方もすこしは了間して。二三日は大目に見たが。モウ堪忍がならねへわへば「ナニそんな奴アたき倒して。半殺にしてやれへ。此方はナこの土地で。二三十年貰て居らア。わいらがやうな新めへあまに。横どりされてたまるもんか。今日貰たなアいくらある。コウお松さんアノがきを。たき倒してどんねへな。松ム、これおねへ内は何處だ。今もみんながいふ通り。旅の衆に貰のは。おいら達の商賣づく。渡りもつけずに此わうれへで。もらうといふなアぶぶくしいはきく「アイわたしは此村はづれで。とさんもかゝさんも。病氣で久しく寐て居まして。お菜を一ツ買つてやる。まかくもどうも出来ないから。お恥かしい事ながら。毎日こゝで人さまの。おどふりなさる其時には。一錢二錢の合力を。うけますものでござります。おまへ方の商賣に。さわると聞てはおきのどく。モウ

く翌から出ませんから。今日はどうぞ堪忍して。そしてこんな寒イせいか。例のやうには通もなく。今朝からもらつて持て居るのは。よふやく二十か三十で。マアどうしたらよからうと。思つて居るのには是までも。とりあけられてはお菜はあるか。煩らつてゐる兩親に。まんまを給さす事もならず。その所を了簡して。けふは許しておくんさいまこめ「エ、やかましいべらく。そんな事を言たてりやア。手めへ達よりこつちらに。困るとがいくらもあらア。食とか出来ざアな。食ずに居て死んでしまへよ。いけふてへ此あまめト拳をあげて發矢と打。うたれてわつと泣出すお菊。傍へよりそふ臼のお松が。まこめを手にて推へだて。松「マアまちな醜女さん。どうしてやつてもいゝ奴だが。二個の親が病氣だから。かうして袖ひするといふ。口功者にいひぬけをするのだからまらないが。モウ斯なりやアこつちの仲間だ。此見のうちへ一所に往て。親の病氣がほんとうなら。世話をしてやらうじやないか。そうして仲間へはいつたまるしに。酒でも買して飲でやらうまこめさうさく内へいつて。仲間にすりやアカめへはねへ。コウおの兒やおめへのうちは。村はづれだと言たつつけの。サアく一所に往やせうといはれて胸とお菊はおどろき。賤しい事を餘義なくするも。親の心を休めたさ。亦一ツにはこゝろよく。箸でもどらせましたいばかり。それに何ぞや野ぶせりの。仲間に入と聞ては。マアどのやうであらうやら。たどへ食ずに死ねばとて。恥のうへなる恥なりと。思ふものから心の裡



に。じつと思案のほぞをきめきく「なるほどホンニおまへがたが。おつしやる所は御尤。志たが  
 どうも今すぐ。内へおいでなすつたら。病でる母がおどろきませう。逃も隠れも志ませんか  
 ら。翌まで待て下され。すれば今夜かゝさんにも。今日の志だらを委しく断して。ずいぶんよ  
 いと申たら。おまへ方の仲間いり。酒でも何でも買ませうと云へ、どういへばかういふと。何  
 でもかでもこつちらの。言やうにやア志あがらぬへ。お松さんがいろくくと。口割説をいふ  
 ものだから。そんなら内へ一所にいつて。あつさり濟してやらうといふのに。ム、それじやア  
 お袋が。病氣といふなアおめへのうそだなきく「イエ、うそではございません志ニ啞でなかア  
 おらたちが。往て見てもいじやアぬへか。お松さんやこの老婆さんも。緯によつたら世話も  
 して。やらうといふなア大躰な。深切な事じやアぬへ。有がたすぎて牛房ほどな。尾をふつて  
 たのむ筈だにきく「それでもどうも今直には。松「アウあの見やよく聞な。おら達が乞食だから。  
 内へつれて往のが否か。それより手めへはい、素人だ。此並木へ出て錢をもらへば。乞食仲間  
 の小女じやアぬへか。イケふさくしいその吼づら。泣ておどしてたい歸そうと。そう甘くは  
 いかぬへよ志ニお松さんモウいゝわな。どういへばかういふと。どうで此處等をぶら／＼  
 して。おいら達が稼の邪魔をする程な奴だものを。内へ一所に往のが否なら。是からアおいら  
 たちが。栖とたのむ土氣の松ばら。柳の下の昏帳の中へ。引ずりこんで着物も何も。引ばいで

仕まふがいゝ。そうしたらノウお松さん。いゝ業ざらしたらアハ、ハ、ハ、松「どうでこんな  
 志ぶとい奴は。そんな目にもあはせぬへけりやア。已後の志めしが聞ぬへは。サア小女ヤイ  
 こつちへ來やれトおきくが腕をまつかと把へ。矢庭に引ずりゆかんとする。おきくは大路へ膝  
 をつききく「アンどうぞさつきから。言ましたに違ひはない。どうぞ堪忍して下され。翌になつ  
 たらわたしが内へ。みなさまをもおつれ申シ。またお酒をも買ますからば「アウきいたふうな  
 事をいふの。けふ貰た三十や。二十の錢をよこしては。煩つて居るおふくろや。あやぢにまん  
 まも給させられぬと。まだその口も乾かぬへに。翌になつたら酒も買うと。ホンニきつい氣や  
 すめもんだの。こんな女を娼妓にしたら。さぞお客をくるめるだらうの。そんな事をいふ口は。  
 ム、／＼此處かト口の端。つめりあければ紫の。恙もつく／＼痛さを忍び。心のうちには鳴戸  
 の鎮守。大日大聖不動明王。この災厄をたすけ玉へと。祈念しつゝもこなたをむききく「アン情  
 ないノウおばさんへ。みんなわたしが悪イから。どうぞ堪忍して下され。モウ／＼翌から旅人  
 衆に。ねだるはあるか此並木へは。來ませんからよアン／＼どにげるをすかさぬ白のお松が。  
 ゑりくびどつて引ずりよせ。松「ナニその口があてにならう。それよりおめへわたし等が。わり  
 い事はいはねへから。おめへの内へつれていきな。酒を買いにおせゝがなかア。不躰ながらこ  
 のお松さんが。百や二百は貸てもやらア。サア／＼きり／＼歩行なさいトいやがるおきくを先に



たて。三人等一往んとする。所へ來かゝる一個の武士。供の一人も連ねども。花色木綿の雨衣に。肩へは行李と袱づゝみ。前後にかけて羅脊板の。柄袋せし大小を。貫木差も立派な打扮。まへの宿にて飲だりや。満面ゆでたる蛸のごとく。浪々躑々としてはお足。あるひは高くあるひは低く。來かゝりたりしがお松が帯を。志つかと把て傍に投つけ。目をいからして衝立わがり。侍「ヤア乞食め其處うごくな。さつきからして見てみれば。娘をとらへて色くんな無理ばかりをぬかし居る。ナニこのむすめを手めへ達が。仲間にもやうとはおしのつゑい。サアなんでも言て見ろ。是からアおれが相手だ。親のために志やうとなく。袖乞するとは氣健など。それを少しもきゝいれずこの並木へ足をいれりやア。きかねへなどとはふてへ奴。とはいふものゝわいらもなア。商賣づくなら是非もなく。なんのかのとやかましく。いふでもあらうさその所は。ずいぶんおれも承知だよ。マア一ト通りは斯いふが。なるほど仲間へ這入もしねへで。稼をするは此むすめが。何處までも惡から。そこはおれが貰たは。そのかはりになたいは言ねへ。仲間いりの酒のみしろ。ソレもてゆけど投出すは。二米判四ツを三人が。手とりばいどり拾ひつゝ。譯のわかつた侍だ。そんなら翌から此處へ來て。稼をしてもかまいはねへといひつゝ三人は馳さりぬ。おきくは是を見るからに。その侍が情のほど。わすれかねつゝ傍なる。路に膝つき頭をさげきく「これはくどなたかは。ぞんじませぬが御覽のとふり。女乞食にいじめられ。

マアどうしたらよからうかと。思ふ所へあなたのお蔭。誠に有がたうございます。此御恩ばかりは。死んでも忘れはいたしませぬといふ顔つくつゝ侍が。其處へつくばひ脊なでさすり侍「コンおむす此御恩は。死んでも忘れはしません。そりやうそだらう口さきばかりかきく「イヤくどうして此やうな。難義をおすくひ下さつて。お金をたんとアノ乞食に。やつて下さつたあなたの御恩。なんで啞を申させう。侍「ム、くそれがほんとうなら。其方におれが手を合せて。侍みたい事があるが。なんぞ聞てはくれまいかきく「ハイ何の事かはそんじませぬが。身にかなひましたとならば。マアなんなりとあなたのと。侍「ヤレくそなたは利口だなア。侍といふて外でもないが。今宵の泊りはアノ東金。なんぞ宿まで一所に往て。おれと懷れて寐てくれぬかきく「エ、侍「ハテサテそなたはまだおぼこだ。そんなに膽をつぶすものか。サアく一所にいつてくりやれきく「ハイくあなたのおつしやるとなら。どうともいたしませうなれど。内にはとくさんかきさんと。二人とも煩ふて。今にもわたしが歸らないでは。藥を飲せる者もなく。飯を給さす人もないから。此事ばかりはお侍さま。どうぞおゆるし下されませ侍「ナニサ許すのゆるさねへのだ。無理などをいひはしねへ。それ今乞食にいちめられて。跡へも先へもいかねへ容子。ヤレ氣の毒な容貌もよし。身なりこそ穢ないが。まんざら乞食の見とも見へず。どうぞ佐けてやりてへど。路用にあてた金のうち。二歩といふものほふり出し。乞食め



らをおつばらつたは。そなたを抱て寐てへが山さ。まだ手いらすの生娘を。二歩では安イと思ひの外。死んでも忘れはしません。いふ口の下からして。否の應のと二枚の舌を。つかつて濟かヤイおむす。それでもいやなら今の金今ど戻して今かへせ。サア〜どうだトいかめしく。罵り立しがまた寛爾々々。綱繆か〜つて腰をだき。侍など言ては見たもの。コレおむすやよくききな。悪イ事はいはぬへは。はじめて男にあふときは。氣味のあるひと思ふもの。ナニ〜そうした物ではない。コレサおのしは知るまいが。案じるよりは産が安イと。人もいふではないかいなア。あれさそんなに赤くなつて。涙を出してはあらいやよ。なんの泣ずといふ事に。ア、モウ女子と小人とは。養ひがたしと唐山の老爺がいふたにんとちがひぬへわ。金を出せばまきりに歡ぶ。サアそんなら其代りに。あれがいふときけといへば。赤くなつたり泣出したり。年がゆかぬといひながら。あんまりな情志らずめ。ア、〜聞えたこれおむすや。まだ初ばなが咲かないな。夫だによつて雄子をば。鬼か蛇のやうに怖がるのだ。ハアどう見ても可愛らしいト引よせられて今のや。なんと詮方なくばかり。にげんとすれどかよはき替力。ふりはらふべき氣力もなく。殊には先よりさま〜の。事にかゝわり思ひの外に。時こく伸れば病む人の。いかに待わび玉ふらん。餘りのとに非道なるこの侍が詞よと。なかばは怒り半はかなしみ。誰ぞ來よかしこの難を。遁れんものと思へども。はや黄昏てほのくらく。往來

の人さへあらざれば。心細さもまかすがに。よわり果たる狩場の鳥の。峯越わびしき風情にて。たい泣然と泣なるを。飢たる虎が猿の子を。抓がごとく侍は。お菊をどらへて動かせず。猶さま〜に言こしらへ。思ひのたけを晴さんと。はては芝生に引たをし。帯をほどけば反まはる。手足をまかど刀のさげ緒。てばやにとつて縛さんと。したる所へうしろより。狼藉ものよがすなど。三四人の聲音して。踊りくるものありければ。おきくは聞てこはわれを救へるものかどよろこびつ。合破と起て身づくろひ。彼侍は恟として。あたりを見ればこの村の。者とおぼしき弱官等が。鋤鉞かたげてかけ來り。ヤア侍の盗人め。小女だどあなどつて。其處へ寐かして何をするのだ。こんな奴をば引ッ括して。知縣所へ引ずり出し。おもいれひどい目にあはして。膽をひつくりかへさせぬへじヤア。懲あるまいトてん〜に。荒繩かいくりおどりかゝれば。かの侍は膽をつぶし。酔もたちまちさめ鞘の。大小拾ひ逸足いだし。はふ〜逃て往方をまらず。お菊は大きによろこびて。この人〜をよく見れば。隣村なる弱官にて。この所を通りかゝり。豫て面をまるからに。すくひたりしといふを聞。避生たる心地して。禮もそこ〜泣顔を。ふきてまぎらす己が門。がらりとあけてかゝさまや。戻りましたといひながら。見れば其處等も眞暗にて。入すむ宿と見へなくに。矢庭にうつす行燈も。油なければ持添て。たらりとまたむ下土器。いとも短かき燈心を。指の腹にてかきたてつ。ほつと吻息どつかと



座し。雲時ものをもいはざりけり

孝女二葉錦卷之六終

行路かたしと古人の金言實に人間の業道は峯海山川猶やすく日夜の行路  
いと難しされど庸愚の小人が安居して尊大なる佛家に曰謂前世の悪業な  
ほ今生に盡ずして我意を行ふ不義の富來世いかなる報かあらむしかわあ  
れども世の人情貧を疎んじ福を尊み主錢奴のやからのみ願くは兒女童幼  
貧賤をいとふ事なく孝貞をもてみやびとせばつゞれの破衣錦綾にまさり  
竹の柱にかやの屋根も金殿樓閣に耻べからず斯るはかなき草紙といへど  
も松の操のいと清きお菊か辛苦に意をとめて哀れどもみそなはさは作者  
の幸ひ甚しと嗚呼がましくも老實に序す

金龍山麓の草亭北窓に毫を染

爲永春水誌



孝女二葉錦卷之七

東都 梅暮里谷峨著

第七回

家貧ふして孝子出ど。すでに老子も歎じけん。かくてお菊はその夜さり。二個が親の枕方に。居りつゝ見れば八丈が。島にありてふ磯餓鬼に。そのさま似たる父が貌、肉あちたれば頬骨の。高くあらはれ月代と。髻のながさも五六分ばかり。傍にふしたる母あやも。束ねし髪油氣なく。散亂れたるそのうへに。かゝる埃はむさし野や。尾花がすするにふりあける。霜とも見へてあさましさ。つくづく見れば氣も消て。けふの思議さへおもひいで。泪さしぐむ折からに。半兵衛苦しき息の下より。頭を擡げ肘をつき。生「ヤン」お菊毎日。何から何まで手一ツで。さぞ太義だらう殊にまた。此頃の寒さと言ては。寐て居る身でさへ堪えられぬ。それはそうと此間は。晝寝ふんになると何處へか往て。暮方でなければ歸らぬが。なか／＼手まへの心持で。斯して二人の病人を。内へおいて浮く。遊んで居る事ではない。夫に「マアお袋が。達者で居た時でさへ。少しばかりの小づかひにも。あれこれと差略して。よふ／＼其の日／＼を送る

に。此間からお袋も。寐て居てみれば工面もならず。汗の實を買ひにさへ。困らうと思ふ所。むかふの老婆さんに借ましたの。お醫者さまのかみさんに。借て來たのとおほくこそなけれ。些とづ／＼の菜でも買て來てくれる。年はもゆかいでそのやうに。あつちこつちで色／＼と。心づかひをしてくれるは。なか／＼大人も及ばぬと。嬉しきとも辱けないとも。言やうはないけれど。果しも知れぬこの病人。まいにち／＼人に借ても。時々には返さにやならぬ。勿論ハヤこの躰だから。先でも急に取る了簡もあるまいが。それならば猶氣のどく。モウ／＼翌から食物が。なからうとも仕方がない。鷹八さんが氣をつけて。贈てくれる米や麥で。マア／＼飯は緯がたりる。モウその外は捨ておけよ。どふせ乞食や宿なしにも。劣た此身のうへなれば。少しも厭ふとはないが。とても死ぬなら潔白に。世を過ぎてしまいたい。なるほど子の身になつて見て。殊には孝心ふかきそなた。縦令袖乞してなりとも。口にかなふ菜のもの。また暖に蒲團の一ツも。餘計に着せておきたいと。思ふはさら／＼無理ではないが。おれは翌にも知れぬ體。そなたは是から五十年も。六十年もいきる身のうへ。まだ老さきどころしやない。盛までにもならない身。親の病氣のせつなさに。穢ない心をツイ出しては。一生の名をけがす。骨は朽ても穢れた名は。未代までも雪がれぬ。そこの所が大事だから。決して穢ない事をするなよ梅「いやちのホンニ私も序があつたら篤くりと。言て聞そうと思つて居ました。コレおきくや今



どのさまのおつしやる通り。なるほど親の難義を思ふて。其處等此處等で借て来て。熱いもの一杯づゝも給させてくれるのは。ア、どうして此やうな。艶しい女兒を持たやらど。そのたびく口へこそ。出してはいわぬが心では。拜まねばかりに思つて居れど。あくせくとして稼でさへ。荏土どちがふて田舎では。なか／＼おあしのとれぬもの。看病をした片手間には。薬をも取て来たり。朝ばんのおまんま拵へ。なか／＼もつて芋の一さきも。うめる事ではない筈だが。どうしてマア此やうに。あり／＼は魚もかい。毎日歸つて来るたびに。何か志らお菜でも。買て来るはどうも不測だ。人に恃んで借たどて。宛もない此志だら。少しの事は貸も仕やうが。なか／＼多くは貸人もなく。返しも志ないでその人に。また貸てとは言れもせず。そうして見れば五十でも。百でもどうも出来ない筈。それゆへさつきど／＼さまとも。寐ものがたりをした事さ。毎日薬をもらひに往ては。小半日づゝかゝつて歸り。ヤレお醫者さまが留守だつたの。隣村まで使にいてくれ。賃錢やらうといはれたから。使にいつて些ばかり。錢をもらふて来ましたの。それも啞ではあるまいが。親の身では色／＼と。案じ過しがせらるゝゆゑ。出て歸らぬその間は。ア、何をして何處に居るやら。ひよつと亦田の畹か。用水へでも落はせぬか。狐がおほいといふ事だから。魅られも志はせぬかど。烏啼さへ氣にかゝるに。けふも外を通る人が。嘶をきけばアノ松原に。出て居る女兒は。目鼻立から手爪さき。その風俗も

賤しくない。なんでもあれば一通りの。乞食とは見へないが。どうしたわけで只一人。袖乞をして居るやら。何に成ても苦はぬけぬぜ。たゞ貰て食て居てどうか。勘定にヤア合やうだが。此寒いのに風ふきの。アノ松ばらに立てゐて。どうぞ／＼と着た所が。高の知れた事だらうと。一個がいへばホンニさのふ。ナニ／＼あれは素人だ。親が死だとかいふわけ。ア、して乞食をするのだらう。まだ十四とはなるまいに。荏土ならばナア奉公しても。一廉食れるにど。いふて通つた其時には。胸にきづくりア、その女兒は。もしもおまへじやあるまいか。斯して二人が煩らつて。迹へも先へも往ないから。せめて少しも親の氣を。休めてやらうと其やうな。さもしひ心を出しはせぬかど。思つたときのわたしが心。マアどのやうであつたやら。ど／＼さまで二人して。今まで泣てゐたわいな。よもやそうではあるまいが。たどへ死でも大事ない。そのやうなことをして。身を穢なくして呉まいぞト言さへ息もきれん／＼に。泪さきたつ操言に。おきくはあるにもあらぬ思ひ。なんと答へん術もなく。さし俯ひて居たりしが。長あつて貌をあげきく「ホンニそう思しめすも。無理ではないがどうしてマア。そんな穢くるしいおあしをとつてあげますものでございませう。なるほどあんまりせつない時には。いつそ是れより袖乞でも。志たのがましであらうかど。思はないではないけれど。吾儕が身をば一點ほども。厭ひませぬがど／＼さまは。人にも知られたお方の貌へ。泥をぬるやうなもの。此間中からして色／＼



買てあげたのは。實にほうく心安イ。所で借て來ましたのさ。そんな事に氣がねをなさらず。藥をたんと召あがつて。些どもはやくよくなつて。下さりましと兩親を。詐變罪の怖しさ。思へどそれといはれねば。おつる涙をそとふきて。痞える胃をおしさげつ。笑ひに紛らす心の裡きく「チャ〜ちつと油断を去たら。お粥がこんなに沸こぼれるよ。サアおどつさんおつかアさん。此熱イうちあがりまし。ヤレ〜けふは寒かつたぞ。どうか雪でも降そうなトいだす折敷に椀二ツ 梅ム、お粥が出來たのか。そんならへモシあがりまし。否でもあらうが些づも。あからずは藥のきゝめも見へますまい。わたしは一臍血の道だから。どうかかうかあまんなまをば給られるだけ少しはよいが。たい起ると眩暈がして。天頭をあげてゐる事。ならぬといふも誠の業病。サアあのしも給やらぬか。ア、モウ襟のよされたと。久しく湯にもはいりまいのきく「ア、なに垢は湯に這入ば。直ちるから苦にもならぬが。たい苦になるはお二人のトいひかけてまた泣然と。泣ば二人も俱泪。モウ〜ないて呉るなよ。どふどはやうよくなつて。約にはたゞと少しづ。手稼でもせうもの。思つて居れどかういふ病に。とりつかれたが身の不肖。いくら言ても限りはない。サア〜そこらを片付たら。些も早く寐たがよいトいはれて此方も愚痴など。いふて病の障とならば。是も不孝と思ふから。寒さを凌ぐ蒸襖。ひきたて〜うち臥しつ。猶さま〜と思ひ廻せば。よからぬ事は豫てより。知るものながら紙一枚。

買とならぬ思議となり。餘義なく人の袖にすがり。漸くにして日はおくれど。今日のまだらをつく〜と。おもひ出せば怖ろしやまた其上に往來の人の。噂をきいて吾ならんかど。案じられての親の異見。はや翌よりは止なんと。思へど外に一錢も。當のなき身をいかにせん。よしや人には謗られても。親の心に慥ふとも。世に例なき事にもあらず。僥倖にして野伏の。非人等をばおひ拂ひつ。かの侍も若イ衆に。逐れて逃し事なればはや此所へ來るまじ。畢竟所の近ければ。往來の人がうわさして。自然と親の耳にもいる。翌は成田の街道へ。出なんものと心を定め。朝とく起て例のごとく。其處等を仕まひ藥をすゝめ。村なる人に雇はれて。綿打の手傳すと。いひ拵らへて立いでつ。成田道へとゆく心。おしはかられて哀れなり。爰はまた往來もまげき驛路の。殊に成田の不動尊は。日々に靈驗新にして。貴賤渴仰するにつけ。歩みをはこぶ老若男女。途わたる蟻に彷彿たり。今は寒さも強ければ。春のごとくはあらねども。遙に聞ゆる鈴の音。駒もまづかに乗かけの。下はから綾韓島の。蒲團かさねて埋だかく。姿やさしき商人の。息子と見へて年の頃。二十三の若ざかり。連もおなじく乗かけの。頭巾眉深に來かれば。鳶へも四五人その外に。供の雄子も合羽着て。どや〜として路すがら。くゆらす烟草すり燈。皿から皿へうつし飲。舞も國府もいちやうに。なる程旅は道ずれと。一個がいへばまた一人。それといへばアノ船橋の八兵衛はおかしかつたな。荏土なんぞじやア宿場の



飯もり。穢なくつてとよくいふが。どうして穢ねへ所か。まづなんでも世界の容子が。根津なんぞよりよからうか。夫だによつて見ねへ所を。滅多に悪くはいえねへものだ。時にあめへの買たなア。一座のうちの上玉だぜ。イヤサあれがおかしいのヨ。ソレ先に湯にいつて。此方の小舎を覗て見たら。あいつが立て居るだらう。其處でいらも立とまり。コウ姉さんお客かへど。むやみにとばをかけた所が。イ、エこんヤア客人が。ござりやせんといふだらう。其處でわたしがいふのにヤア。そんならどうせわつちらが一座は。彼是十人たらずだ。どふせ後にヤア娼妓衆を。よんで遊ぶつもりだから。なんとおめへ其時にヤア。おれに出て呉ねへかど。此方も少し酔ては居るしか。ナニ構ヤアしねへやらかしたら。そりヤアモウおめへさんなら。嬉しいねといつたわな「ア、コレサ／＼からうけは御免なせへ。おめへまたそのいきで。昨日鳥渡あづけておいた。仙女香をやりはしねへか「ム、其處でゆふべの魂膽が。いろ／＼おつな理屈だから。どうで二度とは来られもしめへさ。荏土であれほど流行おしろいを。持てるかと聞たらば。みんなは持てるけれど。わたしはまだ買ねへといふから。どうも聞ながしにもならねへ譯にツイなつて。おめへが土産にするおつて。折かくアノ京橋の。いなり新道まで人をやつて。買なすつたも知つてるが。ちよつと借たせ。それにまたアノ女めが。おめへさんはいやらしい。男のくせにといふから。エ、なんだいやらしいたア。おれがやうな苦みばし

つた。ツンとした男をば。どういふ譯だといつたらば。匂ひ袋をいれてあるそうで。丁子の匂ひが大造すると。言れたので氣がついて。ム、こりヤノ匂ひ袋じヤアねへ。當時發向する油町の。爲永が丁子車の齒みがきた。こりヤア成田さまの門めへに。心やすい人があるから。やらうと思つて買て来たが。十袋ばかり遣やせうと。出してやつたも仲すぎたが。志かし白粉なら仙女香。齒磨なら丁子車。二色ともに江戸の花だ。大底あいらが珍重して嬉しが事じヤアねへ。大きに不通のやうだけれど。用ひる所へ用ひれば。まんざら捨りといふわけでもねへのさ「コウはみがきこそ御勝手しで。白粉までは些おそれたの。そうした上に請させられて。一生こいつアうまらねへ。尤先の宿へ往たら。香疾でも奢る氣か「ム、承知た鱧の香疾。ウソといふほど奢りやせうといふ聲きいて傍より「コウ／＼その香疾は。おいらは眞びら御免だせ。荏土へ歸つて奢なせへ。なぜといふのにこゝらの香疾が食れるもんか。まづ第一に醬油が變だ。いつか上總の東金へ用があつて。往たときなにも味ひ物もなし。香疾なんぞがよからうかど。焼して見たがイヤハヤ肝がつぶれて芋になつたア。ずぶ眞白で鹽氣がなしヨ。生臭くつてなりヤアしねへ。その換にヤア安い事の。七八十目の大鱧が。一本四十か五十で買やす。荏土で見ねへどうしても。五六百は物いはずだ。ナントそう違ふから食れねへもマア尤じヤアあるめへか「そんならあれも眞平御免だ。田舎へ出ちヤア食物は。食ねへほうが増だナア「ム、



それだから香痰なら。ウンと奢るといふのヨアハ、ハ、ハ、「エ、やかましいモウい、加減に志やべつておかねへか。コウ／＼ちよつとみなあすこに居る女児を見ねへ。あんなに穢なくしちやア居るが。一軀はがうぎな艶女だぜ。まだよふやく十三か四たアなるめへナア」そうさあれはよほど美だの。傾にでもするとぶつ／＼け正面。毛氈の上といふのだ。マアどういふ物だらう斯して乞食をする位なら。娼妓にでも志たほうがい／＼じやアねへかノウ。可愛そうに「モウ女だど見ると可愛そうだといふ奴よ。志かしア、いふ奴にやアやるのが後生にならア。モシ旦那へ。アノ女児にチツト遣ませうかチ 且ム、おれもさつきから見て居るが。なんでもありやアたいの乞食じやアねへ。素人だよ可あいそうに四五百もやるがい／＼はな「ウ、旦那もまんざら嫌へなほうでもねへな 且馬鹿を言はずとはやくやれよ。銭がなかア此早道に。「朱があらア」ナニ／＼ちやうど釣にとつた銭がありますトおきくが傍へ立より「コウあねへ内はどこだ。可愛そうに此野道へ出て。人に貰つて居るとは。ヤレ／＼不便な事だ。旦那がこれをやれといはつしやるから。サアやるぜはやく内へけへるがい／＼。今に雪でも降て来て見たがい／＼。こてへられるものしやアねへき」ハイ／＼これはありがたうございませす。誠にあなた方の御情で。われ／＼親子が佐かります旅人」そうして手めへは親があるのかきく「両親ともにござりますが。此間からの大病で。達者な者は私一人。それゆへこんな賤しいとを。いたして其の日をやう／＼と

旅「なるほどそんな事だらうと。さつきから言て居た。サア／＼はやくけへんなせへ。ヤレ／＼可愛そうになアきく」誠にこの御恩ばかりは。一生忘れはいたしません。ア、ありがたうござりますトおし戴きて此日ごろ。終日居ても五六百とは貰ふ日もなきに。今日不圖も。成田の道者が與へられたる。銭を見て心の裡に。是もかの信心をする不動尊の。おん蔭かやとふしおがみ。さぞまち兼て父母が。此身の噂どり／＼に。苦勞にしてや在さんと。思ふ物からあせ道を。足ばやにこそかへりゆく。むかふの方より來かゝるは。野伏の權に段入偽太郎。荒菰を着て寒さは防げど。彼孫兵が卓見なく。一簞の食に口濡し。脇を曲ては枕とすれど。争で顔回が徳あるべき。いがぐり天窓にぼう／＼たる。髭はこの世の人とも見へず。手足の黒さは炭丸屋の。手間より一際目立たる。風俗詞につくされず。ぶらり／＼と來かゝりしが。成田道者に貰ひたる。お菊が銭を横目でぞろり。何か三人が低語て。そこへのつそり立塞がり 鶴ヤイ少女。手めへはでへぶ大獵をしたな。チト此方へも割を出しやなト目をむき出してお菊が肩。とらへられたる身は慄々。いかなる目にかあふらんと。思へば貌は初紅葉。物もいはれぬばかりなる偽太「サア／＼早く此方へよこせよ。先刻二合半飯だ酒は。みんな尿になつて仕まつた。偽太郎さまへ上ればよし。いやだといふと松原で。手めへの無鹽なまろ物を。三人して志めるがい／＼かきく「エ、權」何もそう肝をつぶす事はねへ。たか／＼四百か五百だらうが。此頃は不徴で。い



くらぶつてもみな取れて。こんなに裸になつたから。少しの間借るのだ。小女の貰た錢なんぞ  
 を目がける穢な權じやアなかつたが。仕方がねへ彼是言ずかれこれいはずに借ていきなきく「アイくわたしは  
 女の事。おまへ方が大勢して。無理にとらうとおつしやれば。どうも仕かたはないけれど。是  
 をみんなとられては。飯をたべる事もならぬ。そんなら半分あげませうから。跡はどふぞ了簡  
 して。横ハラサヲおむす聞わけが悪イはへ。半分借て割て見りやア。一人がやうく六十四文  
 か。七十二文のはした錢せにへイ外聞ぐわいもんがわりいはへ。いつそ偽太がいふ通り。芝を蒲團しばふとんに木の根を  
 まくら。久しぶりての初物をばつかり言せて呉やうかへ段々だんだん「チ、くそれが上分別じやうぶんべつ。サアく  
 あねへト抱つけば。わつとばかりに飛俊巡とびしやくきく「マア聞譯きわひないおかた。どふぞ眞まことびら堪忍かんじんし  
 て。賢けん何もあやまる事はねへ。此方こつちばかりがいとを。仕やうといふでは有あめへし。其方そつちもや  
 つぱりいゝ事だ。それがいやならその錢せにをきく「ハイくなんでもあげますから。是これはつかりは  
 御免ごめんなさいト泣なみくだすは道者みちしやより。貰もらひし錢せにの四百あまり。横よここれせへよこしやア堪忍かんじんする。  
 ア、さりながら惜おしいものドレく待まちなど面に袖そで。あて、泣なみなるお菊きくをどらへ。頬ほのあたりを鬼  
 髭ひげの。強こわきが上に五六寸。伸のびたる頬ほをあしつける。あれよとばかり振ふもぎり。泣なみく家路いへぢへ歸り  
 ゆく。心のうちの不便ふびんさは。おしてもまらんおしてるや。難波なには堀江ほりえのよしあしの。うき節ふし志こころげ  
 きととはいへど。哀あはれにもまた過ぎたりけり

孝女二葉錦卷之七終

八回

東播磨 朝暮里谷 刺書

（以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並ぶ）



孝女二葉錦卷之八

東都 梅暮里谷峨著

第八回

今さらになに生いづらん竹の子の。うきふしまげきよとはしらずやと。大宮人の口ずさみ。現に世の中に生いづる。たかき賤しきなべてみな。大小異同ありといへども。苦のなきものぞあらざるべき。たゞそか中に己れより。索めてすると天道の。逆路によりて苦心するとの。差別はありといひながら。夫人として善を積。徳を重ねて私なく。君に仕えて忠義を盡し。親に仕えて孝行に。友に交はるその時は。信をもつてなすべしとは。賢き人の教なれども。利に走るとき捷徑よりし。親しき人とも争ひ拒み。色に溺れて身を顧みず。親族家族に疎まるゝ。これらの人は後つひに淺ましき身となり果て。家をも身をも喪ふものなり。されば貞節に操を守り。淫奔がはしき事をせず。惻隱辭讓のこゝろ厚く。よくその道を守る者も。薄命にして生涯を。空しく送るのみにはあらず。或は街に屍を曝し。困窮零落する者あり。是天道の逆路にして。佛家に所謂過去の因か。まさに半兵衛親子の類ひ。いとも哀しき事ならずや。さればおきくが

眞心に。朝な夕なの看病さへ。いたらぬ限もなきものながら。緯のたらねばそのみぞ。思ひます穂の花すゝき。まねく袂の破れては。磯のみるめや足びきの。山めぐりする山姥の貌にさへも似たるべく。少女ながらも雄々しさは。手束弓とる猛夫に。劣らぬ心も今はこや。弱り果つゝ志かすがに。曇るや胸の十寸鏡袖ぞ露けき夕ぐれに。立出てゆく脊戸のかた酒瓶片手に啣みちを。歩む向ふへ小挑灯。提ていそ／＼來かゝるは。鳴戸村なる里正の雁八。それと見るより立寄て。馬ア、コレも菊ぼう此暗イのに。挑灯もなく何處へいくのだ。病人はちつともいゝかの。此あいだ中からして。鳥渡見まひにゆかふとは。思つても時分柄。何か色／＼聞がしくて。ツイ／＼無沙汰を志しましたが。大かたモウ米もあるまい。ヤレ／＼それでも年もゆかいで。よふ親御たちの世話をするの。ホンニ艶でも輕薄でもない。内でもおめへの噂ばかり。半兵衛どんは僥倖な。孝行女兒をもたしつて。朝から晩まであくせくと。よふアノ手が看病から。何からかゝらに氣をつける。人並のもので見る。芋の煮たも知らぬ年。一廉な年増でも。アノ子の眞似は出來ぬぞよと。不斷に言て聞して居る。そうして孝行しなさると。神さまや佛さまが。たい見ではござらぬほどに。おしつけその恵が來て。よい人の嫁になつて。乗物でも歩行やうな。身の上になられるぞへ。夫につけても親御のこゝろが。マ。どのやうであらうかと。思ひ出しても胸が塞がる。翌はまた米と麥を。持してやるから精出して。世話をして進せなせへ。



アノ醫者さまにもこの間。よく／＼嘸をしておきました。醫者は仁の術とやらで。そういふ事もあつたが。ア、いふ貧しいくらしを見て。コリヤ藥代が出来まいかと。安イ藥を盛れては。利めもおそく本復も。婿があかぬと思ふから。たとへ藥代はいくらになるとも。わたしが方から拂ふによつて。人參にまれ附子にまれ。おもいれまじの藥をもつて。早くよくしてやつて下され。病人は醫者が便り。どうぞ憑と書いておいた。なんでも其處等に氣づかひなく。たんと藥を飲すがよいト情の詞は身に融り。骨にこたえてうれしさの。思はず泪はら／＼とさく「モウ有がたうございます。何かから何まであなたのお蔭で。けふが日までは世も送り。ホンニ涉醫者さまも此間。參つた時におつしやるには。里正さまからだん／＼と。お言傳もあつた事。別して疎客にならぬ病人。わしも色々考へて。藥を調して進ぜるが。ハテサテとふる親父の病氣は。數年の苦勞がた／＼まつて。殊に時疫を強くひきこみ。發たゆへなか／＼急には驗も見へまい。マア此うへつよくなつては。療治もよつばど手おもひから。其處の防をして書いて。そうして早くよくなるやうに。強イ藥も盛ねばならぬ。ホンニ一人でいろ／＼と。さぞ苦勞だらうとおつしやつて。藥を合して下さるも。みんなあなたの御詞ゆへ。御禮の申やうもない。ナニ私は親の事。たとへどのよな難義はおろか。死んだとても厭ひません。まことにいろ／＼厚イ御世話の。御禮にちよつとあがらうと。ぞんじては居ますが。こんな身容でもあつても。あなた方

はよいけれど。男衆のまへも氣のどく。それゆへ實は御遠慮申て。御禮にもあがりません。必ずとも悪く思し召て下さりますなへ。馬何がさて禮に及ばふ。マア／＼なるだけ世話をしていとしらしいおめへの苦勞が。少しも軽くなるやうにと。思つて見ても知つての通り。人を遣へばつかふだけ物入もあり何やかで。思ふやうにはどいかねへ。ア、まかし困るであらうト紙入の中かい探り。紙に捻つて南鏡を。あきくにあたえ。馬是はあんまり少ねへがノ翌病人に肴でも。買てあげてくんせへ。此頃中は白里で。とんだい／＼鯛がとれる。大かた翌もあるだらうきくこれはモウありがたう。まかし誠にお氣のどく。馬ナニ氣のどくな事があらうサア／＼早く往なせへ。遅くなつたら案じなさらう。大に色／＼長嘸でホイ蠟燭が立きつたト別れて立さる里正がうしろ。おきくは玄つとふし拜み。どふいふ過去の因縁で。里正さまの情ぶかい。われ／＼親子を親類でも。ないやうに世話をして。米味噌までも氣をつけて。贈て下さるのみならず。斯して翌の小づかひに。せよとて尊ひお金を下さる。恩は死んでも忘れぬ。いつの世にかは恩がへしが。出来やうぞいと正直な。心にうれしさ續々と。足を飛せはせ歸り。此よし兩個の親に告。在しがま／＼を物がたれば。聞と等一半兵衛も。母も俱々歡びて。里正が情を感じける。かゝる所へ脊戸の戸を。がた／＼あけて隣の老婆。小妻木綿の綿入に。煤けし色も煤竹の。手垢に光る帯をしめ。草履はた／＼篠竹の。節もて造厂首の。煙管齒莖に食志め



て。圍爐裡の端にどつさりどば「ア、でへふ寒イのふ。あんべは些もえしかへ。ちよつと見  
 めへに來やうと思つても。暮といふものは色くいな。用ばかりたんとあつて。大きに疎るん  
 になりました。それでもよく菊ぼうが。めへにちく世話をするぞ。朝もはやく起てさぞ寒か  
 らうに。梅「チャおばさんお出なせへ。おきくやお茶でもあげなば「ナニかめへなさんな茶も今  
 澤さん飲で來たに。ア、どふぞ正月めへに。ちつともよけりやアいゝに。梅「さやうさ期して  
 寐て居ましても。ごぞんじの通り人手はなし。また肝心の物はなし。誠に氣がもめてなりませ  
 んば「ア、くそふだらうどつて。ホンニく菊ぼうが大底じやアねへ。旦那はどふだ菊ぼう  
 きく「アイちつといゝかと思へば。また悪くなる。誠にこまりますヨ。なんぞはやくよくなる藥  
 はありませまいかねば「醫者さまにせへいかねへだものを。別に仕かたもあんめへが。マアく  
 是からして見れば。神信心だ近所の事ですのみに思はねへが。この不動さまはとんだ利益  
 があるよ。此あいだも富口のほうで。二年このかた腰がぬけて。跡へもさきへもいかねへで。  
 ハア醫者さまも見限た所が。まだ若い男だアに。つまりねへ事だといつて。此鳴戸の不動さま  
 を。信心した所が。だんくどよくなつて。モウ此頃じやアさつぱりよくなつたよ。此間見  
 りやア擔ぎ物なんぞをして歩行だア。おらもハアたまげたつけ。福佛の信心も。一心を籠てす  
 りやア。夫だけの事はあるもんだなアお梅さん。梅「それはモウあるのだんではござりません。

私どもも随分信心をば致シますが。誠に難義な中で。兩個ともに大病を。煩らふと申すは。神  
 さまにも佛さまにも捨られたのでござりませうヨば「アハ、そんな氣の弱イ事をいゝな  
 さるとがあるもんか。今の若さにその位な病氣に。氣を墮してはいきやせん。わたしなんざア  
 若い時分から岩丈で。ツイしか薬一ぶく飲だともなし。今年はモウ七十になるが。行燈で針線  
 もする。梅干の種でも嚙割だアきく「ホンニおばアさんは丈夫だねへ。おつかさんはまだしも。  
 おどつさんは誠に弱くつて。あんなじやア長生か出來まいかと苦勞になりますヨば「ナニく  
 柳の枝に雪おれなしとやらで。弱イから早く死ぬといふ譯もねへのさ。マアく何より信心が  
 いゝきく「チャおばアさん今斷しなすつた富口の人。微倅でございますねへ。そんな腰の扱  
 のが直つたのかへば「そうよ倅倅な事さ。その外にもこの不動さまのお蔭で。病氣のよくな  
 つた人が。でへふあるといふ事で此頃はほうくからおめへりがあるよきく「どうりで此間も見  
 れば。駕籠なんぞで來た人もありましたつけ。梅「そりやアホンニありがたい。遠くの人さへ。  
 馬駕籠で信心をさつしやるのに。ノウおきくわたしは久しく湯にも這入ず。こんな穢ない體で。  
 拜むのも勿躰ないから。代りによくおがんで呉なさいよ。そして翌は御符でも戴いておくれ  
 きく「アイく翌夜があげましたらば。お參りをいたしませう。チャくお藥が出來ました。お  
 どつさんへあげませうば「ドレくおれがあげてやりますべえ。序に見めへも言てへからト藥



茶碗をもつて。半兵衛が側へゆきば、「半兵衛さんどうだ。そんな弱い事じやアいかねへせ。サア、薬を飲ませへ。ヤレ、大造に瘦たの。半ア、おばアさんか。今夢のやうにだれか人が来て居るそふだと思つて居た。アイありがたう何かモウ。お菊がひとりだから。色とお世話になりませ。近イうち正月も来るのにいつまで斯して居る事だか。少しいとまた悪くなり。誠に困つたもんでございやすば、「ナニ、やれ、思はずに。氣をながくして寐て居なせへ。また寒でも明て少し緩んだらよからうに。飯は給られますかへ。半エ、どふもその食がいきませんのさば、「なんでもお飯を給ねへじやア直らぬへから。我慢して給なせへ。ム、今の若さに。半、毎度モウおばアさん。ありがたうマア、どふか此容子では。死も志まいかと思ひますば、「ナニばかな死ぬのなんのとゑんぎの悪イ。さア、薬を飲ませへモウわたしも歸りませうトいとまを告て立かへれば。お菊はそこら片付けるに。鐘の音遠く二更とおぼしサア、休んで翌はやくと。母の後に横をかけてうち臥しつくくと。思ひまはして両親の。病ひを頼に愈さんには。隣の老婆が語られし。爰の不動に願込して一七日が其のあいだ。断食をして祈るなら。定めて納受ましますさん。僥倖里正鴈八が情によりて呉たる金。まづ四五日の小づかひには絆もかけずと歡びて。眠るとすれど荒冢の。壁漏る風は短かなる。裾の傍りへふきいれて。夢をも覺すばかりなり。かくて夜明になりければ。例のごとく起いで。明餉を志まひ何くれと。

絆わらましを果しつ。是より鳴戸の不動尊へ。參らんものと思ひしが。イヤ、晝は人目もあるに。この小川にて垢離をとり。赤條々になつて居るを。見られん事も耻かしく日が暮たらばと思ふにぞヤレ、けふは鴈八どの。情によりて樂くと。送るものかと父母の。側につき居て薬の世話。湯水のとまで心づけ。居ればお梅も半兵衛も。歡ぶものから不審がほ「ヤレ、けふは久しぶりで一日内に居やつたのふ。それはそうとコレおきくや。今朝からしてお飯を。おぬしはさつぱり給ぬじやないか。どこぞ鹽梅でも悪くはないかへき、「イ、エ何處もなんともなし。ナニお飯をも給ましたヨ。梅、それでもたべた容子を見ないが。アノ断食のなんのといふ。馬鹿な事を志まいぞよ。此寒イのに何も給ずじ。そなたまでが頼らつては。わたし等が仕やうがない。サア、熱く雑水でも。こしらへて給やれト病ふしながらこま心つくは可愛さ八しほにも。まして吾子のいとしさは。言に詞もなが長川。鶺鴒の船にあらなくに。胸の簞は絶やらず。なかき短かき綱手にも。おもふ心は夜の鶴。あさる雉子の焼原に。見ゆへに去つむうき身の淵の。恩愛ふかき與五の海。はては涙となりぬべし。おきくは今さら回答べき。ともなきま、俯きて。心ならずも焚つける。曲突の薪にそえて燃す。倭にあらぬもろこし売。春ならなくにもえ出る蕪火も今はたえく。日も夕ぐれとなりけり尾上おろしの風さむみ。昨日よりして催ふせる。雪はちら、門の口。降こむほどに駈いで。戸をば細めにひき立つ。身



にまみん〜と寒かりしも。おもへば雪のしらせかや。嗟病人に中らねば。よいがと獨岐くも雪を見雨を見るにつけ。心にかゝる兩親の。重き病ひを祈らんと。その日のくるゝをまら豫て。凜り出たる脊戸のくち。彼白居易が詞にも。雪は鷺毛に似て飛で散亂し。人は鶴裳を着て立て徘徊すと彼はいみじき雅言。これは眞の心より。寒さいとはで竹の子の。皮もてつくる大笠に。裾をば高くはし折て。急ぐとすれど降まざる。雪はたちまち野も山も。眞白になりて少女子が。脛の色をも欺くべし。あきくが心剛なれども。彼方をむけば田の面より。吹來る風に息さへも。吻あへぬまで貌をうつ。雪吹に堪かね此方をむけば。裾よりふきいる雪礫。腹のほとりも濡つべし。されども親を思ふなる。心ひとつに口の裡。南無や大聖不動明王。この誓願に與力して。親の病ひを忽地に。怠らしてたび給へど。一心不亂に念じつゝ。やがて不動の門前に。至ればこゝに小川あり。流るゝ水は濤々ど。響き涉りて凄ましく。岸に生たる枯葭の。戦ぐも今は身に志みて。心細さもいやませど。傍なる枯草ふりはらひ。心づよくも着物を脱ぎ。彼大笠を上じうち着せ。やがて小川の岸よりいれば。淀みに張し堅凍の。鏡のごとくなるうへに。降つむ雪は脛を超え。思はず慄と胴ふるへ。齒の根もあはで立すくみ。水をながめて居たりしが。斯ては果てじどかねてより。瀬をばまりたる石川なり。眼を閉て踊りいり流るゝ水を手にうけて。口をば沃ぎ面を拭ひ。夫よりよふ〜枯草を。便りて岸へ這あがり。さしもに高き石坂を。登

るとすれど足龜まり。踏所をさへも覺へねば。一段昇りて二段こけ。よふ〜不動の堂前へ。至りにければ平伏て。生たる人にもいふごとく「と〜さまもか〜さまも。かさね〜の不僥倖。そのうへ久しく煩らひまして。人の情にやう〜と。薬も飲せ飯をさへ。給ては居れどなかく〜に。急によくなる容子も見へず。もしもの事があつたらばと。それは〜私が。心の裡のうき苦勞。並大躰ではござりませぬ。まことに新な不動さま。どふぞ兩個の病人が。はやふ本復いたしますやう。お守りなされて下さりませ。モシまた天命とやら申す事でもともよくなりませぬなら。どふぞ私が命をとつて。と〜さまとか〜さまの。壽命をのべて下さりませト二回も三回も操かへし。操かへしては伏おがみ。頓て社壇を下りつゝ。彼石坂を幸じて。よふ〜に下りけれど。今日は朝より食を絶。勞れしうへに猶やまぬ。雪は虚空に渦を巻。猛風肌を裂くばかり。今はなかく〜氣も消て。たゞ一足も歩まれねど。二人の親もさぞや〜。案じわびてぞ在さんと。思へばいと氣もせきて。小川の岸へ凜りつき。着物を着んと其處等を見れば。笠も着物も埋まりて。少し小高く見ゆるのみ。手をさしいれて笠ひき起し。雪を拂ひて襟をとり。肩には被しが手龜り。袖さへどふす事ならず。嗟便なしと思ふ所に。颯と吹來る烈風に。息もつまりて吾志らず。其處へ破と倒れしが。更にその後を知らざりけり。かくて上總の瀧新田なる。悪見徹八は此ほどより。うち續きたる不僥倖に。たゞ一ツなる布子もうち負。三尺帶



に焼穴の三ツ四ツあいたる古衾。吠のごとき烟草いれに。煙管さし込懐にし。晝のほどより立出て。この富口に至りつゝ。ごろつき仲間を尋ねれど。飲代となる事もなければ。夕ぐれ時に立いで。此大雪に笠も着ず。曝しも今は黄黒色に。なりし手拭類かぶり。此處へふらふら来かゝりて見れば。丈なる黒髪を。みだしてうち伏す少女のすがた。怪みながらたちよりて。見ればいとく艶しき少女。譯は老らねど帯ときて。氣絶なしたる容なれば。矢庭に是を引起し。見れば肌は氷のごとく。是は定めて雪吹にあたり。凍へ死んだものであらう。何でも近所の女見だが。とはじめは少し憐みの。心ありしが忽地に。思ひついたる悪巧。かうしておくはあしいもの。藁火で肌を温めて。生かへつたら此方のもの。たどへ療治が叶はずとも。本錢いらすの骨折損。そうじやくと點頭て。矢庭にお菊が死骸を抱き。逸足いだして走りゆく

### 孝女二葉錦卷之八終

### 孝女二葉錦卷之九

東都 梅暮里谷 峩著

#### 第九回

風は地を吹て積雪おのづから融り。肌を劈く寒天に。簑笠着たる一個の旅客。五十ばかりの供をつれ。往なやみたるむかふ風。喘々て来かゝりけり。右手なる森は明神の。社も遠き大門の。杉の林の中垣に。火かけちらく薄煙り。彼乞食等がうち集會。樹の下蔭に焚火して。雷々どかたるかど。思へば是はさにあらで。要こそあらめ年のころ。四十ばかりの大漢子と。今一個は年もまだ。十まり四ツか五ツばかりの。眉目麗はしき少女なり。漢士は少女を抱きつゝ。右へ掻やり左に伏さし。焚火に膚を温めつ。ヲ、イ、と呼吸たり。此とき少女は眼をひらき。四邊を偵うちながめて。彼雄子が貌うち守り。たい。茫然ともものさへいはず。眉をまはめて慄々。震ふ手元緊と把へ。男、ヤイなにを震へるぞへ。心太を見るやうに。手足ぶるくして居ずと。正氣になつたら火にあたつて。心をまつかどするがよい。ヤレ、果報な事ではあるぞへ。既に鳴戸の川ばたで。死んだを見ればかあいそう。大骨折て被で来て。肌温てやらふ



かど。思つても火の氣はなし。やう／＼でこの森の下。雪のつもらぬを僥倖に。ふき付たかれ  
 落葉。腹から脊なかを温めたら。息ふきかへした運の強さ。シテお娘はこのもの。名は何と  
 いふ年は幾箇だ。ア、慈悲ぶかい此微八の。めにかゝつたればこそ。サテ／＼運のよいものだ  
 ト口に任せて少女子に。思ひつかする猫なで聲。底意は何とまら齒のむすめ。やさしき詞に絆  
 されて。莞爾とうちわらひ「何處のお方かぞんじませぬが。アノ恥かしい身なりをして。雪吹  
 にあたつて居りましたを。おすくひなされて下すつたは。誠に命の親同ぜん。私は鳴戸村で。  
 半兵衛が女見きくと申ます。男ハ、アそんならアノ鳴戸か。わしも鳴戸の近邊だが。今までお  
 まへの貌も知らなんだ。ア、よし／＼送てあげやう。微八といつちやア富口鳴戸。東金あたり  
 で誰ぞらぬ。ものもねへ男でござる。サア／＼一所にア、まかし。あるかれるかき／＼ずいぶん  
 歩行てまゐります。ハイヤ／＼おれが負てやらふ。今やう／＼と息吹かへして。この深イゆき  
 を踏で往たら。また雪吹にあたらふも知れぬ。サア／＼負てき／＼イヤ／＼どういたしまして。  
 ナニ／＼あるいて参じます。ハハテサテ何もそのやうに。義理だてはいらぬぞへ。亦めをまは  
 せばわしが厄介。それより負ふが此方もました。彼これいはずとサア／＼トやがておきくを抱  
 あこし。脊に負つ／＼雪ふみわけて。鳴戸の方とは右左り。路引ちがへて走るほどに。おきくは  
 脊なかに負れながら。此方を見れば雪の夜に。それかあらぬか渦だかきは。不動の森の幽に見

へて。彼處ぞ鳴戸とおもほゆるに。そは迹にして往ほゞに。心の裡に訝かりつ。されど思ある  
 此微八。殊にはいと／＼深切なるに。思へばそれさへいひ兼て。また一二町をゆくほどに。  
 鳴戸はます／＼遠ざかりて。此ゆくさきに見へわたる。松の並木は土氣とおぼし。こゝにてい  
 よ／＼氣を悶へき／＼モシ／＼あなたは鳴戸へゆくと。あつちやりましたがアノ松は。大かた土  
 氣のなみ木でござりませう。シテ見ますと右と左り。どうしたわけでござります。ハ、エ、だま  
 つてある松原が。土氣であらふが痴漢であらふが。死んで閻魔の廳へゆく。そなたが命を佐け  
 たれば。とりも直さぬおれが子だ。子ならば親の好まじい。煮てくはふとも焼て喰ども。何の  
 さしづをうけるものかト初にかはりし悪口に。おきくは思はず胸どつきり「イヤモウそれはお  
 つちやるとほり。それにちがひはござりませんが。私の両親は。いつぞやより頼ひまして。此  
 せつは枕もあがらず。夫ゆへに不動さまへ。御願がけに参るほど。遅くなつては猶さらだ。案  
 じませうとそれが苦勞。どうぞ迎ものお情に。宿までお送り下さりまし。ハ、エ、ぐす／＼とや  
 かましい。おそくなつて案じるより。あれぎり死んで仕まふたら。五年十年百年立ても。内へ  
 けへる事はならぬへ。苦界十年些の間だ。命までは活きらぬへ。おつつけおやにもあはしてや  
 らうさ。何のかのと理くつをいはず。おれがいふ通りになれトよりもつかれぬ會釋に。おきく  
 はます／＼胸塞がりて。這回は何といらふべき。詞さへなく慄々ど。まきりに渾身の震ふのみ。



されど命を佐けられしは。たゞ一旦の恩なりけり。それに絆され彼がまに〜。何方へ荷ぎゆかるゝや。それを此まゝ止べきならず。心地の平生にかへりしこそ。愿ふてもなき僥倖なりよしや甲斐なき膂力でも。ふみ外して逃んど思ひ。腰を抱へし微八が兩手を。足ふみ仰しふり拂へば。思ひがけねば手をはづし。ばつたり雪へ尻をつく。あきくは得たりとたちまちに起あがりて傍にある。荆に積りし雪かい握み微八が貌へ投つけければ。微八はむつくと身を起すを。起しもたてず足くびを。とらへてそこへ引たほすに。かよはき力も此ときには。命を際と思ふほどに。微八はかひなく引ずられて。半身雪に埋みつゝ。片面泥にまみるゝを。手をもて拭ひ目を見はりて。怒り面に見はるれば。お菊はそのまゝ逸足いだし。走らんとすれどふり積る雪は脛をも超るばかり。一足出しても一あしはあとへさがれる心地して。歩びかねつゝゆきなやむ微八はすかさず起あがりて。渾身の雪をはらひのけ。大股ふんで追かくるに。あきくはやさしき身にこそあれ。荒きわざをも厭はねば。心神さながら健なり。少女には似ず足はやくて。微八はほど〜退つきかねたり。されど此方は大漢子膂までも見はして。息を計りに逐なれば。争かあきくは逃果べき。間ひ三尺ばかりになる。微八は猿臂を伸しつゝ。あきくが襟をとらんとす。あきくは晃りと身をかはして。傍の藪へがさ〜と。下葉かきわけ逃るにぞ。微八は猶も奮震して小ざかしく逃るとも。何方までか逃さんやと。俱に此方の藪蔭へ。踊りいれば荆

茂り。衣の裾にまつわりつくを。うち拂ひかなぐりのけて。それがまに〜おふほどに。向臈太股かきやぶりて血まほます〜滴れど。緯ともせずして彼方此方とおひめぐり〜。彼明神の大門なる。楯の並木のほどりへゆくに。あきくが心は勇むといへど。今日は朝より食をたちそのうへ雪吹にあてられて。氣絶なして間ひもなければ。今は身うちもつかれ果て。はこぶ足さへ四途路なり。得たりと微八は引とらへ。ハコレあきくわれはマア。おれになんの意趣があつて。エ、アノやうなめにあはした。モウ〜此方も合點ならねへ。わいらがやうな恩知らずは。思ふさまに戯淫で。そのうへ活て仕まはねば。腹がぬへ。サアこれあきく今さら泣てももな。とてもかなはぬム、かなしいか。コレサこつちを向ねへか。何だそんなにびん〜して。ハ、ハ、ハ、いやなのか。否でもあふでもコレあきく。まだ手いらすの初茄子。どりや一口といひさまに。株つらなる杉の木の。根へおしたほして裾引まくり。ほど〜辱しめんとす。あきくはアレヨト身をあせり。はねかへさんともがけども。伸々力及ばねば。今はせん方なくばかり。十方にくれたるその折しも。焚すてあきし以前の火影。暴にばつと燃たちけり。微八は思はず首さし伸て。人やあるかと倍と見れば。間ひわづかに十たんばかりを。隔にけれどこなたには。大木の杉連なりて。左右なくは見わからず。されど頻りに火焰たち。もえけるまゝに訝かりて。伸あがり〜。見るに思はず抱へたる。手の弛みしを僥倖に。あきくはやをらば



ぬかへし。火影を見るより杉のかげ。かなたこなたへ逃さまよひて。火のあるかたへ往て見るに。嚮に微入が焚火せし。明神の寶前にて。大杉の本なるに。旅人とおぼしく二個づれ。むかひ合つゝ火を吹つけて。傍の株に腰打かけ。物かたらひて居たりけり。此者すべて何人とも。わきがたけれど。身にせまる。微入が難をのがれんと。兩個がわはひへ踊りいれば。二人は胸り身をそらして。雲時守りてありけるが。年二十四五なるは。主人と覺しく身形さへ。賤しからざる風俗にて。銀の胴金いかめしく。打たる脇ざしそりうちかへし「エ、なんだ驚散な。見ればやさしひ女の兒。此ゆき降に里遠き。こゝへ來やう筈がない。不知案内のわれ」を。誑かそふと化あつたな。狐か狸かサ、なんだ。正躰を顯はしおれト白眼つけければ供の男も。おなじく反をうちかへし「につくいやつト立かゝる。おきくは其處へ跪ぎ」ア、これわたしは狐でも。狸でもござりませぬ。めつたなとをなされますな。チト譯あつて難義するもの。どうぞ佐て／＼トあとは涙に哽かへる。微入はあどより追かけ來しが。此躰を見て序あしと。こなたに潜みて伺ひある。かの弱官は貌を和らげ「ナニ譯あつて難義するとか。ま、どういふ譯合で勾引にでもあふたといふのかきく」ママ。そのやうなとで。ア、モウ息がトさし俯く。二人は目と目を見あはせて。まばし有しがまた弱官が「コレ戀六や此むすめは。勾引されたものと見へる。定めて遠くの者でもあるまい。内をきいて送つてやらふか」戀ハ、アそれがよふござ

ります。コレ／＼おむすそのやうに。泣ずとも内は何處。親の名は。何といふと。いふたら直にわかると。送つてやれと旦那のおさしづ。サア／＼いふたトせり詰れば。おきくはいとと哽かへる。涙をはらひ彼男の。貌見て胸り呆れけり。此方の雄子もおきくが貌。つく／＼と見て呆るゝさまに。主人の男はます／＼訝り「ナニそなた衆は知つた中か」戀「イエなに知つたと申ではござりませぬ。ア、こりやア此むすめは。エモシ旦那。かたりめでござります。些どもおかまひなされますな」旦那ニ此女兒がかたりとはきく「エ、そりやなんとおつまやります。私がかたりとは。アノおまへこそ見おぼへある。ア、それ／＼八さまに。なつて來て誑して金を取てにげた」戀「ナニおれをかたりじやと。ウヌふてへ少女めだ。咎もねへものに罪をきせたな。どうするか見て居おれトきそひかゝるを」旦那「ヤレまで戀六たどへちつとの間ちげへがあるにもしろさきは女。怪家でもさしてはいひ譯がねへ。マア／＼靜にまたがよいト制しても猶きかず。女兒はおろか子供でも。是はツかりやア了簡ならぬト亦もやおきくにとびかゝり。襟くびつかんで引たほさんと。いさむを留る弱官が。ヤレ／＼までトたちまはる。おきくもアレヨととび除處に。晃りと落す金襴の。守り袋は見おぼへの。是はとどりあげ弱官が「ヤ、此守りを持からは。そなたは半兵衛どの、女兒じやないかきく」どうしてわたしごとゝさんを「チ、それを知らいでどう志やう。わづ／＼譯ねて此土地へきく」そうおつまやれば麴町の「いかにもわたしは



文里が筋鐵次郎と申すもの。稚ないときにはおまへにもきく「おめにかゝつた處か。とゞさまも母さまも。最大おせわになりましたと。申し出すは平生のと。鐵シテあふたりともお達者かきく」その兩親がびやう氣ゆへ色く苦勞をいたします。鐵病氣と聞ては氣づかひな。サア／＼是から些もはやふ。何かのわけは跡でゆつくり。嘸しませうと立あがる。戀六呆れて詞なく。もぢ／＼するをおきくはとらへて「病氣のものは此人に。誑して金をとられたゆへ。どうしてあなたは此人を。御供におつれなされました。鐵これは近ごろ抱へた男。そういふわけは努々おまへ。そんなら是は盗人じやの。世にいふ盗人猛々しく。人を怖れずとやら。たどへのとはり。己れが悪事をした國へ。浮く供をして來るとは。さてこそ大膽不敵なやつ。何は兎もあれ引縛してト立かゝられて戀六も。身に覺ある悪事の露顯に。胸まづ恟となせしかど弱み見せてはなるまじと。眼を見はり狂ひまはるを前にはおきく後には。鐵次郎が立塞り左右なくこゝ逃さらせず。彼方此方と挑みける。蔭に志のびし悪兒微八。やうすとつくと伺ひつ。元より親しき戀六に。脅力を添んと踊りだし。おきくを矢庭にかきのけて。鐵次郎に打てかゝり。おめき叫んでおひはらふ。手練さへなき鐵次郎も。年まだ弱き壯夫なれば。二人を兎身に追つかへしつ。打つたれつ挑みあふ。おきくは是見て氣もあぶ／＼。怪我し給ふなど戀六が。後にとりつき足に黄縁。微八が袂を引つかみ。ひき戻せどもかよはき力の。敵對べくもあらざれば。

まだいに社の楷まで。こけつ轉びつ双方四人が。争ひいまだ雌雄を分たず。此ときギイと寶殿の。戸をあくるおとみちかく。踊り出たる一個の雄子。物をもいはず戀六と。微八を宙に引つるし。白眼つめるをよく見れば。鳴戸村なる市藏なり。中にも戀六恟くりして。此とき面色青く變じ。物いふ術さへおまへざりけり。市藏聲を高くして「おきくどのもよく聞れよ思ひ出せば七八年。賭博ばかりを絆として。戀六微八などいふ。悪兒等に突あふところ。ふとした事で半兵衛どのが。尋ねてござつて大まいな。黄金貯はへてござるを見て。ふいと浮んだ悪巧。この戀六めを莊官に似せ。まんまと金を奪ひとり。二人半わけと跡から往て。みればそれより戀六めは。逃さつてゆくおまへれず。始めてわるいとをしたと。氣が付ても取てかへらず。内へもすこ／＼かへられぬば。すぐに死んで思ふたれど。此戀六めを引とらへて。恨みはらしたそのうへで。思ひかへして今日が日まで。うか／＼命活生ても。商賣なしの乞食同せん。こゝらにぶら／＼する日もあり。武さしさがみの方へもゆきて。一日／＼と贈つたが。さても故郷が懐かしく。また此邊へ立いらて。是なるやしろに二三日。暮すともなき今宵の雪。降こめられて歌みあるに。ものさはがしき表のやうす。どつくと聞て欠出しました。這奴二人に細かけて。おまへがたに渡すほどに。またわしにも細かけて。かたり仲間の大罪人。とも／＼引て知縣所へ。訴へなされト悪びれず。傍にあり合細かいどり。難なく二人を縛めて。兩手を又き



どつかと坐しサ、わしにも繩かけて。引立ゆかれよおきくどのど。覺悟の體に鐵次郎も。おきくも俱に感激して。その誤りを改めれば。罪にあらずといふとあり。殊にわれ／＼戀六と。微八がためにうきめを見んど。したる處を救はれたる。その鵠恩さへあるものを。繩をかけんは思ひもよらずと。志きりに是を辭退して。やがて市藏もろ共に。二人の者を引たてし。鳴戸村へと急ぎける。かくてその夜半すぐるころ。半兵衛が家にいたり。春戸をがらりと引あくる。音き／＼つけて案じわびたる。お梅はそこへ駈いでし。見ればおきくは文里が躬。鐵次郎に扶けひかれて書うちはらひひるを見て。一回は歡び一回は訝かりその絆わけをどふほどに。鐵次郎も簀笠ぬぎすて。一別以來の情をのべて。絆あらしを説けるほどに着病さへもわするはかり。うち歡びて半兵衛にも。志か／＼なりとかたりつし。暴に曲突を燃つけて足沃がせんと立さばぐ。跡方よりして市藏が。引たて來ぬる戀六微八。かやう／＼と心の底さへ。いち／＼さんげなすほどに。半兵衛お梅も市藏が善にかへれる心をかんじ。その舊來の惡をどがめず。よろこびあふと大方ならず。されば戀六微八の二人は。翌莊官へ引わたし。且市藏も諸共に。引給へといひけれど。莊官もまた義心を感じて。半兵衛が方にあづけおきぬ。かくて鐵次郎は半兵衛にうちむかひ。先頃つ／＼薄命に。世を疎んじて此邊りへ。塾居ありしは父文里も一重もゆめ／＼志らざれば。いかに／＼と日毎にあんじ年をかさね候ひしに。ふとしたにて定かに

知れ。志からばむかへ申べしとて。遙々尋ね候ひし。思ひ設けぬ下奴の戀六。叔御夫婦の仇なりとは。これもまた不測なり。渠近邊より吹擧して。此春抱へし新參。成田の不動へ參詣と。いふて供にはつれたれど。かゝるべしと思ひきや。いざ／＼準備し給ひて。荏土へ赴き給へとて。他事なき文里が書翰をさへ。とりいだしてすゝむるにぞ。今はなか／＼辭むによしなく。その頃無沙汰に此所へ。塾居しぬるは志か／＼なり。それよりかやうと縁故を。はなし聞へて病中ながら。深切黙止がたければ。お梅も髪をとりあげなごしつ。さて莊官なる雁八にも。此よし具に物がたり。發足の準備をするに。彼戀六と微八の二人は。惡事重罪なるにより。俱に頭を刎られたり。同類なれども市藏は。善心に立かへり。且義心あるものなればと。その罪を救されければ。市藏今は世のなかに思ひおくとなしといひて。既に頭をそり圓め。一ツは父母の菩提をどひ。二ツは是なる人々が。息災を祈るべし。三ツには渠等が後世を營み。此むらのかたほどり。さ／＼やかなる庵を結びて。生涯行ひすまじけり。渠が渾家は生りや死りや。絶て往方を知るものなし。さても半兵衛鐵次郎等は。日ならず荏土へ赴きしかば。文里一重も歡びあひて。死たる人に再會せし。心地にます／＼悦びけり。かくて其年も暮に及び。あら玉の年たちかへれば。半兵衛夫婦もだん／＼に。着病も怠り果。平生のごとくなりけるほどに。是より活生を營なみけり。鐵次郎は廿歳を超て。定まる渾家もあらざれば。お菊を嫁になすべ



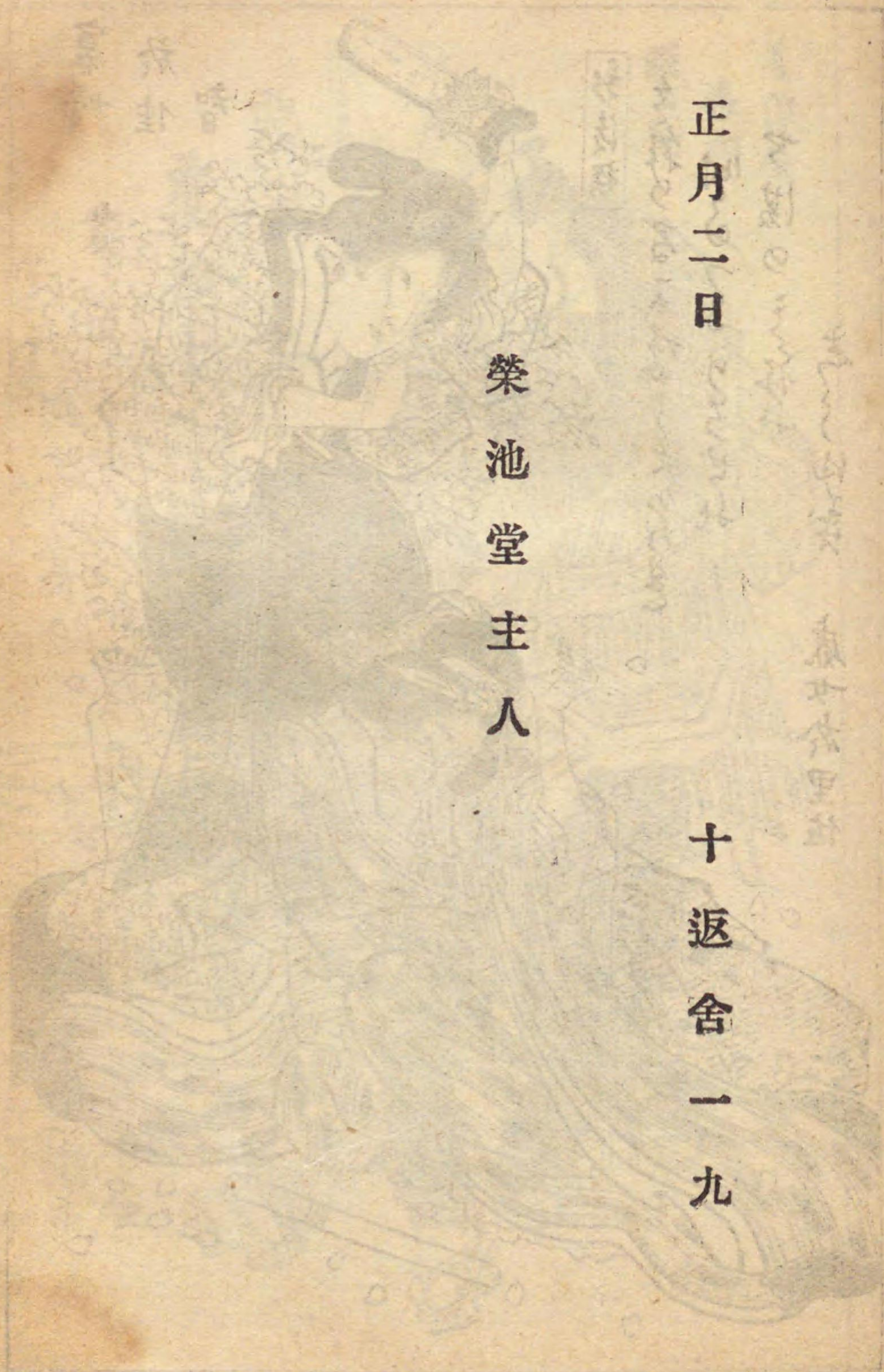
しど。親との相談まかかんとしのひ。婚姻まかひにするに中睦なかむつまじくて。男女あまたの子を設まうけ。ますくはん  
まやうしたりしは。みな孝行の徳なりけり

孝女二葉錦卷之九大尾

口 演

愈御萬福幸甚々々志かれは兼而御注文の著述出  
來候故爲持上申候是はかの辻商の賣藥をいやし  
め候族有か如く賣藥といへとも夫々の藥方有之  
もの故其能あれはいやしめ候人には賣不申とも  
渡世には相成候ものにて予か此著述もそれと同  
しこんなものといやしめ候人えは賣り不申候つ  
もりにて澤山に可有之候譯は人も四十以上にて  
志やらくさき人は戲作の書たとへ氣に入候とも





正月二日

榮池堂主人

十返舎一九

○印を出し本は買不申候故賣藥をいやしめ候人  
 には譽られ候ても無益の事にて唯いきほひさか  
 りの年若き方こそ此方の御得意と被存候芝居役  
 者にて菊五郎團十郎を最負致候人は錢を遣ひ  
 申候それ故此書もそこをはり候つもり又は版元  
 御好物の女中かたをはり候つもりにて編候著述  
 に候間色氣たつふりにいたし外題も所縁の藤浪  
 と致申候餘者貴面萬々可申上候先原稿懸御目申  
 上候不具











卷中兼題

第壹 寄藤戀

第二 風前花

第三 別戀

第四 雨後月

第五 述懷

第六 懷舊

第七 恨戀

第八 野徑露

第九 釋教

第十 寄松祝

上件

風置所縁の藤浪初編上册

十返舎一九著

第一回

よに色情に耽るものほど。一莖に逼るはなし。まかれ共源氏ものがたり。おほくの婦女のこ  
とをかけるうち。紫の上ほど。貞操違一なるはなく。餘はみな失ありて薄情輕卒なるのみおほ  
く。一時の放戯に慰心をさきとし。淫奔の虚名を蒙ること。少弱のならひながら。殊に女には  
偏癖の質なるありて。ものに執着の念ふかく。竟には燈蛾の身をいたづらになすにひとしく。  
おのれを過のみならず。他をも害ふをもつて。毒蛇に譬喩せしも宜なるかな。此にむかしく  
の事なりける。星月夜鎌倉の郷雪の下といふ所に。よろづの問屋を生業とし。數代相續して。  
名を藤浪屋丹六といふものあり。富術近郷に併ぶものなく。活計心の儘なりしが。頃年不良の  
このみ打ついき。損毛かさなり。其上丹六四十二歳の時妻にわかれ。子ども二人あり。姉をお  
りさ弟を丹松とて。いまだ幼弱なれば。母なきを猶あはれみ。寵みそだてけるが。其頃桐が谷  
に。青原屋武惣治といへる豪家ありしが。丹六親族にて。武惣治老年のうへ多病なりければ。



萬端丹六の世話となりて懇切互に淺からざりけるが。武惣治の妻おかちといふは。元來此家の婢女なりしに。其身奸辨伎才ありて。主人の氣に諂ひ。引あげられて妻となり。女子一人をまうけたるが。おかち淫慾の心深く。いまた壯年なるうへ。いつしか丹六に色情の想をなし。折にふれ事によりて。その憶念をあらはしけるにそ。丹六さすがに。道ならぬことゝは思ひながら。おかちの美色なるに心まよひ。終に奸通しけるが。武惣治不期にして病死しければ。いよ誰はゝからず。兩人の中人目にもたつほどなりしに。丹六の妻は先達て相果しとゆへ。祥みなりとて。丹六かたへおかちを引どり。夫婦とならんと議したりけるに。おかち夫にわかれにより。家業向手代どもに。打まかせおきしが。女あるじと侮り。引負して。損失たびくのとよりければ。此上はとて丹六のもとへ引移り。身上をひとつとなしけるにぞ。丹六近年不如意なりしも。忽ち榮花の身となりし所に。俄に業病を發し。難治の症とて。醫藥の志るしなく。相はてければ。おかち兼て佞奸のものなるゆへたん六存生のうちは。先妻の子兩人を。わざとあもてむきはわか實子のごとく。愛情をあらはし。掌中の玉となしたりけるが。今はとや本分の我意を恣にしふたりの子どもを阻みきらひて。小細の仕落にも。もつての外に怒り罵り。萬事つらくあたりて。隔意をそなしたりける。げにや梁の燕燒野の雉子。夜の鶴の子をおもふ道ほど。私に着するはなし。まして女の鄙情の親疎をわかつこと格外のならひ。武惣治おかちが

中に出生せし女子。おふりといへるは容貌艶麗なりしゆへ幼少のうちより畠山なにかしどのときこへし。高官の御館へめし出され十五歳のとき。との御情をかうふり。志だいに寵遇厚く榮達立身して中老役をつとめ。ことし廿三歳になりけるを。おかち御いとまをぬかひて。これに藤浪屋の家名を相續させんと。ないくむすめふりのかたへそのとを申つかはしけるに。娘はどの、厚情をわすれがたく。家にかへりて異男にまみゆる所存なしとて御いとまのとをうけひかず。またどのにも惜み給ひてさけたまはさればおかち詮方なく。こゝろにはあらぬながらも。あもてには其道をたつるふりして。丹六が姉むすめのありさに聲を取て家督とせんと。其評義に決着しける所に。丹六存生のうちよりめしつかひし手代に。喜代七といふは盛年廿七歳。人品賤しからず。柔和にして貞實なるものなりければ。親類の中より。此もの見どころあり。ありさに娶せ家名を嗣せんこと。永久の基礎ならんと。すゝむるものあるによりて。後家おかちも。喜代七が心ざしの。すなほなるにめで。ないくそれなきはめ。ありさへは。そのことをいひきかせおきけるが。喜代七へはいまだ發言せず。幸は是までは。毎年商もの仕入のため。手代ども一人づゝ。上京させしが。いづれも京都にてつかひすこし。無異に歸國せしもの稀なり。當年は喜代七をのぼせ。その辛抱を見とけしうへ。ともかくもすべしとて。喜代七へ上京のことをぞいひわたしける。さればもの、油断といふこと。守人の隙なき警にして。か



ほど邪智ふかきおかちの。いつかうにまらざる事こそあれ。當年十六歳なるが。稟性伶俐にして。よろづに器用なれば。いつしか情の道にもわたりて。手代喜代七と人志れず志のひ合。龜鶴の契淺からず。いひかはせし中ゆへ。おりさ親類のうち。肉身の人をひそかにたのみ。喜代七と夫婦とならんとの念願。母おかちへいひいれさせしを。それとはまらざして。左右なく納得しけるゆへ。おりさ喜代七のよろこび大かたならず。心いさみて喜代七出立しければ。おりさもはやその日より。指をかゝめて其歸り來らん日をぞまぢわびける。

## 第一回

かはるを見ても。たのむはかなさといふ句に。あるはみな沈み浮べるよの中に。宗祇法師のつれたりしは。よの浮沈人の盛衰。さだめなきとはいひながら。一心の轉倒より。出きたるの心なりとや。藤浪やの手代喜代七。あきなひもの志いれのため。上京して三條大橋なる。三笠屋祖平といへるは毎年の定宿なるゆへこれに逗留して。仕入萬事のかげ合に油断なく。これぞ身の洪福の階梯。出世のこごち。肝心の所なりと。心を亂さず。遊所おほき都の花をも。芥と見なして一心不亂に用辨のとのみ他事なかりける所に。一日元方の問屋共打より。喜代七を饗應せんとて。ひがし山邊に倡行しけるに。頃は彌生の旬天麗なるに。人のこゝろも花とど

もに。ほころびかゝる時節。ほろ酔きげんにそゝのかされ。祇園町のちとせといへるに入て。藝子あまたまねきよせ。佳肴珍味の酒盛。喜代七さすがにも。吾妻に見なれぬ。都女のなまめけるに心うかれ。一しほ興に入たる所に玉照といへる花娘。そのころの全盛なるを喜代七のあいかたにとて。よびきたるを見ればすがたは柳の雨になやむがごとく。艶顔は花をそねみ。月をねたむばかりなれば。木石ならぬ喜代七こゝろうごき。其夜はまくらをならべて。巫山の夢をむすびたるが。それよりは幻に。そのよそほひをわすれず。玉てるもまた。喜代七がいやしからぬ。器量の壯麗なるになづみて。はじめよりすこしも。いつはりをいはず。たがひに真情をつうじてより。今ひとたびといへる兼言の志だいにたびかさなりてふかき悉にしとぞなりにける。まことや褒似周の世を亂し。西施吳のくにを傾しとどみな。令色のわざにして。たつときもいやしきも。そのおもむきは異ならず。おそるべく。つゝしむべきの一癖なるをや。喜代七玉てるの中。いかなる宿縁のなすどころにや。たがひに身をわすれて。喜代七これはあるまじきこと。われとわがこゝろをせむること。あまた度なれども。とかくに憶念やまず。通ふほどに際限なく。つゝにはあきなひもの、仕入れ金のこりすくなにつかひはたして。やうやく目のさめたるごとく。後悔すれどもかへらず。途方をうしなひうか／＼と。或夜玉照にむかひて。聲をひそめかたりけるは。われ今は何をかつまん。かりそめの色香にまよひてひたすら



にそなたのいとしさ。わすれやらず。あどさきのわきまへもなく主人より渡されし商賣もの、仕入金。残らずつかひすてし。今はとや國許へもかへられず。外に身をたつべき手段とてもなれば。主人へのいひわけに。この身をすつるより外思案なしと。覺悟はきはめたれども。今さらそなたにこゝろひかれ名残おしさにとてもつきず。もはや此よのあふせは。こよひかぎり。あどの回向をたのむと計りいひさして。なみだに袖をまぼりければ。玉てるこれをきくより。おなじくなみだを。はら／＼とながし。わがみとてもいかなる縁にや。はじめておめにかゝりしより。ひとかたならずおもひそめ。外のつとめは身にそはず。なじみかさねしかたもみな。おのづからうたてくおもふこゝろつきて。今はとや。かたさまならであふ人なく。紋日もの日ものいりを。わたしの手よりせしことも。さだめて志らせ給ふまじ。まだその外にもかたさまへ。わざとかくせし金の入目。なにやかやに。着替のこそでもうりまらなし。今はこの身のつまりとなりて。いかいせんこのほどより。よの目もあはぬほどなれども。このとかたさまへかたりなば。こゝろをいためたまはんとのいとしさ。何ごともいはざりしが。はづかしながら。肌うすき此すがたとなりしにつけ。傍輩衆の異見。親かたの折檻にあひながらも。おもひとまらぬあくゑんを。約束ごとゝあきらめて。この身も覺悟をきはめしうへは。ともて手をひきあふて。死出三途の川をわたり。未來の契りを永くむすばんことせめてものわたしがね

がひ。さはいひながらかなしきは。ひとりの母。外に子とてはなく。わたしひとりをつたよりにして。くるたびごといづとも。かならずさゝをすむしてくれな。おりふしは灸もすへて。わづらはぬやうにしてくれよ。もしやそなたの身に。凶事などあつては。この母もともに。いきてはぬこゝろ。たよりにおもふはそなたひとりはやうねんのあくのをたのしみに。おもふてゐるぞと。此あいだも。くれ／＼いふてかへりまなに。なみだぐみし母のかほ。あれが見おさめであつたかと。おもへばかなまうござりますと。よそのきこへをばいかりて。忍びなみだにくれば。喜代七もさしうつふき。まばしことばもなかりけるが。よのなりゆきとは言ながら。百里餘へだてしそなたと一所に。まねるといふは。よく／＼のふかい縁。我にも老年の兩親あり。さぞやなげきたまはんと。おもふにつけても。そなたの母御の。こゝろねもいたはしさ。われこそは。まなでかなはぬ身の上。そなたこそはながらへて。母のちからとなるが孝行。思案志かへて見るがましかと。いへば玉てる。そのまゝ喜代七に取すがり。なみだのひまよりいふやうは。まねる御身をふりすてし。いきながらへるこゝろなら。このやうに苦勞はまませぬ。きづよいことをと。せき入／＼。うらみかこてば。喜代七もせんかたなく。さあらば明後十七日は。としごろ念ずる觀世音の御えん日。宵のうちよりこゝに來たりて。人／＼のねまづまりたる時分。ひそかにうら道より同道し。いづかたにてなりとも。心まづかに最後を遂



ん。そなたもあとに。心のこりのなきやう。母おやへの記念おくり。萬事のとりままつして。明後日をまつべし。われも國元への書状をまたしめ。見ぐるしきものどもをもとりかたづけ。明後日きたるべしと。約束をかため。其夜はたがひになきあかしつゝ。夜あけて喜代七は。立かへりたるあとに。玉照いよ／＼かくごを究め。傍輩の女郎ども呼あつめ。時ならぬ在所の産神祭をいひたてにして。酒肴をふるまひ。心のうちにいとまごひをなし。妹女郎に。記念の小袖などをゆづり。手調度その外。目だ／＼ぬやうに。それ／＼／＼わかちあたへて。母のかたへもいとまごひのふみに。かたみの品をそへて。つかはずつもりに。かきおきをまたしめ。もつばら死覺悟をなして。約束の日をぞ待詫ける。志かるに。喜代七が滞留しける。宿のあるじ祖平。如在なき男にて。喜代七が昨今の様躰何とやらこゝろえず思ひけるゆへ。氣をつけてうかいひ見るに。着替萬事を取片付。諸方への書状をまたしむるてい。まさか歸國の支度とも見へず。顔色もいつにかはりて青ざめ。氣もうき／＼とせざる様子は。必定このほどの遊所ぐるひに。仕入金をつかひはたし。いひわけなさの志にかくごに相違あるまじ。さあるときは藤浪屋へ對し。われ申わけなしと心つきければ。祖平一計を思ひとりつゝ。喜代七を人なき所に。まねきよせて申けるは。其許何とやら神色すぐれず。屈佗の躰は察するところ。此頃打つゝきての彌所がよひに。仕入金不足せしとおぼへたりわれらかやうに。年ひさしく。御店の定宿として。

外ならずおもふがゆへに。かゝる失禮をもかへり見ず。笑止にぞんずるのあまりに申すなれば。つゝまづかたり給へ。品によりてわれら手段ありと申ければ。喜代七きゝて。仰せのごとく。主人の金子をつかひはたし。今更後悔も詮なく。此うへは一命をすて、申譯せんかど。どつちいつ。思案にあぐみはてたるが。そのもと手段ありとは。いかなる事や。何とぞわが危急を助けたまはるべしといふにぞ。祖平打うなづきて。さればこそ我推量に違はじ。誰しも若きうへにはあるならひながら。何とぞもあとにては是非なし。われら一計ありといふは。當所に有徳なるかたの子息。島原の傾城をうけいだし。親達へかくして。外にかこひおきたるが。此節そのこと露顯におよび。よん所なく其女郎へ。金子五拾兩さしそへ。かたづけたきよし。われらへたのまる／＼により。福めのごとく心つきて。さてこそそのもとへ。この媒をなさんとおもふなり。とても其許歸國いたさるゝとむづかしからん。さすればこの女をもらひうけ。持參金の五十兩をもつて此地に足をどしめ。何にても商賣せられんはいかにといふ。喜代七これをきくより。たちまちこゝろまよひ。志ばらく黙してゐたりけるが。げにや弱冠浪子の情は。むかふ所の境によりて。轉變さだまりなきならひとて。今まで佛顔のまたる喜代七。こゝろの鬼のいさみいでし申けるは。まことに御深志かたじけなし。われ放埒に。主人の金子をうしなひ。すでに志ぬるかかごをきはめ先刻國もとへの書状に。はやそのことをまたしめし所。これはひと



へに。いまだ運命のつきざるを。御ことばにつき。何とぞ其一儀。御せはたのみ申たしと。おもひ入て見へければ。祖平聞て。さあれば爰に居ながら。主人にいとま乞ふも慮外ならん。ひとたび急に歸國せられ。主人のいとまをもらひて。早々當地へのぼらるべし。仕入金のことはそれ／＼の元方へ相渡せし躰になし。荷物船積いたしたりと。われらかたよりも。其おもむきの添状に。委細を申つかはすべし。そのもともそのころえにて。首尾よくいとまをこはれ。上京あらば。かの女を呼むかへ。持參金をもつて。仕入かたの婿をつけ。主人かたへ荷物をおくりなば前後浪風なくおさまるべし。もつとも持參金はかりにては。不足なるべければ。その餘分の金子は。われらの工夫にあり。跡の差路萬端のこと。我にまかせ。すこしもはやく。歸國志かるべしと。祖平詞を工みに申ければ。喜代七かぎりなくよろこび。ともかくもよきにはからひたのみ入と。玉照に契約のことはすておき。はや歸國の用意をぞなしたりける。祖平はひそかに。喜代七の主人かたへつかはす。書状を志たしむる文言に。喜代七事遊所ぐるひに。仕入れ金をつかひすて。其言譯なさにその女郎と。相對死いたし。芝居狂言の種となりて。主家の名をもいださんとせしところ。我等差畧をもつて。やう／＼とすかしなだめ此たびは無事に歸國いたさする上は不足金御了簡あつて。そのまゝ御めしつかひ下さるやうにと其身のはたらきと。喜代七がとりあはせを。なが／＼とかききたしめ。主人の名あてとして。まつかり封

じ。喜代七へわたしければ。喜代七かゝる文面の書状とはまらず。今となりてたちまち。心中におもひけるは。やがて我歸國のうへ仕入もの残らず代金わたし。荷物船積の手當しかへりたれば。追付入津すべしと。當分主家を詐りおき。ありさの聳とならば。其上にて京都へこのたびの仕入金。内々にてのぼせ。萬事の首尾をつくなふべし。祖平がせつかくの世話。また玉てるの心ざし。無になすはきのどくなれ共。ふぢなみやのむことならんことは。抜群の仕合。とかく小事は大事にはかへられずと。おのが得手に了簡を極め。玉照に約諾せし。命終の口を吉日として。三條の宿を發足しける。神ならぬ身の玉てる。朝夕に佛の御名のみ。くちのうちねんじつし。やくそくの日となりけれども。喜代七のおとづれもなきをいぶかしく。人をやどひて。やうすをきかするに。喜代七は歸國せしこのことゆへ。玉てるあきれはてし。せつかく盟約せしことのほろなく。さてはわれをなぶりし。うらめしさよと。身をふるはして。くやめどもかへらず。死覺悟ひやうしぬけて。未練あこりて見れば。死小袖ひとつの外は。みな人にやりて。早速の不自由さ。妹女郎にあたへし。縫もやうの小袖。戻せといへどかへさず。りどてはあまり覺悟見ごとすきて。はやまりしこのうたてく。いかにやせんと。夢にゆめ具る心地して。途方にくれしが。この事世間に沙汰せられて。所にも居がたく。外へやられて。相替らぬつとめの身の。さだめなき人の行する



## 第三回

けふよりは驚袖そ朽はてん。妹をうらみの涙ながらに。といへる歌のこの妹は戀にあらず。繼母のことなりと。吳竹集に見えたり。されやふぢなみやの後家おかちがむすめ。ふりといふは。性質美麗の上心利穎悟。御やしきに勤て中老となり。あまつさへどの、寵遇あつく。威權にまかせ。おのづから我意のことどもおほく。まだいに諸人のにくしみふかくして。其中には長舌の言を嚴る族。とにより折にふれて。おくがたへ讒言しけるゆへ。終にながの御いとまをたまはり。今更後悔さきにたえず。どのにわかれまいらせんとを悲み。なげきつゝ。なくなく母のもどへかへりけるが。もの思ひ絶ず。ひきこもりて打ふしければ。母おかちは是をいたはり。さまなくいさめかしづきつゝ。心中には。あふり歸りたる上は。此家督の嗣とせんと。またまた私慾の念とおこし。おりさを疎み阻みけれども。おりさは母の心中をばまらずして。喜代七歸國せば。祝言して家名をたてんと。ひとりよろこびまぢわびける所に喜代七既に歸着しければ。とびたつばかりのうれしさ。まぼめる花の。うるほひをえたるがごとく。あどけなきむすめごころの。穂にあらはれて。さらに餘念はなかりける。まかるに喜代七は。京都の宿より祖平の書状を。謀計とは露まらず。番頭段兵衛へさしいだし。かの地仕入諸色の代金をわたし。

荷物船積の手つがひし。かへりたりと。かねて偽筆をもつて。金子の請取がきこしらへおきしを。さしいだせば。段兵衛はじめ。傍輩ども。きよ七無難にて。萬事用辨とのひ。かへりしを賞して。酒肴をまうけ。其勞をなぐさめけるところに。段兵衛。京都の祖平が書状をひらき見れば。思ひもよらぬ。きよ七が始末。遊所ぐるひに仕入金をつかひはたせし段。逐一に申こしたるとなれば。大きに懈轉し。早速後家おかちへ。かくと披露し。いかにはせんとひそめくにぞ。おかち氣色を損じて。喜代七を呼よせ。祖平かたよりの書状をよみきかせ。そのつみを糺さんとす。きよ七案に相違し。仰天して。さては祖平に。たばかられしくちおしきよと。悔どもせんかたなく。かく露顯におよびし上は。分説なくして。全身に汗をながし。消も入たきおもひにふし沈めば。おかち聲あらゝかにいふ。そのほう此たびの上京。故障なく用向どののへかへりなば。ゆくゆく其身の祥もともなるべき。相談もなしおきたる所に。もつての外の不届。あまつさへいつはりをかまへ。商荷物は船積の手當せしと。主を欺くこと。日頃の實意に似合ず。必定丹六どの死去まられてより。女あるじと侮りての仕形。其分になりがたしと。いそぎ喜代七の宿へ人をつかはし。よびよせて始末を申きかせ。追々穿鑿の筋もあれば。預置ぞと。喜代七をそのまゝ。あづけつかはしければ。おりさはこれをきくよりも。よろこびたちまちに。かなしみどかはりゆく。身のほろなさ。あきれはてし。結句涙もいではこそ



ひとり部屋にかけいりて。喜代七が此たびの志だらをうらみくやみ。其身ひとつにどつおいつ。涙はふたつのたもとをひたし。只ふしまづみなきくらし。正躰なくぞ見えにけら。

風聲 所縁の藤浪初編上冊終

十返舎一九著

風聲 所縁の藤浪初編中冊

第四回

不孝のものゝふむ足跡は。劔となりて。堅牢地神の首にたつといへり。喜代七が枉逆の罪。その父母におよぶと。いたましきかな。父は太五八とて。貧困の畔百姓老衰のうへ。はたらきも自由ならず。これまで少々づゝの。きよ七が合力を請。朝夕のけふりもほそきくらしにて。父母やうやくに。その日くをちくりけるが。思ひもよらず。きよ七の不埒に驚き。あづかりかへりて。その罪をせめ問ふに。喜代七面目なげに。委細をつまらずかたり。さるにても。京の宿主に。たばかられしとの口惜やと。齒がみをなしてくやしければ。太五八きくより。其方は京都のやどぬしの。たばかりしをうらむ。われは又。なま中に。情だてしてくれられたがうらめしや。先方のころざしは。みすくそなたが。其女郎と心中して。いのちをおとすふびんさに。異見しても。きゝいれまじと察し。いつはりて歸國させしは。志ぬるをたすけし命の親うらむるはそなたの了簡ちがひ。もつたない主人のかねを。榮耀につかひすてし横道もの。わ



びとせんにも。金子をつくなふ手だてはなし。いつそのと。命をとつて下さりませと。そなたをつき出すよりほかはない。どふでも志ぬるいのちなら。上がたにて心中志たが結句ましと。おもへば宿ぬしどの情が。かへつてうらめしい。生がひもなき老の身の。杖はしらとたよりにきた。たつたひとりのそなたのいのち。見ごろしにするかなしみは。何の因果ぞなさせなや。不所存のそなたおやにまで。此なげきをかくる不孝もの。いらざる長生するゆへに。かゝるうきめを見るくやしさと。夫婦諸どもすゝりあげて。悲歎のなみだせきあへねば。きよ七も。わが身の落度先非をくやみ。なみだはてしはなかりける。志かるに其夜。戌の刻すぎたるとおぼしきころ。太五八の名をたづねて。入きたるものあり。おや子なく目をはらひてこれを見れば。わかき女的美貌たぐひなく。光彩外にあらはれて。いとやさしげなるが。小袖三つ四つかさねきて。すこしのふろしきづゝみを負しは風色にそぐはず。太五八おどろきて。こはたれ人にやと出むかへば。女さゝやかなる聲していふ。わたしはこなたの喜代七どのに。用事ありてまいりし。藤なみやのむすめ。ふりと申すものと。聞もあへず。喜代七すゝみいで。さてはかねて。おやしきにおつとめと。うけたまはりおよびしお方なるや。御大切の御身分にて夜中といひ。おともつれ給はぬと見へ。御自身に何をかもたせ給ふは。いかなるとにて。わたくしへは何御用ぞと。低頭すれば。おふりまばらく。さしうつふきてあたりけるが。やう／＼と

きよ七にむかひて。今は何をかつゝみませう。わたし事は。おやしきつとめのうち。どのさまの御寵愛にあづかりしを。おくさまの嫉妬ふかく。それゆへ御いとまをたまはり。此ほど屋どへさがりましたがけふそなたの上方より。かへられしとき。ものかげよりふと見そめて。おもひのたねとなりしは。外にてもなく。戀しゆかしとおもふ。どのさまのおもぎしに。似たとこそいへ。瓜を割げにそのまゝの顔そなたとはおもはれず。見れば見るほどおもひまさりて。かくも心のうつるものかど。わが身で我身の儘ならぬは。いかなる宿世の因縁にや。操をたつるころもうせ。勿躰ない事ながら。どのさまの御恩に見かへて。そなたのいとまうなつたも因果。浮氣ものとわらははわらへ。このおもひ。いつかはらさでおこうかど。胸にたく火のせつなさを煮つとこらへてゐた所に。おもひがけもなふ。そなたはこゝに。あづけられしと。其様子をきくより。かなしさつらさ。身もよめあられず。一圖にたへかね。人目を志のびぬけ出て。やう／＼とたづねてきたは。いくせのおもひ。さだめしこれにござるは。そなたの親御達か面目なけれど。そのさし合もかまはず。女の身でこのやうに。はづかしいとの有たけを。思ひきつていひ出すからは。わたしのねがひを。きいて下さればよし。さもなければ志ぬる覺悟。ふびんとおもふて下されと。雪をあざむく顔ばせに。時ならぬ紅葉をちらし。時雨にまさるなみだながら。おもひ入たる風情に。喜代七は只吐息をつきて詞なければ。太五八いふやう。きよこ



とに見るかげもなき喜代七へ。御執心のおとば。ありがたけれども定めてお聞もなされたでござりませう。不行跡の悴。御主人の金子を。放埒につかひすてし科によりて。宿へお預け自分の身さへいかいなりゆかんど。親子三人屈詫最中そこ所ではござりませぬと。いひはなせば。おふり懐中より服紗づゝみをとりいだし。喜代七どの、難義は。金さへ償ふときはすむことゆへ。そのかねわたしがたてかへませう。其代り親達の情にて。きよ七どのとわたしを。夫婦にして下さりませと。きよもあへず喜代七。これはまた。思ひもよらぬおのぞみ。此身にとりては。御心ざしのほど。わすれませぬと。大恩ある御主人へたいし。不屈せし上。またあなたと縁をむすぶなどは。表だちては迎もかなはぬこと。内證にては不義に落。いよく御主人の御かほを穢せしうへに。ふみつけるも同然。このことばかりは。御用捨なされて下さりませと。きくにあふりは。そらくと膝になみだの淵をなし。なるほど。そふあろうとはおもひました。が。ととも。おもひきるにもきられぬ戀路。不得心の上はせんかたなし。かねての覺悟。さらばでござると。懐劍をとりいだせば。太五八夫婦。あはてとりつきおしとめ。只今あなたを。爰にて御生害させましては。なをこの申わけは。おや子三人のいのちを。なげ出しても飽たらぬ。おや御さまのおにくしみ。とあつてあなたのおのそみの事。われにおゐて。いかにも御返答は申がたし。去ながら。おいのちにもおよぶことなれば。これまた。よん所なき

こと喜代七の心底はぞんぜんどもわれすゝめて。おのぞみはかなへませうが。まづ喜代七が不埒の一件。あいすみし上のこと。それまでおまち下されかしと。當坐通れにいひませと。おふりいかなこときいれず。そのおことばはきこへたれど。一旦家出せしうへは。もはや宿へは。かへられぬ身のうへ。今宵よりすぐに夫婦となり。喜代七どの引負のかねをつくのひ。わけをたて、其うへにもこのところのすまぬならずは。親御たちもろとも。いづくへなりともたちのき。身をたてん用意はこれにと。かのふくさづゝみより。圓金三百兩をとりいだして。ひたすらに。おもひつめたる氣色なれば。太五八夫婦もてあまし。承引せざれば。自害するとの難題に。おや子三人顔を見あはせ。汗おしぬぐひみたりしが。とかくだますに手なしと。太五八顔をやはらげていふやう。志からば今宵はとめまいらせ。ともかくも御のぞみにまかすべしと。きくよりあふりは。太五八夫婦をふしおがみ。よろこぶもまたなみだなり。太五八かくいひなだめて。あふりをとめあき。夜中ながらも。ひそかに人をやどひて。ふちなみやかたへ。志かくのよし申つかはし。何とぞむかひの人こさるべしと。使のものをぞつかはしける

## 第五回



英勇豪傑も。子の愛情にはおぼるゝならひ。まして非職凡下の女の身は。なをさらの事にし  
て。ふちなみやの後家おかち。太五八のかたより申せし。委細をきして。大きにおどろき。  
たちまち満面になみだをうかめ。腹立のうちにも。ふびんさはやるかたなく。いそぎむかひの  
ものを差圖して。さしつかはしけるに。おふりなかくかへるべき氣色なく。なまなか武家の  
風になれて。こゝろざしを一圖にかため。やゝどもすれば懷劍を取いだしては。いのちにもお  
よばんどの躰にもてあまし。いりかはり立かはり。おい／＼むかひのものかさなり。なだめつ  
すかしつ。おどろかしつ。さま／＼に詞をならべ。手を盡せど。とかくいひはなちて。不承引  
なるゆへ。いづれもせひなく。おかちへかくどかたるに。おかち邪智ふかく。必定これは。喜代  
七の。いひおしゆるならんと推察して。にくしとはおもへども。わが子のふびんさに。おもひ  
かへて。この上はせんかたなし。喜代七の罪を用捨しおふりと夫婦となし。さいはる後家の舊  
家。青原やの家名を再興させ。ふちなみやの跡式は。ばんどう段兵衛に。おりさをめあはせ。  
相續させんと。一家親類をよびあつめて。そのことを發言して。輿論をきくに。當時ふちなみ  
やの繁昌なるに諂諛し。いづれもおかちが存寄に。批判するものなく。殊にこれは順道のはか  
らひなればと。それに一決して。早急に地所をえらみ。いぜんの桐ヶ谷にて。あらたに家作普  
請をいひつけ。出來次第おふり喜代七にゆづりて。青はら屋の暖簾を。かけさすべしとのこと

にて。まづそれ迄は。太五八のかたに。おふりをさしおき。相應の手當をなしけるゆへ。不慮  
にして。きよ七親子の福ゑとはなりたりける。それはさておき。こゝに哀れをといめしは。む  
すめありさの身の上なり。はじめきよ七と。いひかはせし中の念慮といきて。喜代七京都より  
歸りなば直に表向婚姻のとりむすびすべき。母の存念にうれしく。其期をまちおほせ。よろこ  
びいさみしも。はからざる變事によりて。喜代七は宿あづけられしさへかなしき上。今又おふ  
りど。配偶のときはまりしと。きくに身もよもあられず。そのことのみにもねをこがし。お  
もひくづおれ。兩眼をなきはらし。このほどは食事もすゝみかねて。顔色あしく。晝夜うちふ  
して。只ひとり。なきあかしてぞゐたりける。さてまた喜代七かたにも。其こゝろにはあらぬ  
共此たびの難をまぬがれ。父母のこゝろやすむるも。みなおふりの好意によりてなれば。せん  
かたなく其意に應じて。交構の因はなしけれども。おりさのこゝろねを察し。不便におもひ。  
ない／＼つてをもとめて。おりさのかたへ。段々のわけをかきあくりけるを婢女のかせといふ  
ものひそかにとりつぎて。おりさにわたせば。やがてこれをひらき見るに

喜代七文やう／＼と人目のひまに志たゝめまいらせし扱とやこなた此たびの志だらまことに  
／＼めんぼくもなきわけ何事もこなたあしきゆへ御ほど泡にもたんと／＼御くらうかけお  
きのどくにぞんじ上まいらせしおふり泡御事まことに／＼よん所なきことにてこなた心には



そまぬ御事にいへども親たちのなげきやすまるとゆへにてさぞや御ほど泡にはこなたこゝろなきものゝやうにおぼしめしはんとかなしくこれにはいろ／＼わけも御ざいとゆへ何事もながき御目にて御覽下さるべくけして／＼御ほど泡すていにてはなくそのうちにはいたしかたもあるべくいまゝまばしのうち御まち下されいやうねんじ上り／＼こなた今ほどはせんかたなくいへども御ほどさま御事はわするゝひまなくあんにあり／＼ほど過いはい其内御めもむにてくはしきおはなし山／＼御ざいまゝかならず／＼御たんきとなさるまじくこなた心はかわり不申せつをまちあり／＼とかくその御かたの事こゝろにかゝりあんにられるゆへこなた心のほど御志らせ申たくわざ／＼志めし／＼くはしくはまた／＼あどのたよりに申上り／＼まづは筆とめめでたく／＼

月 日

ありさ。此多を見る目も。なみだにくもりて。あやなく。されどもすこしは。うらみもうすらぎ。時節をまてとある文牒に。まばらくは。こゝろなぐさみあたりける。まかるに番頭段兵衛は。佞奸ものにて。後家おかちへ媚諂ひ。何ごども。そのこゝろにまかせけるゆへ。既に今度ありさとの縁談のこと。おかちの内意をきくより。はやおのがものがほして。人目のひまには。ありさの部屋にきたりて。さま／＼にたはふれ。くどきけるにぞ。ありさはひとすじにきよ七

のことのみ。おもひつゞけて段兵衛を思きらひ。中／＼志たがはざれば。段兵衛心中にいきどふり。ありさのことを後家の手前。あしさまにいひなしけるゆへ。おかちもありさが。段兵衛をきらふことを推察し。あるときありさにむかひて申けるは。種はかはれど惣領ゆへ。わしのむすめおふりにむこをとりて此家督をつがせんとおもひしに。不所存ものゆへ。義理ある丹六どの。名跡はつがされず。さあらばそなたに。段兵衛をめあはせ。さうぞくきせんとおもふ所。きけばそなたは。人でなしの喜代七と。不義密通し。其うへ段兵衛をきらふよし。女どものはなしにきししが。さてはわしを。まゝ母とあなどり。不義のおとこへねんをのこし。おやのゆるせしおとこを。きらふ我儘。ひつけう義理あるわしゆへ。なにごども志らずがほしてあげば。つきあがりしまかた心にくし。そうりやうのふりをのけて。ほどけの血すじを。たてさせんとおもふ。わしのこゝろざしを。むそくにするそなたは道志らず。それに今度のおふりが不埒。かんどどうもすべきところを。そのまゝにおくは。そなたをおもふゆへのこと。はて不義をいひだてかんだうせば。そなたとても不義もの。おなじ科ゆへ。おふりをゆるかせにしておくは。そなたをかばふわしのこゝろ。相手のきよ七はおふりに添して。わしがさとの名跡を。たてさすること。横道もの念をのこさず。そなたにおもひきらせんため。これほどまでに。こゝろをつくす。わしのことばにさからひ。段兵衛と祝言するを。いやといやれば。わしもま



た。りやうけんがあるが。それでもいやか。返答が聞きたい。おのが惹ての理をせめて。ことばに針をもつ。いひ廻しに。ありさは始終。兩袖を志ぼるばかりに。なき入るとばなければ。おちかちかさねていふやう。わしはみな。そなたの爲をおもふていふこと。この目出たい婚禮の相談に。いま／＼しいなきがほ。なにがかなまうて。そのやうになきやるやら。わしのいふこと。きがいらいで。くやしうてなきやるのか。腹がたつてなくのかど。目にかどたてゝ。のゝしるこゑのおそろしく。むすめごゝろに。身もふるはれ。たましひも。きゆるばかりにおもへども。ありさごゝろのうちには。たごゝろのちにおよぶとも。喜代七よりほかに。あそこはもつまじと。誓ひしうへ。ことさら日頃。むねあしき段兵衛のことなれば。喜代七ごゝろがはりせしとて。こなたのみさほはたがへじと。おもひこめども。母のきびしき。ことばにせんかたなく。おもてには納得せし躰にてあいさつし。その座はすませども。ごゝろのうちには。迎も生がひもなき。いのちと覺悟して。それより部屋に引こもり。なみだながらの死支度。こよひのうちには志のび出。海川へも身を。まづめんどおもひきはめ。すいりばこを取いだし。書おきせんとするすみに。あつる涙をすりませて。手にとる筆の命毛も。こよひかぎりもなくも。認めかけし折から。へやの戸をひきあけて。入きたるはありさが弟の丹松なり。はつとあどろき。かきかけし書置おしかくせば。丹松姉の顔をさしのぞき。ほろりとなみだをこぼせし

が。丹松もはや十二歳。稟性利發にして。心ざしもやさしきものなりけるが。姉にむかひて。聲をひそめ申けるは。さきほど御身へ。母うへのおほせありしこと。みな立聞してありました。が。わしでさへかなしかつたもの。さぞやあまへはなをのこと。かなしかつたでござりませうが。どうぞは／＼さまのいふとをりにして。きげんのないやうにして下さりませ。あまへの志かられるときは。いつともわしにまで。無理なことばかりいふて。あげくのはてには。うたれたりつめられたり。わしはそれがかなしいと。目をこすれば。ありさ俱に兩眼をおしぬぐひ。可愛そふに。としもゆかねそなたにまで。さま／＼のうきくらう。としさまのござるときとはちがひて。母さまの邪見。とかくそなたとわたしは。何をしてもお氣にいらす。志からるゝにつけても。としさまが戀しうて。わたしの身のつらさより。そなたが何ぞ仕落して。せめうたるゝをみるかなしさ。わびことすれば。身最負するど。かへつてお腹だちはましこそすれ。あこゝろのとけることばなく。こちからへだてる氣はなけれども。母さまからさま／＼の無理難題に。いつそのこと。志なふとはおもひながら。眞身といふは。そなたとわたしばかり。もしもわたしが志んだなら。さぞやそなたは。たよりがあるまいと。おもふばかりに志なれもせず。志んぼうしてゐる。わたしのこゝろじやもの。そなたのくらうにすることなら。母さまのおことばはそむかぬ氣。かならず／＼。氣づかいにおもやるなど。弟のこゝろぬふびんさに。だまし



すかせば。丹松さもうれしげにいふやう。どうぞそふしてくださりますなら。とてもものことに。今おまへのかきかけた。手紙のやうなものをわしに下され。わしはそれが氣にかゝると。いふをうち消し。あれはわたしの退屈紛れ。なぐさみがきの反古といふに。丹松かぶりうちふりて。いや／＼わしが此あいだ。習ふ手本のうちに。書といふ字と。置土産の置といふ字を。今おまへのかいたを。わしはちらりと見ましたが。あれは書置といふことか。かきおきとやらは。よく芝居で。人の志ぬどきにかくもの。わしはそれゆへきにかゝります。ひよつと。おまへが志ぬる氣で。かきおきとやらをかくのかと。わしはかなまうてなりませぬ。大かた今のやうにいふたは。わしをだまして。志ぬるきでござりませぬか。おまへが志んだら。わしは何と志ませうぞ。どふぞ。志なすにゐて下さりませ。わしがやがて元服したなら。商内をして。おまへはわたしがすこします。あねさまどふぞ。志なすに居て下さりませと。なみだをふき／＼。眞實眞身の兄弟おもひ。姉の氣色を見てとりて。異見まじりのかこち泣。ありさは始終胸ふさがり。こら／＼し溜涙聲はたてじと。袂をくちにおしあてし。志ばらくことばも出ざりしが。なるほどありやうは。そなたが推量のとほり。段兵衛と祝言するがうとまじさ。いやといはい。母さまのおにくしみに。いかなる憂目を見んことも。はかりがたくなしさに。志ぬるかくこの今の書おき。海川へも身をなげて。こよひかぎりのいのちと思ひつめたれども。だん／＼今の

そなたのことばを。きけばきくほどいぢらしさ。かあひさにこゝろちくれ。志ぬにも志なれず。もはやわたしは。おもひといまるほどに。きづかひせずと。はやう行てねやるがよい。今宵もはや五つすぎ。あまりこゝに長居をしていやと。また兄弟同士よりて。何をいふぞと。は／＼さまの氣をまはして。おまかりにわはぬうち。はやう／＼といへども。丹松たちかねて。あねをきづかふこゝろねに。なみだをとめかねければ。あねはこれをいさめながら。ともになみだにふしまづむ。ありさせつかく覺悟せしも。愛情のきづなにひかれて。おもひといまりけるが。かく兄弟の子ども。繼母の頑痴なるにかゝりて。さま／＼の憂艱苦をなすとひとへに因果輪廻のことばりにて。もと丹六不良の念をおこし。おかちに。奸淫せしよこしまの子にむくひけん。善種はこれ善縁をひきて福をなし。惡種は惡にさそはれ。禍をなす。天道自然の黙報にて。おそるべく。つゝしむべき道なるをや。猶業因消滅の時節。きたらざるうちは。遁るまじきとなるべし

風聲所縁の藤浪初編中冊終



風聲 所縁の藤浪初編下冊

十返舎一九著

第五回

倭奸は。巧言飽まで令色なるゆへ。人のこゝろを傾けしむ。藤浪屋の番頭段兵衛は。ひたすら  
 ありさに懸想して。つけつまはしつ。いろ／＼に心詞をつくして。いひよりけれども。ありさ  
 すこしも。こゝろ亂れず。殊にきよ七の方より。折ふしの文の便を。せめてもの心ゆかしに思  
 ひつゝけて。なか／＼段兵衛にまたがはず。かへつてさん／＼に恥かしめければ。段兵衛大き  
 に憤り。後家おかちへ。あしさまにいひなし。無實の罪を負ふせんと。はかりけるに。おかち。  
 志きりにありさをにくみ。いか／＼はせんと段兵衛を相談相手になし。とかく人なき所にては。  
 鼻突合せて。ひそ／＼とさ／＼やき合けるが。いつしかたがひに。こゝろを隔す。打かたりける  
 が媒となりて。奸淫の情をおこし。つゐにおかち段兵衛と。道ならぬまくらをならべしより。  
 次第にふかくなりて。誰はゝかるかたもなく。後にはまことの夫婦のごとくなりて。段兵衛我  
 意にほこり。ありさ兄弟を疎み。弟丹松もいたづらに。あそばせあかんより。いづかたへなり

ども。奉公に出さんこそ。かへつて其身の爲ならんぞ。おかちへすゝめける所に。さいはる此  
 節。おふり喜代七が新宅普請成就し。ひきうつりければ。俄に召つかひの男女をかゝゆるにつ  
 け。丹松をも奉公分にさしつかはし。とかく當人のためなれば。いたはらずして。きびしく折  
 檻し。めしつかふべしとのことにて。それよりはおふりのかたへ。ひきとりてさしおきけるに。  
 喜代七は内心にこれをいたはり。不便を加へありさのかたへつかはす文など。其後は丹松をた  
 のみて。人志れずさしつかはしけるが。丹松幼年なれども。心利たるものゆへ。随分ひと目に  
 かゝらざるやう。喜代七ありさが中をとりもちけるが。あるとき。おふりかたよりの使にて。  
 藤浪やかたへきたりけるに。折節此日は過さりし丹六の忌日。彼岸のうちにあたりたりとて。  
 女ども打より。ありさも手つだひて。團子をこしらへ。近隣へくばりけるが。後家おかち中  
 の間の正面にて。臺所を。見はるところに。座蒲團をかさねうちしき。池田ずみのおこりし。  
 火鉢をかゝへながら。何角のさしづをしてゐたるところへ。丹松はやほうこうなれて。おとな  
 しくおかちの前に。両手をつきて。おふりかたよりの口上をのべて。その用事は辨じけれども。  
 喜代七よりありさへのふみをも。ふどころの内に。かくし持たるゆへ。折もあらば手わたしせ  
 んど。そのひまをうかひひけるに。ありさ丹松をまねきて。よき所へさいはるのことなりとて。  
 團子三つ四つあたへんとしけるを。おかちおしといめていふやう。すべて子どもは。其身の修



行のため。奉公にいたすなれば。たま／＼宿へきたるとて。さやうにたべものなどをあたへ。あまくちにせば。かへつて丹松の身の爲あしし。此方にてあたへずとも。おふり喜代七が新世帯。取締もあるまじければ。丹松相應に小銭も盗みて。買ひもすべきなれば。ひもじきこともあるまじと。聲をあげて打わらへば。ありさはこつと。たちまち目に涙を浮べて。可愛そふに。この子にかぎり。何とてさやうの。さもしきことをいたしませうぞ。たれしも子どものときは。おぼへのあること。わづかのものにても。どかくたべたがるは。子どものならひ。それゆへあの子のため。あしきとはこゝろつかず。鹿相なことをいたしましたと。きくよりおかち。たちまち。顔色かはりて。さてはそなたが。せつかく丹松に。たべさせやうと志やつたを。わしがいらざる邪魔をしたこゝろは。物臍子どもの。こんじやうぎたなきは。見にくひものゆへ。癖になるからとめましたが。そなたのこゝろでは。大かたわしが。ものおしみしてか。但しは意地わるうでも。いふやうにおもやつたそふな。氣にさはつたら。かんにんしてくだされ。きのどくなことをいひましたと。いひつゝつとたちあがりて。そこにありあふ重筥に。自身團子を。山のごとくもりあげ。丹松のまへに。つきつけ／＼。そなたにこれを。たべさせまいとして。大きに。ありさにまかられました。さあ／＼いくらなりと。その腹のさけるほど。たべさせねば。わしがありさへきのどくなと。いふほど丹松は尻ごみして。わたくしはおなか

よふござります。何もたべたうはござりませぬと。いひつゝありさに顔を見あはせ。なみだをほろりどこぼしながら。なかぬかほするいぢらしさに。姉もたもとをかほにわて。目をすりこすれば。あかち猶腹をたて。わしはこゝろに。隔るとはなけれども。どかくそなたをゆ兄弟は。まゝ子根性とやらで。わしが何ぞといふと。泣て見せるが。何がそのやうに。かなまうてなきやるぞ。丹松もおなじやうになかずとも。その團子たべやらぬか。さあ／＼くはぬか。なせくやらぬと。かさにかゝつていふにぞ。丹松目をすり／＼。わたしはたべたうはござりませぬ。つかひがおそふなります。もふさんじませうと。立てゆかんとするを。あかちとらへひきもどし。くはせまいといへば。なきづらする。またくへといふと。すねて意地ばりだてする。つらのにくさ。わしも又斯いひかゝつたからは。いやといやるほど。くはせねばおきませぬ。さあ／＼。はやうくらつて行あるふと。いひさまだんごをひとつかみ。丹松のくちへ。ぬちこみ。あしこみするを。たん松兩手におさへて。御ゆるされて下さりませ。姉さまどふぞ。わびこととして。あれ／＼どなきわめくを。みるにたへかね。ありさはかけより。母をいろ／＼なだむれども。もどより。ありさへあたりての折檻なれば。なをも氣づよく。きかざるを。女ども立かゝり。どもにあつかふ折柄。番頭段兵衛來かゝり。此躰を見るより。丹松を志かりて。そのほう用事さへ濟たらば。早／＼かへればよきことを。ながみせしゆへのこと。ひきわくれ



ばあかちいふ。なさぬ中とてわしをあなどり。くちのすぎるつらのにくさに。了簡せぬ所なれど。ばんどうどのいさつゆへ。こらへてやるぞと。ありさを尻目に白眼まはせば。丹松は志やくり上つ。なくく出てゆくうしろ影。見やりありさがかなしさ。ながるゝなみだをどどめかね。おのが部屋へと泣に行。心ぞおもひやられける

第六回

借また喜代七のかたには。新宅の見世をひらきしより。無人にていそがしく。あふりもともに。家内のとよろづにひまなく。せはしき中にも。こころの樂み。おもふまゝにぞくらしける。元來喜代七は。ありさの手前あれば。あふりとかゝるかたらしは。こころにさまぬことながら。科ある身を。まねがるゝばかりかは。兩親のなげきをも。やすむるとゆへ。せんかたなく。夫婦となりて。かくの仕儀におよびたれど。心中には。ありさのこと不便まさりて。わすれがた。く。ありくの訪音信も。すこしはこゝろゆかしごと。丹松をなかだちとまて。文のとりやりすること。敢て人目にもたゞりしが伏す事は露るゝならひ。あふりいかししてや。このときいだしたるが。かねてより。喜代七ありさのわけありしと。何ものかつげて。あふりこゝろに。むやくしくおもひしところ。今また。たがひのおどづれ。かはらざることをきくより。

たちまち疑念おこり。あるとき。きよ七外へいでたる跡にて。あふり丹松をおくの間へよびよせて申けるは。そなたに。ちと尋ねるとあるが。ありていつゝまづして。いやればよし。もしました。かくしだてしやると。わしも了簡があるほどに。まつすぐにいやるがよいといふは。外でもなし。きよ七どのから。そなたのあねの。ありさどのへやるふみを。そなたが使するといふと。どふからわしはまつてゐるが。そなたはまだ子どもの事。何のわきまへもなきとゆへ。まかりはせぬが。いよくそふか。それがきいたいと。詞やはらかに。裏問かくれば。丹松はつと思ひながらさあらぬ顔して。いつこうさやうのことは。夢にもまらずと申けるゆへ。あふりはこれを。おどしつすかしつ。さまざまに政問ども。とかく陳じていはざりければ。元來あふりも。母あかちの性質にかはらず。偏執嫉妬のこゝろふかく。邪見の相をあらはし。忽ことばあらくしくいふやうは。そなた。子どもと用捨して。ことばあまくいへば。よいこと。あもひまらぬとはよそしや。此上ありやうにいはずは。まかたありと。とびつきて。丹松の兩の顯を。おもふさまつめりあげて。まだありていはいはぬか。これでもいはいはぬか。くどなさけなくも。ちからにまかせて。捻切ばかりに。ひねりあげられ。丹松兩眼より。ほろりくど玉のなみだをながし。兩手をあげて。のふいたや。かんんにして下さりませ。ゆるしてたべと。聲をあげてなきさけば。人やきくとあふり。袂に丹松のくちにあて。顔も手あし



も。むらさきいろに。はれあがるほど。ひねりつたゝきつ。せめさいなまれて。丹松は只ひひ  
 くど。なきくるしむ所に。喜代七外よりたちかへり。このありさまを見て仰天し。おふりを  
 ひきのけ。たん松をおしかこひ。これは尋常の奉公人にあらず。そなたとは義理ある兄弟。何  
 ほどの仕落ありて。此せつかんはど。せきごゝろになりていへば。おふりいふ今までわたしは。  
 志らずがほしていひませぬが。本家の娘御ありさとのど。わけあるよし。この丹松が。多の使  
 するとのこと。それがにくさに此まだら。此うへはあれにはかまはぬ。おまへにうらみはいひ  
 ますど。愠氣の角のあらはれて。なみだにかきくれ。喜代七にすがりつき。うらみなげくを。  
 きよ七いろくんに説きかせ。だますに手なしと。なだめすかして。とかく丹松の身に。にくし  
 みのかゝらぬやうにと。取繕ひて。やうくどおふりを。さとしなだめけるが。丹松は藤浪屋  
 にて。後家おかちの非道といひ。今またおふりが情なき振舞。かれこれと思ひまはして。かな  
 しさつらさやるかたなく。ひとり去くく。只泣くらすばかりなり。去ほどに。おふりはこれ  
 よりして。志きりに丹松をにくみ。何ごにもあたりあしきを。喜代七ふびんさに。取なし  
 へば猶の事。最負するは曲事と。愠氣いさかひの度毎に。丹松も傍杖のあたられぬとはなかりけ  
 る

## 第七回

唐土の朱太后。我朝の高野の姫。みな淫奔の情深きによりて。不詢の道に。やごどなき御身す  
 ら。御心亂れ給ふましてや鄙俗の女の身は。ことに甚だしく。ふちなみやの後家おかちは。段  
 兵衛に姦通してより。志きりにおぼれて。實の夫婦のごどくなりけるゆへ。全家みな段兵衛に  
 媚ければ。おのづから慥慢にして。我意につのり。榮花にほこりて。ありふしはまたしても。  
 おりさへ蹴れけるにぞ。おかち今は。これを愠氣して。いよくありさを。遠ざけんとおもひ  
 けるに。幸ひ。懇望の所ありて。嫁にほしきよし。いひ入れきたりければ。おかちよろこびて。  
 ろくくさきのよしあしをも乱さず。承引して早速に相談をとりきはめ。すでに結納の來ると  
 きにいたりて。おりさへかくといひきかせけるに。おりさ此ほどより。うすく志りたれども。  
 早急のともあるまじと。おもひいたるところに今はや。志るしも來りて。事定りければ。  
 心中大きにおどろき。母の我意なるをうらみ。とても外へ縁につくべき心なけれど。いなまば  
 また。いかなる憂目にやあはん。所詮するたのみなき身の。何面目にながらへんど。覺悟をき  
 はめて。喜代七への書置をまため懐中しその夜亥の刻すぐるころ。ひそかにうら道より。志  
 のび出。七里の濱のかたへと。こゝろざしけるが。去にてもいちらしきは弟なり。われ志した



りときかば。いかほどかちからをおとして。なげかんとも不便なり。せめてなごりに。ひと目あひて。うらみぬやう得心させて。志ぬるに志かじと。桐が谷の喜代七が家居のかたへ。たどり行つ。そこ爰と。さまよひゐたりし所に。兄弟の縁盡す。たがひにおもふ念慮のつうじけん。丹松いづかたへか使にゆきて戻りがけ。夜分のとなれば。下男の三助と打つれて。通りがりに。ありさと顔を。見あはせければ。丹松。下男をばさきに内へいれて。其身かどさきに残り。ありさにむかひて。今頃何として。此所へはきたり給ふぞ。きづかはしといふに。ありさはとや。涙さきだちて。何のいらへも出ざりけるが。やうく胸撫おろして。聲をひそめ。母の計ひにて。にはかに外へ。縁談のきはまりしとをかたり。迎も心にそまぬ事。いなむどもゆるすまじければ。志ぬるにかくごきはめしゆへ。いとまごひにきたれりど。いひもあはず。むせかへれば。弟もなみだ聲にて。いつぞやあまへの死のふと。いは志やれたときは。どめましたが。もふこんどはどめはしませぬ。其かはり。わしもいつ志よに志にたい。旦那さまから。あまへの所へやるもの。つかひをわしがまたとて。あふりさまのはらだち。それはそれは。わしをどらへて。つめつたりたゝいたり。顔も手あしも。はれあがつて。いたいのほこらへも志ませうが。またも此後。どのやうなめにあをふかど。それがかなしい。いつそのこと。わしも志にたい。あねさまいつ志よに。ころして下さりませと。とりすがりなきいだせば。あ

りさもむねはいつばいに。はりさくばかりのおもひにて。何の因果にこのやうに。兄弟苦勞をすることか。それといふも。とさまの。おほせをそむかず。嫁入すれば。浪風たゝぬとなれども。嫌ふはわしも我儘ゆへ。それで志ぬるはこの身の覺悟。そなたは何の科もなき。身をすてんとは何事ぞ。喜代七さまへのかきおきに。そなたのとをくれぐれも。まためつてもつてきたれば。これをあなたへあげさへすれば。そなたの身は。きよ七さまが。如在にはして下さらぬほどに。そなたはあとにならへて。姉のあとをどふてくれるが。わたしへの孝行。とさまおはてなさるとき。くれぐれの御遺言に。眞身といふは。ふたりの兄弟。かならず中よく。そちは姉のことゆへ年もおほし。弟のことをたのむぞと。おつ志やつたともあり。殊にそなたは利發にて。おとな志う成人したもの。親達がござつたなら。さぞやおよろこびなさろうと。それをおもへばあねの身で。そなたの志ぬるをどめもせず。いつ志よに志んでとはとさまへ。わたしがどふも。いひわけがないほどに。そなたはどてころされぬと。いへばたん松。それはわしもおなじこと。あまへばかりをころしては。いひわけがない。兄弟は志ぬるども。いきるども。いつ志よでなければ。わしはいや。あまへにわかれてわしばかり。苦勞せうより。はやう志んで。極樂とやらにござる。とさまにあひたいと。いかないきるところはなく。あもひ入たる風情に。ありさも今は詮方なく。とはいふものゝそなたひとり。あとにのこりて。此



うへの憂目を見するもいぢらしし。さあらばたがひに手をひきて兄弟いつまよに死出のやま。三途の川をわたらんとて。兼てまたいめもちし。喜代七へのかきおきを。新宅の戸のすきまより。うちへなげ入れ。いつさんに。兄弟手に手をひき合て。こゝろもそらに。はしりつまづきやうくど。濱邊にいたり見わたせば。頃は如月廿日あまり。夜は子ひとつの空くらく。風はげしくして。名におふ七里のはまの。渺々ともものすき浪のおとに。今を最期とかくごせし身にも。さすがに氣おくれして。そのおそろしさ。見るに心も消るばかり。この逆まくなみの底に。身をまづめんとの便なやと。おもへば。いとやかなしさも。まさるにつけて。姉はなを。其身はおもはず。弟の生長ある身をいたづらに。海の水屑となすことを。歎ばまた弟は。姉をおもひて生躰なく。ふたり手に手をとりかはし。なみだにくれてふしまづむ。其とき一人。此ところを打通るものあり。兄弟おどろきて是を見れば。旅の僧とおぼしきが。風呂敷づゝみを脊負來かゝり。挑灯のあかりに。兩人をすかし見ていふやう。かゝる夜陰に及び。少年の人々此所には。何ゆへにゐたまふぞ。とに愁傷の躰心得ず。子細をつゝまず。かたられよといふに。ありさ涙をはらひてこたへけるは。われくは兄弟なるが。繼母のにくしみつよく。身をおくべき所なきまゝ。この海中にまづみはてんと。かくごをともにし。此所に來るなれば。あはれ御出家の御芳志に。あどとひてたまはるべしと。委細をきいて旅僧あはれをもよほし。さても

いたはしきとなり。去ながら生はかたく死はやすし。いまだ替の花にひとしき人く。志なんとは短慮なるべし。我今祥るに。此所を通りかゝりま見へしも。我をしておのくを助よとある。佛の導なるべし。愚僧は是より。一里あまりをへだてし。はなれ山といふ里に。すむものなり。ともかくもわが庵へともなひ。事のやうをもききたるうへ。仕やうぞあらんと。それよりさまく説きと。ひたすらに死をといめんと。詞をつくせど。兄弟さらに聞かれざるを。此僧情あるものにて。見捨がたく。いろくど理をせめていひきかせければ。兄弟も今僧の意にまかせけるゆへ。大きに悦喜して。まことや不期にして。かく各の死をなだめしも。ふかき宿縁のいたすところならんと。兄弟の身の上を。微細にきいて。道すがら介抱しつゝ。はなれ山へと誘引しける

第八回

罪もなき。人をうけへは忘草。おのがうへにぞおふといふなる。といふ歌のこゝろは。科なき人を咒咀ば。かへりてその身に。およぶべきといふことにて。よく後家あかちが身にあたれり。ありさ既に入水して。はつべきにかくごして。そのよしをかきおきにまたいめ。喜代七の見世へなげこみしを。程過て見せのもの見つけて。拾ひあげ見れば。喜代七の名當なるゆへ。かく



つぐるに。喜代七とりあげて。ひらき見れば。ありさの筆にて。うらみのかずくを。また、めたるかきおきにて。こよひ。身をなぐるどの文言におどろき。丹松をたづねるに。下男三助のいへるは。さきにかどさきにて。十六七ばかりなるむすめと。咄してゐたるが。それよりは見かけずといふに。いぶかしく。家内をさがせどおらざりければ。さては姉と打つれて。どもに海底の水屑となりしかさてもまなしたり。不便のものとなりゆきやと。喜代七天を仰向て。悲歎のなみだにくれつゝも。人をはせて七里の濱より。そこ爰と。たづねさがさしむるにまれば。あくる日も喜代七みづから。そのあとをたづねるに。何の影響もなく。道にて人のいへるは。夜前子の刻すぎとおぼしき頃。男女ふたりの少年。七里の濱のかたへ。いそがはしげにゆきしを見たるものありとの噂に。さてこそいよく身を投。まゝたるに相違なしと。宿にかへりて。おふりにもかくと語るに。日頃は妬しとおもひしも。よになき身となりしときけば。さすがに母の強悪ほどには。なきおふりなれば。今さらおどろかれて。なみだを催し。藤浪やかたへも。かくと委細を申つかはしけるに。おかちかたにても。昨夜より。ありさの見へざるを。たづねさがす所。是をきいて。こゝろにはさほどまでにはおもはねども。おかち世間の手前もあれば。わざと愁傷の躰をなし。それよりありさの家出せし日を。命日として。佛に供養し。僧に布施して。よの人口をふさぎけるが。よく思ふに。過さりし丹六の命終の日と。あり

さ家出せし日と。同日なりければさてこそ。父の忌日をまちて。身をすてしものならんと。おりさは。まゝたるものにおもひさだめて。當日より三七日にあたりける日。佛事をいとなみ殊勝げに勤て。猶も其日ばんと段兵衛と。打つれて旦寺に参詣しけるが。おかち菩提寺は。おなれ山の白雲寺といふにて。終日寺にて僧にたのみ。讀經供養し。夜にいたり下男に提灯をてらさせ。おかち段兵衛とも。精進酒にほろ酔きげんとなりて。手をひき合ふ。戯れながら寺を立出けるが。道にて十六七なるむすめの。黒髪をふりみだし。見すばらしげなる躰にて。行に行合たり。おかち何心なく。そのむすめを見れば。ありさなるゆへ。はつとおどろきて。そなたはと聲をかくれば。母さまかといふこへに。きやつといふて仰向さまに倒れけるとき。段兵衛もおなじく。ありさを見てびつくりし。悶絶しければ。下男三助はそのまゝ。あとをも見ずして逃出せり。ありささきに七里のはまにて。命をすてんとまたりしを。僧にたすけられて。死をどいまりけるが。此僧はおなれ山のものにて。ありさ兄弟をいざなひかへり。所をきて。藤浪やかたへおくり行んといふに。ありさ兄弟は。とても家出せしこそさいはる。ふたゝび家にはかへらじといふに。僧も段々の次第をきいて。きのどくにおもひ。さあらばまづ。ともかくも。おのが庵室にさしおきけるを。ありさ晝は人目あればと。夜に入調ものに出たるが。はからずもおかち段兵衛にあひ。詞をかけられしにわれもはつとおもひしが。さきのふ



たりは。志したるもの、亡靈かど。肝をつぶし氣絶して。打倒れたるなれば。ありさもうろたへて。早きはしりて。庵室に立かへりし跡には。まばらくありて。ふたりとも心つきたるが。あかち倒れさま。足をひきくじきて。との外痛み足たえず。段兵衛もこしの骨を。またゝかに打て。たえがたしと惱む。此とき藤浪やのかたには。下男はしり歸り。ありさの幽靈にあひたるゆへ。思はずさきへはしりて。跡はまらずと申けるにぞ。家内の者共俄にさはぎ立。大ぜいひきつれて。向ひに出たるに。あかち段兵衛は。一足も歩行かなはず。手をとり合てはよろばひ立などしてゐたる所へ。むかひのもの來りけるゆへ。めいゝたすけられて。やうゝ家に加へりけるが。ふたりとも打身の痛楚たえがたく。まばらく惱みくるしみける。あかち心に覺あれば。ありさ死後。怨をのこし。顯れたるならん。おもひて恐れおどろき。ふし倒れ。氣絶せしは。心の鬼の。おのれをせむるとは。これをやいふなるべし。

風聲 所縁の藤浪初編下冊終

風聲 所縁の藤浪後編序

風聲 所縁の藤浪後編序  
 鴻鵠海河をいとひて小き澤にうつれば。涼畢の愁あり。龍鼉深淵をきらひて。淺き渚に出れば。釣射の愁あり。讒を避てこゝろ安ければ食を素るの愁あり。此書兄弟の年弱きか草居露宿の艱難。傳聞奥州岩城の領主。判官正氏の二子。安壽津志王丸。農家の奴婢におちて。日毎に菟牧の勉その苦辛にひとしく。姉は弟の爲に歎弟は姉に逼て哭す。是偏に讒言滅家の薄命なること。精くは前編に著すが如し。今書房の需るに任せ。復びこれを嗣て。慢に緒の言葉を。嚴ることしかり。

安政六ひつじの初春

二世 十返舎一九誌





卷 中 標 目

- 第一 うらみの念
- 第二 おもひの癢
- 第三 ひどりの難
- 第四 二度の縁
- 第五 旅の情
- 第六 むかしの戀
- 第七 夢のちぎり
- 第八 ねたみの報ひ

風聲 所縁の藤浪後編上册

十返舎一九著

第一回

行路難は山にあらざ川に非ず。人間反覆のうちにありと。佛經にいへるが如く。生涯苦の止まらば。人の憂世のならひにて。前世の禍福輪廻のことはり。遁るべきにあらざれば。只善を修し。悪をこらすの勉こそ肝要なれさても。かまくらの郷。雪の下の藤浪屋後家おかぢは。伎師邪辟の質なるうへ。淫奔にして手代段兵衛といへるに密通し。家跡を押領して先妻の子ふたりを疎み。追いだせしに。此子ども入水し果たりしときして。すこしも愁へず。おもてむき名聞ばかりの追善供養し。菩提寺よりのかへるさ。おもはずそのおりさにあひて仰天し。性氣をうしなひしも。原より身を投ふたるものと。おもひつめての上なれば。亡靈とのみこころえし。心の鬼のおれをせむるたどへにひとしく。それよりは朝暮ありさの面影目に遮り。夢に見うつゝにわすれず。はなれ山にて怪我せし足の惱。今もつて心よからず。段兵衛も腰の骨を打くぢきしが。次第に痛楚おもりて。針藥のまゐるしも見えず。晝夜困臥し惱けるにぞ。召仕の男女



どもは。これひとへに。おりさ兄弟の怨恨ならんと。唇をひるがへさぬはなかりける。それのみならず桐が谷の青原屋喜代七が妻おふりも。假初の病に打臥しけるが。瘡のごとく惡寒發熱のくるしみあるかとおもへば。また醒てつねのごとく。されども食事すまされば容おとろへ顔色青ざめ。おりくは熱に犯され。さまぐの空言をいひのしり。何とやらあやしげに見えけるゆへ。剛寂院といふ修験者を請じ。加持祈禱をなしけるに。この法印常に鎌倉中を徘徊し。藤浪屋の後家の邪淫なること。おりさ兄弟の始末。病人おふりの事どもかねてくはしく聞きしとなれば。此病症人の怨恨のなす業なりといふに。人みなそこそあらんと。思ふほどとなれば。ましておふり胸にあたりて。さてはとおもふ心より。ひとすじにありさ死靈の祟ならんと。おそれおもふは。となれ山にておかち段兵衛。その靈にあひしといふに符合し。おりさは今よになきものとのみ。思ふがゆへの迷ひにて。後には病苦のたびうはことじまで。あな堪がたやゆるしてたべ。おりさどの、我をせむるはとて。癡狂のごとくくるひまはり。泣叫ぶを介抱のものども。とりまづめんとするに。ちからつよく手に及ばず。このほどは夜伽にも。究竟の男どもばかりぞつきそひける。此こと雪の下のおかちきくより。その身の足痛は打わすれて。おふりの重病をふびんのあまり。醫療の沙汰は勿論祈誓かけぬ神も佛もなく。案じわびつゝ或夜駕に打乗青原屋にきたり。おふりの枕元にそひて病跡を見るところに。稍更わたりて

子の刻過んどおもふ頃大雨降いで風はげしく。窓うつをどすさまじく。ものすごきをりから。ふしたるおふりつとはね起て。おかちの顔を白眼つめていふやう。うらめしや人われにつらければ。われまた人につらしといふこと。おぼへよや今におもひまらすべきぞと。齒をかみて罵る聲の恐しくおかちの耳をつきぬくばかり。おふり髪には油氣たへておどろのごとくふり亂し。眼ひかり鐵漿はげて。まろき齒をむきだし。つかみつかんずいきほひのすさまじさにおかちおもはず。わつとばかりに。倒れふして性体なくまばしのほど息もいせず。恐れしむたるが。やうくど心つけども胸どいろきて。そうく其座を退きいでたるが。夫よりして何となくまきりに氣色あしければ。其儘駕に打のり。雪の下へ逃かへりぬ。元來おかち身におぼえあるとゆへ。心中大きにおそれ。わするゝ隙なく。そのあくる夜の夢に。おりさきたりておかちの枕もとによりそひ。さめくど泣いたる跡に。おかちぞつとし夜着打被きけるが。まきりにうめく聲。人の志め殺るゝごくなるに。女ども次の間より起たち。はしりいりていただきおこし。こはいかなる夢をや見たまひけん。けしからずおそはれ給ふといふに。おかち目さめ。たゞきよろくど。あたりを見まはすばかりにて。まばらくものもいはれす。全身打ふるひ冷汗絞るがごどく。大息をつきて。さてもくおそろしきゆめを。見しとよばかりいひさして。うちふしけるが。その翌朝おふりつゝに養生とわかず。病死せしと。桐が谷よりまらせきたるに



どろき。其愁傷かぎりなく。なみだながらに段兵衛にいひつけ。葬送萬事喜代七と相談し。よ  
 きにはからふべしと。青原屋へさし遣はし。其身は只部屋にのみひきこもり。ふしまづみなき  
 あかしけるが。それよりして猶ありさの怨恨をおそれ。朝暮佛前にむかひて稱名をとなへ念佛  
 おこたらず。心中におもひけるは。ありさの怨念。すでにおふりをとり殺せり。此うへは我身  
 にもちよぶべしと。これまでありさ兄弟へつらくあたりしと。いも夜前の夢かれこれをおもひあ  
 はせあまりのおそろしさに。此上はとて朝夕の看經懈怠せず。命おしさに後生ごころつきて。  
 俄に僧を請じ。佛に誓ひ。心中に懺悔し。猶もこころすまずやありけん。菩提所の住持に乞ひ  
 て。剃髪し尼となりけるにぞ。それよりしては段兵衛との中も疎くなりゆき。つゝしみてとり  
 あへざれば。段兵衛そのうちば。召仕の女。くまといへるに密通し。志のびねの度かさなり。  
 終に懷妊させけるが。此くまは赤がしらの權兵衛といふ夫をもちたるものにて。權兵衛元來名  
 にふれし悪者。身持あしく身上もちかね。夫婦相談のうへ。くまを藤浪屋かたへ奉公にいだし。  
 其内權兵衛は他國かせぎにひきわかれ。出行たるが。此節立かへりて。くま段兵衛と不義のう  
 へ懷胎せしとききて。よきこと出来せりと。心中によるこび。やがてふちなみやの見せにきた  
 り。段兵衛をよびいだし。密夫なりと罵りわめき詞あらくいひあらそふうち。はや段兵衛を踏  
 倒し。さんくうてうちやくせしうへ。表沙汰にせんとゆすりかけられ。段兵衛せひなく人をた

のみて。さまく説たるうへ金子多分をもつて。やうく扱ひ濟したれども。それよりしては  
 家内の手前世間のきこへあしくやおもひけん。いまだ腰の悩み。まつたく愈ざるにもかまはず。  
 金子少とを盗いだして。いづちへか逐天しける。邪曲のむくひ。ゆくすゑもおぼつかなしと。  
 これを見聞人のわらひぐさぞなりける。寔や己の罪。おのれを攻るといふにひとしく。後家  
 おかちも。いまだ存生のありさを。死たるもののみおもひこみて。おふりの病死よりこのか  
 た。我身に其むくひのきたらんことを。まきりにあやぶみ。われどわが身を攻るころの鬼の  
 角をれて。佛の道に入る尼となり。命おしさに後生沙汰は。徒然草にいふ。連歌師の何阿彌。  
 おのれの飼あける犬に飛つかれて。猫股とおもひ狼狽川にをちいりうせたりしは。つねに猫ま  
 たは。人をとるものといふことをきいて。おそれあやぶみしゆへとかや。おかちもころにそ  
 のおぼへあれば。みづからもとめし顛倒とやいふべきなり

## 第二一回

男女の情も。ひとへにあひ見るをのみいふものかは。あはでやみにしうさをおもひ。あたなる  
 契りをかこち。長き夜をひとりあかし。遠き雲をともひやり。淺茅が宿にむかしを志のぶこ  
 そ。色このむとはいはれど。兼好法師は書たれども。それはあふことのある身なればこそ。う



きを志のぶも。うれしさをまつ便なれば。さもあらめ。それにひきかへ。藤浪屋のむすめありさはこがれたたひし喜代七を。おふりにねとられ。所詮なき身とかくごせしも。はからざる人のたすけに。おしからぬ命をながらへ。兄弟どもにはなれ山の庵室にありけるが。おりさほどかく。あぢきなきよをうらみ。生がひもなき命と思へど。弟丹松のふ便さやるかたなくもしやわが身よをさりなば。さぞやなげかんと。それのみかなしく。さればとて兄弟諸ども。志なるともなを便なしとおもひわびつゝ。うかくとそこに月日を送りけるが。おもひなをして。また祥のの時節もあらんと。丹松に相談し。ともかくもいつまでこゝに。かくてあらんも心なしとて。東海道戸塚の宿はづれに。傳手を求めて。人のすみあらせし。破家のありしをかり請兄弟それへひきうつり。丹松日ごとに往來にいで。旅人の荷物柳ごふり。ふるしきづゝみやらの。かるきものを荷ひ負て。すこしづゝの賃錢をとり。それにて漸くその日〱をすぎくらしけるが。おりさはつる辛苦のうへ。何となく。心地すくれず打臥けるが。癩さしおこり胸くるしく。食事すゝまざれば。次第につかれて。此四五日はさしこみつよく。惱みけるゆへ。丹松かなしく泪かた手に介抱あろかはなければども。貯なきくらしの一日片時も家業おこたりはかなはずと。朝とくおき出粥などをたき。姉にすゝめ。藥を煎じあたへて後。あやしげなる火桶やうのものに。炭をいけこみ藥の土瓶をかけて。病人のまくらもとちかくさしよせおき。其

外食物杯もありさねながら煮たきし。くふやうに支度し。あてがひおき。近隣のものにたのみおきて。其身は家業にいでゆき。往來にたちて。少しの荷物自たる旅人を見かけては。姉ははごくむ志か〱のよしをかたり。何とそ合力のため。荷物をもたせ。少分の賃錢をあたへ給へど。歎きかけけるに。丹松當年十三歳。育もいやしからず見ゆるゆへ。心なきものまでもふびんにおもひ。荷もつを負せて。相當の價の外に。心づけしとらする者もあればそれにて日ごとのけふりはたつれど。その後は姉の病症。かくべつ惱みつよき日は。打捨ても出行がたく。家業をやすみ。介抱することゆへ。飯米を買ふ價のなき日もあれど。そのこと姉にかたればこゝろづかひして。病中のさはりにもならんかと。子ごゝろにも斟酌して。飯米さしつかへなきていに。あぢむきおき。姉には食事を。いくたびもすゝめあたへながらその身は一日に二食あるひは一食にて志のぶときもあり。平生姉へ對しての行跡。眞實にして稚きものには似合すと。近邊のものども。感賞して奇特におもひ。折〱は食物などわかちあたへ。深切に世話しけるゆへ。その人〱のかたには。すこしづゝの借錢もありて。此ほどは必死と逼迫し。おりさのふく藥飯米の手當も盡果けるに。或日病人の氣色すこしはこゝろよげなるゆへ。丹松よろこび。けは例の家業に出んと志たくしけるが。今曉より雨いたく降つ〱け。風もことにはげしければ。姉のいふやう。わが身病も。いつにかはりて心よければ。けふはそなたと互の憂をも。志み〱



かたりなぐさまんとおもふなり。殊さら此風雨のはげしきに。けふこそは休み給へといふに。丹松かふりを打ふり。姉さまの淋しからんに。われもさはおもへども。けふ出されば夕飯の手當なし。かゝる日和あしきときは賃錢もおほし。雨いとふべきにあらずとて。草鞋をとりひきむすぶうち。大雨志きりに篠を亂せば。丹松おもてのかたを打見やり。さすがに出兼て志ばしのほど。さしうつふきてあたりしが。たちまち涙をほろりとながし。かほに手をあて破簀を打かづき。まほしくとして出ゆきける。ありさまくらをあげて。うしろかげを見おくり。おなじくなみだをおしぬぐひ。かはいや／＼などしはもゆかねもの。この姉ゆへに。さま／＼のうき艱難世がよならこのやうに。雨風のつよきときは。戸端へも出ずいだしもせず我儘いひていろ／＼とねだりごといふ時分なるに。あのみすばらしきやぶれ簀笠志ほれかへりて出ゆきしは。わづかの賃をとらんとて。慾といふいやしい心のつきたるは。くはねばならぬといふことを。わきまへまりしころねのいぢらしさ。あさましさの身のはてやと。弟をおもふ眞身のなみだふたつの袂をまぼるばかり。猶ふりまきる雨のおとに。ありさはいよく丹松をあんじわび。いらざるこの身の。まねべきをまなずして。ながらへあるゆへにこそ。弟の辛苦はこの身のなすわざ。いつそのことこのやまひ。おもれよかし死ぬよかしと。おもふはなんの因果ぞや。おやたちにははやくわかれ。兄弟ともその家にはあらずして。かゝるすまゐのうき世帯。

身のなる果のあさましやと。ひとりうちふしなきかこち。涙のかはく隙ぞなき。姉のおもひは弟も。おなじ辛苦の荷かちもち。日ごとに五百づゝの。賃錢をとりて飯料其外。賣薬の價にかへて。姉をいたはる眞實心。佛神も感應したまひけん。それよりまだいに。ありさの病氣もこゝろよく。だん／＼全快におもひきければ。丹松かぎりなくよろこび。猶も油断なく出精しかせぎけるが。兄弟の實母。ことし十三回の忌に當ければ。なにとぞしてその日は。こゝろばかりの佛事も營まばやと。こゝろがけけるこそ殊勝にもいぢらしし

第三回

まかるに丹松。或日の黄昏。家にかへるとき戸塚驛の松ばらにて。むかふよりきたる旅人。柳行李ひとつを脊負たるが。丹松のなりふりを。まろ／＼とながめて立どまりいふやう。われあしを悩み。かばかりの荷物。せおひがたし。なにとぞ其方。賃錢は望みまだいとらすべきが。この行李ひとつ。四つ谷宿の建場まで持まじきやいかにといふ。丹松きいて。もはやけふは。殊外の遠道して。身軀もくたびれたればまいりがたし。其上かへりは。夜にいらりて難儀なりと。ことばりいへば。かの旅人かさねていふ。いやとよ夜中戻るを迷惑にあもは。賃錢のほかは。そのほうの旅籠錢をもつかはし。わゝ宿にといめて。明朝勝手にかへすべし。ひとりたびの我



なれば夜に入てかゝる街道。宿なしの雲助に。荷物をもたせもし逃られなば。われ足をいためて追かかるとなりがたし。さるによりて幼年のそのほう。其心づかひなきゆへたのみたしといふに。丹松ふと心中にもふやう。明後日はすでに實母の年回なり。その儲萬端過分の錢まうけずしてはなりがたしこの旅人賃錢望にまかせんどのことなれば。是祥のすることなりと。こゝろにうなづきて申けるは。品によりまいるべきが。賃錢はいかほど下さるべきや。價次第なりといへば。旅人うちわらひて。この意味が慾ばりこそおかしけれ。さあれば旅籠どもに。五百文とらすべし。それにてやとばれきたるべきやといふ。丹松よろこび。さらば仰にまかすべしとて。それに究め。旅人をまたせおき。宿はづれの家にゐる人をたのみ。姉のかたへかくと傳し。さつそくはしりいたりて。その旅人の荷物をせおひ。跡につきてゆくほどにその夜の戌の刻ごろ。藤澤の驛を打過よつやのたて場にぞつきたりける。此所の柄久保やといへるにたち入。約束なれば丹松もどもに。旅人と等しく止宿せしことなれば。このごろたえて目にもふれざる。坪平つきたる本膳にすはり。さすがはいまだ子供心のそらうれしく。おもひのまゝに腹をふくらし。そのうへわがやどにては。うすきやぶれふとんの。ちいさきとうちかふりねしもの。今宵は夜具のあたゝかなるに。寐心よく。賃錢はおもひのまゝに受取。くたびれはしつ。さるこゝちよげに。ぬるとはや高尉かきて。前後も志らず熟睡しけるがその夜わけがたちかく

なりたるころ奥座敷のかた俄にさはぎたち勝手よりも人の行ちがふあしと喧く騒動するに。丹松ふと目をさまし。何事やらんとまくらをあげて見れば同宿の旅人寐所に見へず。こはいづかたへかゆきしやらんと。思ふどころに宿のあるじさきにたちて。四五人の旅客。丹松のふしたるざしきへ。つか／＼とはいり。聲あらかに申けるは。そのほう同宿の男はいづかたへ行しぞ。たどへ逃隠れたりとも。汝を人質なれば。一寸も動さじといひつゝ。宿のあるじ。今まで丹松とならび臥みたりし。旅人の明床をさぐり撫て。さればこそこの夜具の内。はやあたゝまりうせて。冷つめたきは。こゝにふしたる男。起いで、餘程のあいだ。とくにこのところを逃去しとおぼゆれば。盜賊には相違なし。まづこの小悴めを。ひきくゝれといふほどこそあれ。丹松をとつてふみすへ。細引をもつて。高手小手にいましめける。丹松はおもひがけなく仰天し。何ゆへにわしを。このていはいと。おろ／＼なみだにいふをもまたず。主いふやうさればこそ。其ほうと同道の旅人宵の程より。何とやらあやしきやつと。おもひしにたがはず。おくさしきにとまりたまひし。この旅人がたの路用金二十兩紛失せしは察する所汝と同道の男が仕業。こゝに居ざることたしかな證據。盗みとりて逐天せしにうたがひなし。このうへは逃さりし盜賊の國どころ。名は何といふものぞ。つゝまづ委細を申べしと。丹松を打たゝき。志めあげ／＼糾問するにぞ。もとより何も志らざる災難。丹松涙の玉をなしつゝ。其身の住所身の



うへを。なく／＼かたりて。かの旅人にやとはれきたりし始末をくはしく。いひわけれどもいかな／＼きいれず。備やとはれきたりしならば。すぐに戸塚へかへるべきを。同宿せしはこゝろえず。いひつゝ丹松のせぢひきたりし。かの旅人の柳ざり。そこにうちすてあるを見つけて。盗賊めがわすれおきし。行李のうちあらため見よとて。綱ひきほゞき。こりのふたひきあけ見れば。石瓦を油紙につゝみて入れ置その外はやぶれ繻袴に古ふんどし。むだがきしたる手帳一冊。ひやうしにはあらぬ名どころ筆太に戯れがきせしにて。詮義の手が／＼。證據ともなるべきものひとつも見えず。此上はとて丹松を。いましめたるまゝ庭さきへつれゆき柱にのぎて番人をつけおき。この事其どころの頭役へうつたへ。丹松戸塚の者のよし。その眞偽をも糺すべしとて。俄に人をやとひ。さしつかはしけるにぞ其うち丹松は不期にしてかゝる無實の難にあひ兩眼をなきはらし。聲をあげて狂氣のごとくぞなげきける。さるほどにこの丹松を。やとひ來たりし旅人は。道中にて異名を。護摩の灰といふものにて。このおくどしきにどまりし旅人。多分の金子を所持せりと見請。この家へ止宿するを。いかゞしてやまたりけん。おのれも同宿して。人まれず奪ひとらんと。さてこそ丹松をたばかり。賃錢過分をあたへんと約束し。つれきたり同道のものを見せかけ。此宿へどまりしなり。よきはたごやにては。ひとり旅をとめざるゆへの謀計にてふたりづれと見せたるなり。夜陰人／＼の寐まづまりたる

ときをかながへ。おくどしきへまのびいり。きんすの所在をさがしゑて。ぬすみどりにげさりしなれば。あどに残りし。丹松ひとりの難儀となり。悲しき中にも。このこと姉へきこえなば。やうすはまらず。とぞやなげきかなしみたまはん。あさましやなさげなやと。泪のかぎりなきさげび。身はつながれて自由ならず。こゝろをもがくばかりなり。まかるに此事當宿より。戸塚へ申つかはしければ。早速姉ありさに宿老をはしめ。近隣のものどもつきそひ。いそぎ四つ家の枋久保屋かたにはせつき。まづ丹松にあひて。このやうをもきかんとて。いひ入れたのめども。とかくしてあはせず。奥どしきの旅人は。残らず逗留して。このとまきりにおもてざたどなさんと。せきたつやうす。ありさほもとより。おもひまうけぬ丹松の難儀ときゝて。あるにもあられずとほうにくれて。なくより外のことなければ。つきそひきたりし近隣のものども。きのどくにおもひ。主人によりて始終のやうすをたづねき。大きにおどろき。斯とありさにかたり。此事おもてざたどなるときは。たどへ丹松罪なきにもせよ。其盗賊と同宿せしゆへ。うたがひか／＼りて。一旦は入牢すべし。左あるときはそのくるしみ。年弱きもの。そだちもあら／＼しからねば。わづらひて命のほゞも。危からんとおしはかられて不便なり。いくゑにも証言し。内濟すへしとものども。懇にいひ合せ。宿のあるじへいひ入れ。金子盗れし人／＼へ何分了簡ありて。穩便のさたたのみ入と。いろ／＼かけ合もらへどいつこうに聞入れず。



うばひとりられし金子残らず償ひさしいださば。その罪はゆるすべし。さもなければ。その小忤こそ詮義の手がしり。たどへまらぬことにもせよ。此儘にては濟さじと。理の當然にせんかたなく。かさねて何といふべくもあらねば。ありさいやますかなしさに。泪玉をなしけるが。なげきのうちにおもふやう。丹松これまでわがためには。さまざま艱難し。姉をはごくみし。そのころざしのいちらしさ。もしも入牢し煩ひなどせば。そのくるしみはいかばかり。日頃の深切兄弟の眞身捨がたし。弟の必死の難義見ごろしにもなるまじければ。何ぞぞしてその金子をととのへ。丹松をすくふべしと。思ふころのひとすじに。思案をきはめ。とてもひとたび志なんどまで。覺悟せしこの身のうへ。いかやうのことにて。弟の命をたすくること。たどへわが身をうりてなりとも。手段あらばと近隣のものどもへ。折入てかたりたのめば。皆くどもに涙をこぼし。その心根をさつしやり。何といらへするものもなく銘いちらしとはおもひながら。ありさが達ての望みによりて。其中に佐平治とて。かやうのことに馴れたるおとこうけこみて。すぐに藤澤の宿へかけ合ひ。ありさをめしり奉公のつもりにて。身の代金廿兩との相談きはまりければ。ありさなく。其金子をもつて償ひ。丹松の糺明をたすけしは。まことに不便のころざしきく人なかねはなかりける

風聲 所縁の藤浪後編上冊終

風聲 所縁の藤浪後編中冊

十返舎一九著

第四回

有爲轉變のよの中。人の行衛のさだまらぬ中にも。かゝる微運のせひなくも。ありさは藤澤の驛に身をうりしが。今は化粧坂の舞鶴屋にまかへられ。久松と名をかへてつとめの身。かくまでも憂とのかさなるものかと悲しさを笑顔にかへてのくるしみは。何の因果とあさゆふに。只泣くらしこのほどは。氣色すぐれず形容やせて。氣おもければ。ものいふさへもうとましげに見えけるにぞ。傍輩のうちには金山といふもの。かねてよりこゝろ隔ぬ中なりけるが。或時久松部屋にひとり。打ふしゐたる所へ。金山きたりて。さまざまのうき世ばなしする序に。叫きていふやう。御身此程はわけて顔もちもあし。さだめしこの苦界を悲しみ。身のよるべきなきを。あんじわびてのものおもひならんは。ことばりながら。さやうにくよくよと思ひ給は。むづらひいで。いよ／＼身をくるしめ給はん。とても遁るまじき。罪障ふかき身とあきらめ。只こゝろをうき／＼と。暮給ふが身の爲なり。こなた身のうへも。かやうのつとめすべきはづは



なけれども。十七のとし親のゆるさぬ男とかたらひ。つゝにふたり欠落して。互に若氣の跡さ  
 きまらず。男はやう／＼甘のうへひとつかふたつ。あやたちのあんどなげきをよそになし。ふ  
 たり世帯のおもしろさに。うか／＼と月日をすこしくらすうち。ふとそのおとは病氣つきて。  
 まだいにおもり。終にあへなく死なれしときは。わが身もともにもなれどまで。おもひつめし  
 を。世話する人のといむるにより。おしからぬ命をながらそのうち心あしき人にだまされ。  
 このところへうられしときは。身もよもあられず。かなしさつらさ。おもはぬ人に肌ふるは。  
 身をきらるゝより猶悲しく。志にわかれし男のこと。不斷ころにたえずおもひくらし。日に  
 夜にいくたびか癪をおこし。まねほどつらくおもふうち。傍輩衆の客人に。與物さまといふお  
 かた。過去しわが夫のおもさしすがた。ものごしまで。さてもよふ似た人もあるもの。ふと  
 おもひのたねとなり。それよりその與物さまに心まよひ。ねた間もわすれず。おもひこがれ。  
 今はその相方のまへ義理もかまはず。人目のひまに與物さまへ。ころのたけを打あかし。そ  
 れよりはたび／＼の志のび逢。ひとのきをかね相方の目を志のび。さま／＼の魂膽して。あふ  
 どきのうれしさ。隠すことほどたのしみふかく。これにて死別れし男のこともわすれば。身  
 のうきつとめも苦にならず。癪もあこらず。いまはさや。まだいに苦界の功を経て。そのおも  
 しろさは譬のとをり。たのしみなふてはつとまらぬと。何やらのぢやうるりにあるとをり。御

身とてもそのごとく。はじめのほどは何事も。苦勞になりて。心うごくは無理ならぬと。その  
 やうにくよ／＼と。思はるゝいとしいたはしさに。御身へない／＼にてはなしあり。常夏太  
 夫のお客。喜代七さまといふおかた。男振はよし大家のお人。此あいだちらと御身を見そめら  
 れ。もと念頃たたまひしおかたに。御身生うつしとてこのほかの御執心。わが身とりもちく  
 れよどのおたのみ。常夏太夫へはきのどくなれど。喜代七さまのおいとしさ。御身も悪からず  
 おもひ給はひ。わが身才覺して暗にあはせまいらすべし。かくすことはたのしみなれば。御身  
 も憂をわすれて。補養にもなりぬべし。それといふもわが身におぼへあることゆへ。御身へす  
 いむるも。あしかれとおもふにあらず。うけひき給ふやいかにいふ。久松は喜代七といふ名  
 をきくより。もしやそれかど志たはしく。そのお人はど。面躰恰好をたつねどふに。金山の答  
 ること。みなひし／＼と胸にあたり。そいろにうれしく。なをもさま／＼はなしのうち。青  
 原やといふ家名をきくより。さてこそ相違あらじと。とびたつばかりわが以前契りしことはい  
 はずして。金山の手まへ。ひと／＼をりの浮氣らしげにいらして。只よきにとばかり金山をた  
 のみ。まほれし花に潤ひをえたるがごとく。心中いさみよろこび。俄に髪をとりあげ化粧して。  
 うかれたちしが。さるにても。常夏の中ふかきやいかゞきづかはしと。千のおもひにとつ  
 おひつ。喜代七のきたるをのみ。今や／＼とまぢわびける其頃桐ヶ谷の青原屋喜代七は。あふ



りにわかれてより。ひとり寐の淋しきにつけても。ありさのことわすれやらず。よになきもの  
 ともへば。猶志のばしく。爰にありとも志らずして。ありふしの序には。けはひ坂にきたり。  
 積鬱をもはらしけるが。此ほどはからずも。久松のすがたを遠目に見しに。その容貌ありさに  
 違はず。去にても。ひとたび入水し果たるもの。今あるべきやうなし。さてもよふ似たるも  
 のかなともふより。名を久松と呼よしきして。志きりにこひまたひ。金山かねてこゝろやす  
 ければ。打あけてかくたのみたるにて。今宵そのおとづれを聞んと。このさどにきたり。此頃  
 馴染し常夏太夫のかたへあがりて。金山をもよびよせ。酒くみかはし戯れ遊びみたる折から。  
 久松客をおくりて歸るさ。廊下ぐちより金山に顔を見合せ。何ごゝろなく。常夏さまはお客か  
 へど。ざしきに入て。喜代七を見るより。はつとばかり顔あからみて。おもはずもほろりどこ  
 ぼせし。なみだを袖にかくしつゝ。其儘ついで出ゆくにぞ。喜代七胸といろきふしんはれず。  
 此間も見し顔かたち。いよゝありさに相違なければ心中迷ひて吐息つくに。金山喜代七の袂  
 をひかへ。かねての事首尾なりたり。後にとばかり呟くにぞ。喜代七笑坪に入て。酒も稍たけ  
 なはとなりたるに。女どもかたへに床をのべ。屏風をひき廻し。はやち休みとせきたつにぞ。  
 金山も出ゆけは常夏喜代七の手をとりて。床にいざなふうち。女どもてうしさかづきを取片付  
 て出ゆくあど。喜代七常夏にむかひて。先刻ちよと爰へ覗きし。久松とやらんは。いづかたよ

り。いつごろ此家へは來り勤るぞと。猶尋れば常夏こたへて。久松の身の上弟のためなられ  
 し始末。人のはなせし事ども聞たるまゝを。くはしくかたれば。喜代七皆おぼへあることばか  
 りにて。さてはとおもへど。兎角して胸におちず。外ごどにいひまぎらし。かたりあふうち。  
 禿共はしりきたり。常夏なじみの客きたるよしにて。よびいだし打つれゆくに。すれちがひ金  
 山さし足して。喜代七の耳にくちをよせ。隣座敷のかたへゆびさしてさゝやくにぞ。打うなづ  
 きつゝ起あがり。へだてのふすまおしあくれば。金山の部屋にて。屏風引まはせしうちへおし  
 やられて喜代七ひとと抱きつきたるは。たそと見るに久松なり。たがひになみださきだちて。  
 志ばらくものをもいはざりけるが。喜代七小聲にいふやう。そもおこら兄弟は。七里の濱に  
 身を志づめ。志したるとのみおもひしに。今までかくてあるならば。何とてたよりはせざりし  
 ぞ。其うへいかなるわけありて。かゝるつとめの身となりしといふに。今さらおもてぶせ。は  
 づかしさもうれしさにかはりゆく身のはじめより。ありし事どもくはしくかたり。弟の災難を。  
 すくはんためは是非なくも。その身をうりしあらましを。かたるもなみだきくなみだ。ともに  
 袂を志ぼりけるが。喜代七いふ。さるにても今までは。よになきものと。ひとすじに思ひつめ  
 しこゝろから。此間よりそなたの顔。見るにあやしく。金山をたのみ。戀を志かけしも。その  
 實否を糺さんため。かへすくも。かくながらへありし身の何とて風のおとづれも。せざりし



このうらめしや。去ながら。書置をわがかたへ残し。かくとせし身の志なぬのみか。かゝるつとめの身となりしは。さだめし外にます花の色ぐるひより。その男のためにうられし身なるべきを。丹松ゆへとはそらごとならん。さやうの悪性にてはなかりしに。いつのまにかは。いたづらをしおぼへ。またわれをたぶらかさんとはおそろしや。この躰常夏に見どがめられなば。いたうなき腹さぐられんもうたてしとて。久松をおしのけ立んとするを。あしとめとりすがり涙あふるゝ目をはらひて。そのおうらみはあちらこちら。そなたさまにこそ。かず／＼のうらみあるゆへ。志なんどまで覺悟せし身のはからずも。人にすくはれ。丹松のかはいさあまうて生延しに。それからの難行苦行かなしきうちにもそなたさまのこと。わするゝひまなく。ゆかしさはやま／＼なれども。もしたよりせば。この身の在所を。母うへや段兵衛に志られなば。またどのやうな。憂目にあはんも志れずと思ひ。わざとかくれ志のびしも。弟の不便さ。としはもゆかぬ身ながらも。人にやどはれその賃をとりて。姉をはぐくむころざし。その嬉しさに。此ほどの弟の難儀見すてがたく。それゆへのこのつとめ。さら／＼浮氣悪性より。かくなりしことにはあらず。年頃日ごろ。戀志たひしおかたにめぐりあひながら。うらみをきく身のかなしさを。すいりやうしてたゞひとこと。なまけらしきおことばを。きかしてたべといただきつき。なみだに寔をあらはして。歎きかこては喜代七さすがにも不便いやまし。さてはそふか

どひきよせて。うちどけかたるこしかたの咄はつきず。つきせぬゑんのいどうれしげに。枕ならぶる折から常夏いそがはしく歸りきたり。見れば喜代七床にあらず。隣の部屋に。ひそ／＼と聲するをあやしみ。さしのぞき見れば。喜代七久松のむつまじきていに。常夏くはつとせきたち。愷氣の角の穂にあらはれ。どびかゝり久松を引おこし。そなたやう／＼。このほどよりこゝにきたりしゆへ。勤の意氣はり。諸譯もわきまへまらず他人の客とのいたづら。かんにんならずと。志がみつきて顔かきむしり。髪かみの島田をもふりほどき。聲あら／＼かに罵り打た／＼にぞ。久松はおもひがけなく。ゆるしてたべとばかりにて。なげきわぶるもきかばこそ。はらたちまされ。つかみちらすを喜代七ひきわけて。さま／＼に。おしなだむるほど聲たかく。この物音に遣手若るものども。おひ／＼來りて。委細を聞より。久松を無躰に引ばり。さやうの悪性あくしやういせ己後の見せしめ。志かたありとて。大せいよりて久松を引たてゆく。このこと親かたへきこえて。久松きびしきせつかんにあひ。此どころへきたりて間もなきに。さやうの不埒ふち志いたす女。かゝ／＼おくも氣づかひなりとて。親かたいきどふり。このところより。またいづかたへやら賣渡され。それよりたえて。喜代七にもあふことかなはず。たよりせんにも傳手なくしてなま中ひとたびあひし身の。ほみなき別れに猶おもひまさりて。かゝるうきことのみ。かさなる身こそ便なけれ